夫人と電車を待合せて居た、余が挨拶すると、何處へ行くのだと問ふから、冗談に芳原へといふと、婆さん鹿爪らしく、芳原は屹度身を過る處だからお止し成さい、遊びたいなら私の處へ來なさいとて大眞面目で忠告と來、果ては道傍へ蹲踞み込んでの御意見に、余も辟易して、デハ見合せて眞ッ直に歸宅すると電車に飛乘つた。

婆さん、實は親切者で、福地櫻痴先生とは古い顔馴染だ、或る席上で、先生が一萬人の男に接した女は絶無だろうといはれると、お金は、私は一萬人からに逢ひましたよと、雛鳥の源氏名で芳原や新宿で稼いだこと、一夜に初見客が少くも何人で、それが月に積り年に積ると、ソレ一萬以上でしようと計へ立てるので、先生俄に遙しさつて平伏する、お金が先生何ですネエといふと、先生曰く、イヤお前に辭儀するのではない、一萬人に見えたのを禮するのだと例の口調で述べられたこともある。

婆さんは胃癌と醫師に宣告されて、然らば御最眞を戴いたお客方に告別しようとて、一同を招待の上、盛んに御馳走し、飲めや唄へやで、ハテは婆さん自身、一生懸命に踊拔き、踊疲れて打倒れると共に、盛んに血嘔吐を吐いたが、奇なるかな、ケロリと病氣も治つたので、當夜の招待で悲壯慘憺の心持で居た客も、舌を捲いて驚いたといふ、婆さん實に一個の女傑と申して宜からう。

善光寺詣り、尼公代理の尼美人

伊藤公一行は長野で藤屋ホテルに投宿された、翌朝先づ以て善光寺に參詣されたが、寺僧の案内で例の胎内潜りなるものも試みられた、是は大きな本堂の床下を一周するので、左手に錠のやうなものがある、眞ッ暗で寸分先も見えねから、手探りで進む間に、手が此錠に觸れゝば、現世に罪がなくて未來は極樂淨土に浮ばれるといふ言傳へだ、併し寺僧の案内があるので、一行の幾んど總ては現世に罪のない善人と成濟し得た。

茲を去つて、善光寺の住持寺たる大勸進に詣した、大勸進と大本願とは、孰れも正系の善光寺住職だとて爭訟し、幕府以來難解の訴訟とせられたものだが、品川子爵が調停して、正系住持の證據品たる彌陀尊像の一幅を收め、之を括りて兩寺交互に住持たることに決定されたそうで、其れが當時大勸進の手許に保管しあつた、室房も庭も頗る廣大で且美事なものだ。

之から更に隣の大本願に詣した、茲は伏見宮殿下等と御同胞であらせられる村雲尼公が住職であらせられるので、公も相當の敬意を表せられたのだ。

然るに尼公は折節京都へ御成の留守中ながら、折角の參詣ゆゑ、尼公代理が面會されるとのことで、公も吾々も清らかな一室へ罷り通つた、是は罹災後の假普請とあつて、大勸進ほど廣壯でなく、寧ろ新しいが手狹である、而して正面に御簾が垂れ、外にチョン髷の一老翁が控へて、何かいふと、御簾がスル〳〵と捲上る、トンと芝居のやうなシーンである。

御簾の中には、紫の法衣を着けた年若い美しい尼さんが居て、能くこそ御參詣で、折角であるから疏末ながら粗酒を呈すると丈け挨拶して一禮する、吾々が平身低頭したのは勿論だ、玆で御簾がまたスル〳〵と卸りる。

斯くて一同着席してからが大變だ、綿服ながら、帶を立矢の字に結んだ幾人かの女中が、最初に練菓子、次が壽司を供へた膳、次が麥酒と順々に忝しく捧げ出すは宜いが、其麥酒を酌するにも、恭しく注いで一禮の後、ズッと引下り、更に直角にまた恭しく麥酒瓶を目八分に捧げて進み來つて隣席へお酌をする、坐つたまゝ、ツイお隣へなどとは參らぬから、其手間取ることといつたら無い、痺を切らす所の沙汰ではない、併し主たる伊藤公さへ冗談口一ッ利かれぬから、余等風情何をか申さんやだ。

玆でシタゝか參つて旅宿へ歸ると、菓子折丈けは一々屆けられてある、何しろ善光寺で、尼公から賜つたのだからといふので、一同家苞にする、余も老母への土產として持歸つて、案の如くホクホクされた。

午後になつてから、大本願から尼さんが返禮に伊藤公を訪問されたといふので、公は代理として應接方を尾崎男に托された、而して余を顧みて、オイ貴公も一ッお介添役を勤めてみろといはれるので尼さんの居られる前二階の應接所へ參入すると、それは前刻御簾の內で尼公代理をされた紫衣の美しい尼さんであつたので、公が介添役を仰付けられた趣意も肯かれた。

此日午後城山館で市民縣民の歡迎會があつた、城山館は展望快濶で、松代の背景たる象山（松代の佐久間象山の名は此山から出たのだ）や甲越の大激戰地たる犀川などが畫の如く瞰視される、歡迎會の後、劇場で演說會があり、公も雄辯を揮はれた、議會其他は格別民衆を前に公開場での公の演說は恐らくは之が始めてであらう、演說の趣旨は素より立憲論及び政黨論だ。

演說が終つて散會する時、公の音頭で天皇、皇后の萬歲を主唱されたが、公が陛下といはれぬので、理窟ッぽい長野人中、早くも起つて之を難じたものがある、アハヤ事ぞと思はれたが、公が陛下といふ尊稱は二人稱で、至尊に對し奉つた時に申すので、今萬歲を奉唱する場合などに、陛下と申すべきでないと言はれたので、一同沈默し、無事に納まつた。

翌日長野市隨一の富豪で、自由黨員たる小坂順之助氏邸で午餐の饗があつた、玆も眺望が良いので公は城山館からの感想として一絕を咏じ示された。

長野の据風呂問題、公の四天王

一行中の尾崎男は、三條公爵家譜第の家來で勤王にも努力したので男爵に叙せられた、明治の初年に英國へ留學して、英國婦人との間に二女を擧げた、後年それが來朝しても、男は取合はなんだので姉の方（テオドラ孃）は、慶應義塾幼稚舍（小學部）で英語を教へて居られた、余の長男次男共に孃

の教へを受けたが、此孃こそ今の尾崎行雄氏夫人で、男も遂に公然親子の對面をされたと聞く。

此等の事實あるのを楯に、公も常に男を揶揄して、女に掛けては油斷がならぬなどと笑はれ、男も之には餘程當惑らしかつた。

藤屋ホテルに於ける優待は到れり盡せりで、公のため新に据風呂までも作つた程だ、余等の陣笠を普通の湯に入れて、公ばかりを新しい特別風呂に入れるのは、差別的に過ぎるとて、余が憤慨の果、新風呂が明いて居ると聞き、悠々玆へ入込み、湯番の老人に背中を流させ、何か冗談口を利いて居る時、湯殿の戸を明けて、また急にバタリ締た人がある、眼鏡を外し居た余には誰とも知れなんだが、後にそれが公であつたと知れた、併し何でもないのだ。

然るにそれが東京の報知新聞に記載され、公が大に怒つたなどゝ尾に鰭付けて彩られたが、實は大橋乙羽氏の惡戯と知れた、余が後に公に面謁した序、此事を申出ると、公はイヤ怒つたりなどせぬ、唯他人が入り居るのに、湯があいてるといつて、余に入浴を促した宿のものに一寸注意したまでだよと話された。

けれど此記事が相當に世間話しと爲つたと見え、余が松江へ參つた後、子息が德富蘇峰先生に會つた時、先生から、伊藤公の湯へ侵入した元氣は今も乃父にあるかネなどゝ興ぜられたといふ。

公の四天王と稱せられた伊東巳代治伯、井上毅子、金子堅太郎子、末松謙澄子四人中、井上子は、莊重典雅な文章が旨いので、余は早くから其風采を相望し居た、其文部大臣時代に永田町の官舍で始めて見參したが、瘦軀鵠の如く（鶴と申したいが、白髮白髯でないから、鶴といふのは事實に遠い）一言一句苟くもされぬ、疊み掛けて連發する余の質問にも、一應瞑目熟慮の上、徐に語り出されるといふ調子で、如何にも大臣らしい。

末松子は其顏が甚だ余に肖てるといふ世評なので、殊に多くの親しみを感ずる、子には美術思想も豐で、西ノ久保の邸は、古ぼけた昔風ながら、室には支那の陶器などを額面とし、また式紙を聯ね掛けるなど、一見美術家たることが判る程だ、我松江を瑞西のジュネーブに比較したのも恐らくは末松氏が始めであろう。

伊東伯は大の盆栽家で、其永田町の自邸でも、正面玄關のある本邸に住はず、門內の左側の別家に居られ、庭には一面盆栽が陳列されてある、何人でも玆で應接されるそうだが、茶菓を運ぶ女中は、大抵主人伯お手附の女性だとの評判だ、伯は如才のない、腰の低い好々爺に見える。

伊東伯は中々の富人だ、伯の談に、月給など最初から一文でも手を附けたことがない、兵庫縣で伊藤縣令公の下に屬官を務めた頃から、現に飜譯その他の收入で生活し居られたといふ、去れば伯の富めるも不思議はない筈だ。

伯はアレで伊藤公に對して存外に强硬だ、其書記官長辭任の際など、公は自身一升德利をブラ下げ

て、首相官舍の裏門から、翰長官邸に伯を訪ひ、且酌み且語りつゝ告別されたとは公の話だ、以て其關係が想像されよう。

伯は一時東京日々新聞の持主であつたことがあり、其爲朝比奈知泉氏の雇主であつたが、何故か氏が洋行して、バルカン半島旅行中伯から旅費の支出を拒まれたので伊藤公が心配し、仲裁されても聽かれぬ由、之も直話であつた。

日々新聞の持主であつた爲、彼の銀座尾張町の角屋敷をソックリ伯の所有とされたが、此地所は實は澁澤、大倉、益田三實業家の物の筈だとて、聊か異言は有つたものゝ、去りとて表立つて爭ふ人もない、此地所のみでも伯の身代は小でなく、殊に電氣株など夥しく所有されるといふことだ。

自分丈けが書生風で、野村子の黃夢庵

伊藤公は一個の詩人で、其ため大抵森槐南（一時祕書官たられたこともある）。矢土錦山、佐藤六石の諸氏を旅行などに隨へられた、殊に槐南氏には或る點まで師禮を執られたようだ、信州旅行の時詩人の隨行がないので、其作にも聊か不安があつたらしく、余や乙羽に川中島作の詠を示されたから、余が遮の字は仄でないだらうかといふと、公は俄に韻書を引出して、イヤ八庚の韻だ、之を見よとて安心と得意の體であつた。

巳代治伯も詩作では六石氏の添作を求められた、余への談に、六石は添作に妙だが、創作は如何かナ、自分の作も六石の訂正で六石以上の佳作になるなどと、大天狗であつたこともある。

伊藤公は自身極めて書生風であつたが、併し自身に對して書生風となり、禮讓などに頓着せぬのを恐ろしく嫌はれたらしい、同鄕同門の子爵野村靖氏が、兎角公の思召に叶はなんだのも、實に子の表裏のない書生風の故だといふ。

成程野村子の書生風は徹底したもので、余が初めて其內相時代に官邸へ伺候すると、アノ丸々とした容貌へ、縞の着物の着流しで、ォウ寒い〳〵、何といふ寒さだとて、突如應接室へと飛込まれるなど、純乎たる書生風で、それ丈け親しみがあり氣持も宜かつた。

子爵の別莊が小田原の海濱にあり、能く出掛けられたが、一夕余が箱根へ往く途次、同じ小田原行の電車の車掌臺へ突立ち、双手を外套のポケットに突込んで居る仁がある、能く視ると子爵なので、其下車される時挨拶すると、明日の日曜日に逗留するから是非來遊しろといはれる、氣取や飾りや絕無だ。

翌日塔の澤から江見水蔭氏を誘ふて子爵邸へ罷り出ると、丁度東京から謠曲の師匠も來たから一番聽聞しろとのことで、拜聽すると、流石に颯々たる松籟と謠と和して、可なり感興もある。

其前に子爵は、余等と海岸へ散策し、實は妻が出産毎に箱根の福住でする例だが、山まで往くのも

オツクウで、又不自由でもあるからとて、茲へ小別莊を設けたのだ、全くの出産のためだから、コヲウムといふ意味で黄夢庵といふ邸名を附けたのだ、黄粱一炊の夢なんテ洒落た譯でないのサと呵々一笑される。

併し幾番かの謠曲には、野人たる余等シビレを切らさゞるを得ぬのみか、恰も土地の俠客で且余等の宿所たる環翠樓の持主たる鈴木傳左衞門老が、地曳網を見物させるといふので、匆々に辭去して漁場へ往いた、水蔭氏も流石に子爵の書生風には驚いて居られた、伊藤公に好かれなんだも當然か。

併し伊藤公自身の書生風は亦素ばらしいもので、余が外遊の折、拜別を兼ねて大磯滄浪閣へ伺候した後、群鶴樓に投宿すると公は同樓滯在の大岡硯海先生を訪ふべく來られたが、細い縞の羽織の着流しに、折節照り付ける日光を避くべく手拭を頭上に乘せ付け、懷中に青表紙の墨子を入れたまゝ、庭木戸からノコ〳〵入込まれれる風采など、如何に好く見積つても片田舍の村長格だ。

更に公の邸へ參ると、公は余の賴みを諾して、駐米公使小村壽太郎侯（此時は男爵か）へ宛た紹介狀を與へられ、他の方面へは都築馨六（男爵）へ話し置いたから、同人から受取るようにとのことで、其親切には深く感激した。

後年余が萬朝報で、公の滄浪閣へ藝妓などを呼び入れらることを非難する論文を揭げると、公は余を引見された時、滄浪閣は別莊以下だから何を引入れても宜かろう、併し隨分思ひ切つたことを書いたものだナとて、微笑し居られた。

其後は餘り馨咳に接する機會を得なんだが、明治四十二年十月二十六日兇漢の毒手に罹つて敢なくもハルビン埠頭の露と消へられたのは、何とも以て痛恨嘆惜を禁じ能はぬ。

後に山縣公にお目にかゝつた時、公は藤公の訃を聞いて暗然としながら、伊藤は幸に死處を得た、私なども疊の上で往生したくはないと心懸けて居るがと語られたが一語極めて沈痛だ。

第十七　拳匪亂に從軍の一端

太沽砲臺内の汚穢、判らず屋の由比參謀

明治三十三年の夏、例の拳匪の騒ぎが支那で持上り、列國と清廷との大交渉が始まつたので、余は社命を帶びて北京へ乘込むこととした。何分にも外遊からの歸朝早々なので、大いにハイカラ振を發揮して、北京外交界の眞相を窺ふなどと、ホワイトシャツのみ一打も行李に詰込んで出發した。

トコロガ神戸まで往くと、國交斷絶の報が傳はり、北清との航路も杜絶したから、此の上は陸軍の厄介となつて御用船に便乘を請ふの外はないので、直に電報で其手續きを爲し、兎も角廣島まで往いた。

首尾能く便乘を許され、五年振りで宇品軍港に往いた處、廣島聯隊の一個大隊が出發し、同時に參謀本部から福島安正少將が同行することとなつた。乘船すると髯から顏を出したやうな輜重大佐水島正道氏が面會を求められた。是は余の從妹の嫁した王子製紙の技師水島鉉四郎氏の令兄で、豫て寫眞で余を見識つて居られたのだとのことだ。種々の厚意を受けて、玆に從軍記者と早替はりした。

船が太沽沖に着いても、卽時上陸は出來ず、二日程沖合遠く碇泊した、船中から眺めると、陸上遙に黑煙が渦まき上る凄じい狀景も見え、又時々砲聲も聞かれるが、當時は無線電信があるでもなく、僅に大沽砲臺を占領した我海軍部隊からの稀な信號のみが便りだから、何一ッ陸上のことは判らぬ。其爲、船中では出放題の說が傳はつたが、所詮シップ・ゴシップで何等取留めたことはない。

斯くて三日目の夕景、船は進んで日英露軍艦の碇泊する間を迂り端艇で順次上陸して、取敢ず太沽砲臺内の宿舍に入つたが、端艇が白河の河口に入ると、清兵の死骸が浮きつ沈みつ、ブクリと不意に端艇の直ぐ側へなど浮ぶので、餘り氣味能くはなかつた。

宿舍に就てから、砲臺外の模樣を見るべく白河の岸に沿ふて進むと、水の涸れた葦の間に、處々に清兵の死骸が横はつて居る、或は清人が水桶を擔ふたまゝ、流れ彈に當つて倒れて居る死骸もある、二十八年には大連旅順營口間を巡つたけれど、死骸を見たのは實に今度が始めてなので、何とも言へぬ不愉快を感じた。

宿舍といつても、豚小屋同然のものだ。砲臺守衞の兵卒の居た處でもあらう、處々へ石ころを加へた泥を築き上げて、低い狹い、唯細長い家とし、三尺程の入口と、之に添ふた二尺四方位の明り窓があるばかりで、室内には泥を小高くした處に藁が布かれてある。卽ち寢臺ででもあらう、全く以て豚の住居である、支那の家の字を見ても、豚の居る處として異存はない。

砲臺と申しても、四方へ高く土山を築き、殊に海へ向けて一段高くした丈けで、置去りらしい二三の砲門がある丈けだ、尤も中央平地の正面には、平家ながら官署らしいのがあり、福島少將一行と、大隊長などの宿舍に充てられる。

食事には、例の飯盒で飯、副食物としては唯小さい牛肉罐詰一個のみ、照明用には金網張りの小提灯一ッ、之を東京朝日の上野靺鞨、國民の濱田佳澄、時事の安岡秀夫、讀賣の永田新之允の諸氏や神戸又新、京都日の出や、岡山廣島邊の記者諸氏と彼是十人程で會食するのだが、暑苦しくはある、副食物は不足で、誰しも滿腹などしたものはなかつたようだ。

翌日余から參謀の由比中佐（土佐人で獨逸歸り早々の仁、後に大將にまで昇任した）へ、牛肉などでなくとも、福神漬ようのものでもよいから、人數に相當した副食物をと請求すると、中佐は威丈高になつて、此場合其樣な贅澤をいふナと腹を立つ、ィヤ途方もない先生だと呆れて引下がつた。

尾籠な話ながら、便所のことを附記する、支那人は別に便所の設けがなく、垂流し主義だから、此砲臺内にも極つた便所がない、それに兎に角何百人かの我兵一大隊が入込んだので、急造便所として、余等の宿舍外に平行して長い穴を穿ち、玆へ横板を架して、之に跨がり用便する、ィヤ汚くもあり、臭くもあつて、一同の苦痛は言語に絶する、是は餘儀ないことながら、ホヤ〳〵のハイカラたる余には、由比中佐以上に感ぜざるを得ぬ。

盜泉を飲まぬ意味、露兵の不人望

太沽砲臺内へは二泊した。翌午前三時には强行軍で天津に向ふとのことで、兵站部から飲用水を手渡するといふので罷り出ると、吸筒へ濁つた湯を入れて呉れた、是は飯を取つた跡釜の底へ湯を入れ、それを吸筒に移したのだ、或は道三湯の流儀か知らぬが、見た目も宜くはない、飯の焦けた香ひが鼻を衝く。

それでも不快不潔な宿舍を出でゝ、清爽な大氣中を進行するのが快かつた、唯前日來食事が不十分なのと、日中の暑いのとで、盛んに渴するには閉口した。

一寸した村邑らしい處に入ると、鷄や豚がウロ〳〵する丈けで、支那人の人影一ッない、試みに空屋を覗くと、水瓶はあつても全然カラだ、或家のに少し底に水があるから飲むと、甚だ臭くて多く呑み能はぬ。

日本では村落があり人家があれば、必ず井戸があるか湧き出る清水がある、それが此邊では絶無である、稀に路邊の溝に少し溜りがある位で、それも蒼苔が生へて、日光にキラ〳〵と脂氣が浮いてゐる、到底呑むべくもない。曾て渴しても盜泉の水を飲まずといふ聖人の文句を見て、何だ馬鹿〳〵しいと思ひ居たのも、玆に至つて始めて水の貴重さを知り、同時に盜泉云々の文句の眞價を悟るを得

た。

正午近くに軍籠城に着いた、玆で一寸辨當を遣つたが、場所は畑中らしい鐵道線路に沿ふて、乞食の掛小屋らしく日光避けのアンペラのある內だ、食事しながら聊か風を入れる。

軍籠城からは、汽車に乘る豫定であつたが、それがない爲、軍隊も餘儀なく徒步を續けた。白河の堤上などは、丸で灰の中のようで少し風が吹くと土煙朦々として全く天日も見へぬ、黃塵萬丈とは能く曰たものだ、暑さは暑し、一統の疲困は申すまでもない、余はヘルメット帽を風にさらはれた、堤下へ轉け行くので、棄て去ると、跡から軍人さんが拾つて吳れた。

余は渴する餘り、旅費の大半を割いても、一個の水瓜が百圓でも買ひたいと思ふ程だ、それで或る瓜畑に小さい林檎大の甜瓜のあるを發見し、カブリ付くように口にしようとすると、濱田君が分與せよといふので、其半を割いたが、實に此時程惜しいと思ふたことは稀だ。

休憩中、馬上の福島將軍が弱つたかと問ふから、渴したことを話すと、矢張騎馬の將校を顧みて何かいふと、其將校が吸筒を渡すから悅んで飲むと酒なので、寶丹と併せ飲んだが、彌よ渴を加へた。

天津に近い頃から、ボツ〳〵林もあり、人家も見える、併し人一人居らぬ、剩つさへ家は燒かれるので、渦まく煙が襲ふて益々苦しい、而して露のコサツク騎兵が時々出沒して、猜疑らしい目を注ぐなど、不快益々甚だしい、彼等が我兵の體軀矮小なのを侮つて居ることは、其目付でも明白だ。

余も弱つたが、兵士は更に弱つたらしい、背囊や銃を下士などが代つて持つたり、弱つたのを扶けつゝ、露西亞兵などが彼樣にして見て居るから、玆で弱つては我が軍隊や國の名譽にも關するゆゑ、是非辛抱しろよと聲涙併せ下る體で言諭すなど、實に感激に堪えぬけれど、尙且ゴロリ〳〵と道傍の畑や小溝へ落伍するのもあるなど光景全く悲壯を極めた（此落伍兵は、天津に居た我海軍の陸戰隊衞生部から擔架で拾ひ上げたから、總て無事なるを得た）。

我軍隊が彌よ天津の白河對岸まで行くと、向ふ岸には多くの西洋婦人などが、頻にハンカチーフを打振り〳〵歡迎するのも見える、露西亞兵は素より彼等歐米人を虐待せぬけれど、何しろ野蠻で何をするか判らず、危險千萬だと恐れて居たのに、今堂々として日本兵が到着したとて、斯くは歡喜雀躍するのだとのこと。

余は小舟で白河を渡る時、船緣から眞ッ黑なドロ〳〵した泥の如き白河の水をも餓鬼の如く掬ひ飲んだ、渴し拔いた揚句で、當時のことは今思ふても慄然とする。

新聞記者の遭難、英國兵の贅澤

余等記者の一行は、天津で先我領事館に入つた、既に點燈の頃であつたが、玆には避難中の居留民も居、海軍陸戰隊の衞生部もある、余は何よりも渴を訴へ、多くの水を求めたが、バケツに一杯持つ

て來て吳れた、聞けば水道の水で、是は白河の流れを明礬で淨めたのだが、其爲か聊か明礬の色を存する、本來白河は泥の流れであるけれど、水質は良好だとのことに、余はコップでシタタカ飲んで、始めて堪能し得た。

晩餐には副食物は菜ッ葉漬と煮豆のみだが之を茶漬る旨さといつたら無い、洋行歸りで食物が矢釜敷くなつた余も、其れ以後菜ッ葉と煮豆とで滿足することと爲つた、苦驗は人に取つて實に價格の貴いものである。是で前日來不足勝の腹も滿足し、念のため惡水を飲んだ豫防藥を貰つて、その夜は應接室の長椅子で快眠した、是も極疲の結果であらう。

翌日は割當てられた宿舍に移つた。玆は表が支那式の官署らしく四面を長廊で圍んだ型の立派な家で、之を大隊本部に充て、其れから奥まつた廊下續きの純洋風の石造家屋が余等の宿所なのだ、大小兩室が續き、折曲つて更に一室がある、飾りこそないが、先づ堂々たるものと評して宜い。

宿舍に落付いてから、始めてシャッなどを着替へ、大隊本部に近い臨時司令部に福島將軍を訪ふと折節青木大佐（宣純氏）と衞兵を侍らせて捕虜の一支那人を鞫問中だ、彼は後手に縛られた薄痘の男で前には燒釘やら鐚錢やらがある、間諜の嫌疑だが、實は兵燹地で何か拾ひ取らうと欲張つたので、將軍は大佐と合議して釋放と取極められたが、余には尙流彈の危險がある故、外出に注意する樣話さ

轉じて英國居留地へ行いて見た、守備の英國兵はテント張の中にハンモックを架して寢臺代りとする、余が士官に飲水を吳れぬかといふと兵士に言付けて、ポン〳〵炭酸水の壜を拔かせる、其贅澤振りは日本兵などと比すべくもない。居留商は舖を閉ぢて居るけれど、店内では依然商ひをする。余は二瓶の葡萄酒を購ふた。

宿舍内は、蠅が多くて飯椀などは見て居る中に眞ッ黑になる程だ、晝寢をしようとしても蠅が五月蠅て眠り能はぬ、支那人のボーイが葦簾を持つて來て窓に掛け、極めて徐々に卸す、是は室内が薄暗くなるに隨つて蠅が窓外に飛去るので、支那人も其邊に掛けては中々巧者だ。

翌日志賀龍湖氏（神戸新聞）などが遣つて來られた、小林天龍氏（萬朝報）が死人同樣で來たといふので、驚いて大隊本部へ行つて見ると、今擔架から卸されたまゝの天龍氏が洋服に脚絆掛けといふ支度ながら胸には吸筒やら望遠鏡やらをゴチャ〳〵掛けて、軍醫に胸をハダけられて居る、全く絶息したのだが、日射病で道傍へ倒れ、擔架で運び込まれたのだと云ふ。

軍醫がナイフようのもので堅く結んだ齒をコヂあけ、口中へ藥液を垂らし込むとウウと呻きさま胸が波立つように見へる、而して一度ボカリと眼を明けて復閉ぢた、軍醫がモウ大丈夫だとて、直に余等の宿舍へ擔ぎ込ませた。

彼等は第二後發隊に附いて來たのだといふ、矢張暑氣に中つたので、大隊長は同氏のことを頻りと

余に聽いて居た。

夜になると、天龍氏は大きな寢臺に横わつて居る、最早過半正氣附いたのだが、濱田氏と余とで枕頭で看護する、一方では又蠟燭を中央に、連中が司令部寄贈の麥酒を飲んでゐる、天龍氏は頻りと一盃飲まして吳れと合掌までする、イヤ今が大切な時だから、タツタ一晩我慢し玉へと、辛うじて納得させ、先づ以てオモ湯を啜らせたに止めたが、翌朝はケロリとして起上り、余等と同じく顏を洗つたり、食事したり、果ては麥酒をも傾けるといふ元氣振となられた。

戰爭の悲慘を痛感、死が恐ろしくなる

天龍氏を案内して、領事館に往つて見ると、驚いたのは、其柵外の隣地一丈四方位か一面血塗れになつて居るのだ、玆へ繫がれてあつた一頭の馬匹が、天津城内からの砲彈に當つて粉微塵になつたのだといふ。更に館の最上層からは、天津城が見へるといふので、其屋根上まで登ると、玆に軀幹長大な海軍將校が、白服に紺脚袴で頻に望遠鏡を覗いて居られる、是が島村速雄大佐で、太沽から來たのだとのことで、大佐は親しく屋根上へチヨークで線を引きつゝ彼我の形勢を說明される、是が機緣で、大佐が薨去されるまで交際し續けた。

望遠鏡で視ると、天津の城壁には、例の大きな旗が幾んど隙間の無い程立て並べられてある。玆から當途もなく時々大砲を飛ばしたり小銃を發射したりするといふ。

一日上野靺鞨氏の案内で、元邦字新聞社のあつた場所を訪ふた。極めて新しい和洋折衷建の長屋風で、人一人居らぬが、新聞や書籍が階上階下に散亂して居る、其隣家の樓上に、赤毛布の上に士官が居た、前日新に到着したのだといふ。去つて郊外を見ると城門らしい處に我が哨兵が居て、野菜籠を擔つて來る淸人を手眞似で追返すのや、堤下處々に、武裝して潛み居る衞兵などを見た。

明くる日司令部へ往くと、卓子の上に葉卷煙草の空箱に、水が供へられ、側に麥酒の空瓶に、赤いゼラニウムの花が挿してある。將校の話に宿舍で敵の砲彈が屋根に落ち、其天井下に居た將校が中つて死んだのだといふ、其れが前日余等の遭ふた將校だと聞いて、轉た無常を感ぜざるを得ぬ。

更に聞くと、福島將軍の馬丁が紺の法被を捲りながら、少將に添ふて威勢能く駈る中、忽ちクルクル舞して打倒れた、是は流彈に中つたのだとのこと、何といふハカなさであらう、熊谷蓮生坊でなくとも、感慨無量ならざるを得ぬ。

余等の宿舍にも兵卒が侵入し來つた、初年兵で未だ一度も演習に出たことがないのだといふ、其爲、余等は折曲つた一室の方へ縮込められた、此兵士等鄕里へ郵便を出すとて、其表書を余等に依賴するは宜いが、氣持が惡いから、葡萄酒を吳れなどゝ、余が英國居留地から買つて來つたのを乞はれて、斷る譯にも往かず、彼等も余等が買つた苦心など素より知らぬ。

余は渴した餘り惡水までも飲んだ故か、下痢を催して容易に治せぬ、夜中便所へ通ふのに、洋室の玄關を出て左折すると、玆には數頭の軍馬が尻を並べて居る、其間を拔けて行くは未だ宜いが、時々砲聲が聞へ、彈光も見えるので、若用便中敵彈が屋根へなど落ちたら、從軍中一死素より分とするも便所往生では恥だからと思ふて、此時ばかりは我にもなく臆病風に襲はれざるを得なんだ。

軍の狀況は、軍機で窺ひがたいが、天津城攻擊位はその中にあらうけれど、北京へ進攻など今の處見當も立たぬ、一應歸朝して出直すも宜いと、福島將軍は密に話された、それに領事館に居る避難者連中も引揚げるといふので、記者團の大半も、一旦引上げることになり、匆々乘つたのが露西亞船だ。

軍隊ばかり乘つて居る、食物とては大布袋にある落花生位のもので僅に一士官からチキンの湯煮だのを少し貰つたに過ぎぬ。

白河の岸に、生々しい淸兵の死骸を喰ひ、口邊を血に染て居る滿洲犬も見へる、實に凄愴な光景で、船上からピストルを發した人もあつたが、犬は唯此方を見詰るばかり、中々獰猛だ、滿洲で思はしいマラソンの出來ぬのは、途中この犬に襲はる爲だと聞く。

夜半不圖見ると日本の汽船がある、良しとばかり乘移つて、稍眠りかけると是は夜明けに拔錨して上海に向ふのだと聞き、一同驚いて起し合ひ、匆々に下船して、船と船とを傳はりつゝ上陸したのは恰も東雲の頃であつた。

夜が明けてから見ると、玆は太沽の上流約一里の塘沽で、新に設けられた露西亞の守備隊もある。玆で水を求めた處、言語が通ぜぬけれど幸に有附き、一同徒步で太沽に向つた、途中で報知の特派員佐藤紅綠氏に逢つたが、同氏は兎も角天津へ向けて前進した。

芝罘を迂回して歸る、富田幸次郎氏の放屁責

太沽に着くと、砲臺上には我海軍隊が守禦を受持つて居る、其好意でピスケットの馳走に有附く。

玆には從軍記者として岡田嶺雲氏や石川安次郎氏が居た、芝罘まで水雷艇が行くといふので、安岡小林、志賀、其他の諸氏と之に便乘した、石川氏も同行した、嶺雲氏だけは殘つて更に天津に向ふとのこと。

水雷艇に乘つたのは始めてゞ、其發射管などを見學して、可なり益を得た。支那の海は、黃海は名の如く、而して楊子江口近い海も泥色だが、芝罘のみは珍しく蒼々として、山海の風色特に鮮かで氣持ちが宜い。

取敢ず日本人のホテルに投宿したが、一行の半はアストルハウスに入つた、日本の領事館を訪問して種々の情報を耳にした、何分北淸は戰時狀態なので、玆でも淸兵が入込んで、日本人を攻擊するとか何とか流言され、居留商人などは仕事も手に付かず心配して居る、全く人心恟々たる狀態だ。

處で當夜雷鳴などがあり、電光凄じいので、余等は何事もなく、夜を過ごしたけれど、アストルハウスの連中は、シタヽカ狼狽して、石川氏などは行李を引摺ながら、夜半海岸まで逃出した程で、跡でこそ笑話柄となつたが、當時は幾んど活きた心地もせなんだとは左もあらう。

芝罘からは長崎へ往く海軍の御用船肥後丸に便乘した、名にし負ふ郵船會社の優等船であり、ケビンも一等で、天氣は快晴、海上は波靜かといふので、一同大元氣だ。

余は二十八年戰役から、支那名物の南京蟲には免役となつたが、天龍氏などは蚯蚓腫となり、跡へ膿を持つて大分凹垂れて居られた。

凹垂れるといへば、余と同室した土陽新聞の富田幸次郎氏（今の憲政會總務）が芝罘から引返すとき便乘したので、飲み過ぎが喰過ぎか、特に胃腸を痛めたとて船室内で盛んに瓦斯を放散することだ、晝間は甲板に出て居るから宜いが、夜間は暑くはあり、臭くはあり、全く以て凹垂れた。

長崎へ上陸すると、長崎日ノ出の社長鈴木天眼氏の主催で、紅陽館といふ所で歡迎會が開かれた、暑い長崎でも、茲は木蔭の涼しい處でもあり、夜間でもあり、天眼氏には久し振りなので、極めて愉快に覺へた。

長崎では上野屋といふへ二泊して、更に龍湖氏と武雄溫泉に一泊した、外湯ながら、中々好い湯である、巨巖の景また惡くない。

門司でも亦歡迎會の催しがあつた、茲へは白河鯉洋氏も出席し居た、一行中では本社の指揮を仰いで、更に從軍すべく天津へ戻るのもあり、其まゝ歸社するのもあつたが、余は安岡氏と同伴してズツと歸京した、氏は實は新婚早々從軍を命ぜられたので。何よりも差急ぎ旦勇みつゝ歸京されたのだ。

歸社すると、余の名義で從軍記が殘つてゐる。不思議に思ふて聞くと、出發後、杳として音信がないので馬關や門司の新聞にある御用船員の談を綜合して、然るべく揑ち上げたのだといふ。此御用船の談といふのが二十七八年役の上海電報以上にヨタを飛ばして、支那式の流言蜚語を眞に受け、更に尾鰭を附けたもので、シップゴシップどころの沙汰ではない、有りもせぬ戰爭を有つたと麗々しく、然も軍談講釋流に、張扇型に叩きまくるのだから、何とも以て言語道斷だ、何が何でも、記行文でも通信すれば宜かつた、それをせぬのは余の罪ながら、戰報といへば檢閲までも受けて、精確專一とせぬばならぬのに、此爲體では今更記行文さへ出し能はぬので、余の困惑は一方でなかつた。

余は外交狀況視察のため、ハイカラ發揮が急變しての從軍で、可なり健康も痛めたので、暑中休養をかねて面白からぬ日を送つて居る中に、幸德秋水氏から萬朝報へ來ぬかと黑岩涙香氏からの勸誘があり、臼井氏なども始めは中央に殘るべく勸められたが、後には轉ずる事に同意もされたので、秋になつてから、竟に決心した、此年（卅三年）八月に政友會成立の手が進み、九月發會式が擧げられたので、余が品川子爵への義理で去たなどいふのは、當時虛傳の一ッに過ぎぬ。

第十八　萬朝報時代

大隈侯の舊邸、珍奇な家屋

萬朝報は、其夕刊を發行するに至るまで四頁新聞で押通した、文章簡潔、寸鐵殺人の筆法で、要領を得て、キビ〳〵して居ることが實に其最大特色で、之が恐ろしく人氣に投じて當時の東京新聞中、全く無双の名を恣にした。

それも其筈で、記者は多士濟々で、然も總ての原稿が名だたる大記者の洗錬された文章に書改められるので、六號活字の原稿紙さへ有つた。

即ち編輯長から原稿（通信や外交員の提出した）を分配すると、之を幸德秋水、堺枯川、緒方維嶽鈴木省吾、松居松葉、佐藤紅綠といつた記者の手で書かれる。

余の出社匆々、驚いたのは、三十間堀一丁目にあつた編輯局だ、即ち煉瓦屋ながら、編輯局たる二階の大廣間は疊敷で、玆へ昔の寺小屋然たる日本机が並べられ、記者は總て大跌坐で濟まして居る。

初めて論文を書いて出したのが十月二日で、紳士の本宅へは藝妓などを入る可らずとして、伊藤公をさへ例に引いて攻擊した。然るに其前日は社長たる黑岩涙香氏の誕生祝ひが麻布の邸で開かれ其園遊會には山田藤吉郎氏などの寄附で、赤坂の藝妓が多數繰込んで、餘興やら周旋やらしたもので、余の論文を見て流石に一統擽つたく感じはしたもの丶、理窟が理窟だから微苦笑で濟んださうだ。

間もなく社は同じ京橋の弓町へ引越すことと爲つた、大隈侯の建築された舊邸（侯は次で麴町區九段下へ移られ更に早稻田へ引越された）なさうで、土地も四百坪未滿添られてある、前が二棟の洋館、奥が純日本式だ、黑岩氏は始めて新聞社として土地を得たのだとて其地の底から天上までも一串して新聞の所有で、何人にも侵されぬとて、大得意で永い幾日か續きの廣告文を書かれたものだ、其中に地所は一千坪に滿たぬけれどとあるので、大橋新太郎氏が余から此の話を聞いて、僅に四百坪に足らぬ地所を千坪に滿たぬといふ、而して其れが虛言でない點に黑岩氏の文の妙があるとて、酷く感心してゐられた。

偖此家屋が珍妙で、右手洋館に續いた日本家の方は、唯階上に四疊半一室（洋館とは中庭を隔て、鐵橋で聯絡する）があるのみで、他は悉く平家だが、玄關を上つてから廊下で北へ向ふと右手に二室があり、曲つて十六疊と次の間の六疊とがある、而して廊下右手の二室の奥に又奥庭を北に控へた二室がある、是が大隈夫人の居室なさうで、木材は總て宜いのを用ひ、板戸などは日向杉の一枚板だ。

それから日本家の裏手が西中通に面する三等煉瓦長屋で、玆を印刷所とした。

唯是れ丈けながら、珍な第一は十六疊の客間の正面床板(疊床)をメクルと二尺四方の拔穴があり、床下から裏の三等煉瓦屋へ通ずる。

第二は此客間の次室六疊は佛間だが、佛壇の下、九尺の黑塗の處をトンと叩くと、其三尺丈けがガン燈返しとなり、玆からも同じく裏の煉瓦屋へ斷拔けられる。

客間に添ふた便所にも、亦拔け穴がある、玆からも同じく裏手へ拔け出られる。

最も奇なのは二階の四疊半で、玆は女中の室らしいが、其押入れ内の横側にまた拔け穴がある、横板の少しの凹みをつまんで、本箱の蓋を外すやうにすると、其拔け穴が作つてあり、玆から出ると天井裏で、左右に欄の附いた床道がある、之を進むと夫人室の天井裏から一方は奥庭へ、一方は裏手へ拔け出られるやうになつて居る、實に余も生來初めて見た奇怪な構造だが、是は明治初年に多くあつた刺客の暗殺を避ける爲のものだといふ。

余が曾て紙上の「机の塵」へ木村粂市氏が安田家へ取入り、若い息子連を煽がして新橋邊を泳ぎ廻るなど書いた處、黑岩氏から、實は此新社屋を買ふのに、木村の周旋を煩はしたので、其謝意旁々前夜山田藤吉郎氏と二人で、木村を或る待合へ招待した程であるのに、今朝は此記事で實に當惑したと話されたこともある。

日露戰爭が開かれてから、黑岩氏は最初四萬圓で、新橋側の博品館を買へとの說もあつたが、當時金が聊か不足で、それが出來ず、後に八萬圓で此弓町のを買入れたのだが、折角の儲金を拂ひ盡して、今や戰役に對して、心のまゝ十二分の設備を爲し得ぬのは失敗であつたと後悔し居られた。

天城と圓城寺、記者の技量

萬朝報に隱れた名記者が一人あつた、天城安政氏とて、高等商業學校を優等で卒業し、大倉組に聘せられて、神戸支店長となり、技倆を一般に認められたが、遊びが過ぎて罷むるの餘儀なきに至り、朝報社に入つて經濟部長となられたのだが、黑岩氏も此人には一目を置いて居られた。

如何にも筆が洗練されて、何の花もないやうだが、實に言ふに言はれぬ味があつた、上品で、然も痛烈で、實業界の有眼者は頗る畏憚し居たといふ。

氏は黑岩氏に對しても無遠慮な批評家で、氏が理想團を作られた時、余は理想を行ふには、義のある所千萬人と雖も吾之かんで宜い筈だ、何も多數人の團結を要すまいとて反對し、天城氏は超然として斥けられた、常に曰く、黑岩氏も理想などといはず、溫袍を着込んで、咬へ煙管の大胡坐で、親分然と構へるのが一番適任だと。

氏は養鷄に趣味を持ち、大森の家でそれにいそしみ居られた。其鄕里靑森から、眞鱈を取寄せて余に贈り、雲腸の美味を敎へても吳られた、不幸肺患で、余の去つてから間もなく死去された、一蹉跌

から大いに其手腕を揮ひ得なんだのは、洵に惜むべきだ。

天山圓城寺清氏は、早稻田出身で、我家に居た片岡孤節や中央の田村三治氏等と同窓だ、當時の首席は栃内正六氏（今は後醍院姓、大阪朝日に居る）であつた程で、天山氏は學業成績寧ろ中位にあつたけれど、記者となつてからの財政眼は素晴しいもので、萬朝報の財政論は爲に天下に重きを成した。

當時元老中の財政通たる井上侯は、天山は凡そ幾人程の助手を使つて調査するかと問ひ、一人だも使はぬと聞いて、其才腕に敬服をして、之を都築馨六男に語られ、男から三井系統その他にも話されたので天山氏の名聲は彌よ揚がつた。

余と天山氏とは入社前からの舊識なので、同社以後は殊に親しく成り、遊ぶことから、始めて高利貸を煩はすまでにも至つた。天城氏も其名人で、高利を借りて机を買ふなど、考へれば愚の骨頂ですなアなどと余を評されたこともある。余は天山氏と屢々連帶で高利を借りて、思はぬ失策をしたこともある。

余の父が病死して、其ため歸省し、恰も法會の最中東京から電報があつた、曰く家財差押への處分を受けた、如何すべきかと、余は爲に顏から火を發した心地したが、實は天山氏が分擔額を支拂はぬので、却つて余の方を差押へたのだ、依つて同氏に電知すると共に、小林天龍氏にも取計らひを求むべく電報した。

歸宅すると案の如くで、兎に角始末は付いた後であつた。天山氏財政論に掛けては水も漏らさぬ精密家ながら、自個の財政には全然無頓着だ、而して是れが我黨同人の本色で、單に天山氏には限らぬといふことで自分に望んだものだ。

天山氏は絶えず進歩黨本部に抵り、其處でも重きを置かれてゐたが、雄辯家である上、態度も堂々として風采は故近衞公に肖て居たが、自分では尾崎咢堂さんに倣ふといふことであつた。

明治四十一年秋、余が臺灣に往かうとすると（當時余はやまと新聞に居た）天山氏から電話で、送別旁紅葉館で一酌しようと申込んだが、余は一寸多忙なので、歸京してから、土產話でもしながらユックリ逢ふと返辭した。斯くて船から基隆に上陸して直に汽車に乘込むと、備へてあつた當日の臺灣新聞を指しつゝ、池邊吉太郎氏（鐵崑崙）から、圓城寺が死去したとあるが驚いたと、余に其新聞を示される、成程東京電報としてそれが報ぜられて居る、余は晴天の霹靂も啻ならず、電話のことなど語りつゝ半信半疑で臺北へ着くと、先着の緒方維嶽氏が居て、天山氏は腹膜炎で手術後死去したと自分方へも電報があつたと告げたので、始めて之を確めた。當年夏以來盛んに飲んだ爲、腹膜炎を再發して佐藤病院で手術したけれども効がなかつたのだと歸京後に聞き悵然たること之を久しふした。

內村鑑三先生、附たり山縣斯波兩氏

萬朝報の一大明星として輝いたのは、何といつても內村鑑三先生であることは誰も否定し得まい、先生の朝報讀者、殊に青年讀書人の間に於ける信望は實に驚くべきものがあつた。

黑岩氏をして理想團を組織させたのも先生だ、黑岩氏をして哲學研究にまで突進させたのも先生の力だ、總てに徹底的な黑岩氏をして、會ては社會の罪惡面は勿論、個人の私行上の缺點にまで立入つて犀利峻烈なメスを揮ひ、竟には蝮の周六なるニツクネームを得た黑岩氏をして、英雄首を廻らせば卽ち神仙で、聰明叡智な哲人たらしめんとしたのも實に先生の力といはざるを得ぬ。

去れば黑岩氏も常に先生として一方ならず崇敬し居られた、先生が青年渴仰の的となり、爲に淸新な多くの讀者を惹付け得たのを德として、社から感謝狀に添へて金時計を贈るに至つたのも、實に偶然ではない。

先生を中心として、社內の有志で每月一回槍屋町の淸新軒で晩餐旁談話することにしたが、玆に出席するのは黑岩氏を始め、山縣五十雄（蟲湖）斯波貞吉、幸德秋水（傳次郎）、堺枯川（利彥）及び余等で、其別働隊としては、今の社會主義者の學究石川三四郎氏や、朝鮮事件中の唯一女性として名高かつた影山秀子事、福田秀子なども別に此一團と會合した、此女性頗るノンキ家だが、口の良くない秋水、枯川等は「妾半」などと綽名までして居た、是は秋水が其師中江兆民翁のため筆を把つて述作した「一年有半」から思ひ付いた名稱だ。此別働隊は大抵銀座一丁目邊の牛肉店で、牛鍋會を催すが例で、石川氏は秀子女史の家にゐた、或は種々の噂もあつたが、余は深く知る所がなかつた。

先生が退社され、秋水一派は社會主義者として相別れて以來も、先生と山縣、斯波兩氏及び余とは依然每月例會を續け、且山縣氏の發議と案內とで、一寸變つた食物店を漁ることにし、鯛のガラ煮を以つて名高い濱町の小常磐や、木綿問屋の軒を聯ぬる間にあつて、野菜の付上げ（精進揚げ）で有名な家をも尋ね〳〵て行つたこともある、後には東京驛內の精養軒などでも會合し、今も依然續けられて居る。一寸食道樂のやうだが、併し費用を問はぬといふ程の贅澤でもない。

此山縣氏は、東大の英文科を卒業までされなんだけれど、英文に掛けては稀有の天才で、日本人の英文は兎角和臭を脫せぬといはれるけれど、氏のに限つて、全く英人の能文家が書いたのに異ならぬそうで、其萬朝報に揭げる英文も岡山邊の中學校などでは、敎科書の參考や、會話用に供したといふ、爲人極めて正直で、人格洵に高い、後に頭本元貞氏の後を承けて、京城のセウル・プレス社を經營し、朝鮮統治に對する英米人の誤解を釋くにも努力するなど、其の効績の稱すべきものが多い。

斯波氏は始め學習院に入り、次で英國のケンブリツヂ大學に學んで、圓滿なゼントルマンだ、其最近の補缺選擧で東京府郡部に打つて出るや、內村先生も情誼上捨て置きがたく、應援演說會で雄辯を

揮はれたやうだが、先生として、全く情誼のためで、衷心の苦痛は嘸かしであつたであらう、是は斯波氏の人格が問題たるのでなく、憲政派から擁立されて、兎に角一の黨人となられたからだ。

斯波氏が候補戰中、運動者に擁せられて戸別訪問をした時、小用を足す遑なく、大に辛抱したが、或る家で頭を下げる拍子に思はず漏れたので、其ズボンが大なしになつたといふ珍談もある。その夫人は高等女子師範の出身でお茶の水高女で久しく教授をした爲、勳位まで持つて居られるが、夫たる斯波氏は却て布衣だから、公式の儀禮には、夫人の下位に卽くなどの珍事もあるとか、珍といへば此夫人に關連して記すべき一挿話がある。

公正無私の一哲人

高等女子師範の教授野口保興氏の名で、博文館から日本地理書を出版して、余に批評を求め來つた我鄕國越後の部を見ると、物產などにも錯誤がある、更に精覽すると驚くべき間違ひがあるので、余は殊に論文で之を攻擊した。

一日斯波氏の紹介狀を持つて斯波夫人が余を訪はれ、其師野口氏のため釋明されたが、それに依れば、該書の著者は氏でなく、氏は唯著者たる名義を借されたに止まる、併し假にも自分の名を出す以上、責任上十分目を透して、甚だしい錯誤のないやうにすべきだが、不圖其れをせなんだのは、何とも申譯がないといふにあつて、余の論文を如何しようといふでもなかつた、唯余は夫人が言ふべきを言盡して餘蘊なかつた才辯に感服した。然るに後に聞くと、該書は評判甚だ惡く、僅に六七册賣れたに止まつて、(皆返却された)博文館でも例のないことで、流石の大橋新太郎氏も、出版主任の內山正如氏の不用意を怒り責められたといふ、此事實は一面また萬朝報の勢力をも示すに足るから敢て記し置く。

日露開戰の切迫するや、朝報社內には開戰非開戰の說が共に高かつたが、黑岩氏が自ら筆を執り、標題二號活字本文六號活字で開戰の已むなきこと、開戰の正當なことを聲明されたので、非戰主義の內村先生は會談を重ねた上、竟に公然退社された、非戰派の秋水、枯川また共にした、開戰派たる山縣、斯波の諸氏が先生の理解を得て居殘つたことは勿論だ。

然も黑岩氏は、先生の退社を非常に痛惜し、自分の主張を棄つるは勿論、前の論文をも取消すからとまで切言されたけれども、先生は社中實に多數の開戰派があり、事實國民の輿論も亦熱烈な開戰說である、隨つて朝報の立場から申しても、亦黑岩氏其人の信用から申しても、今更取消などさるべきでない、唯自分の非開戰論を枉げ能はぬから、遺憾ながら退社を許して貰ひたいと、情理兼至る說なので、竟に奈何ともする能はなんだ。

併し黑岩氏は此爲、社內の動搖することを恐れられ、全社員を上野精養軒に招待し、結束を固むべ

きことを希望された、氏としては實に珍しいことだが、また以て先生の德望の甚だ大であつたことが知られる。

先生は依然として聖書之研究なる雜誌を發行し、又其信仰を傳ふべく講演に努力されるが、元は札幌農學校の出で、水産學者だ。此農學校からは、人格其他で特異な人物が輩出した、志賀重昂氏なども其一人で、先生は學業成績に於て實に前後無雙といはれ、水産研究のため、水産會總裁伏見宮殿下の令旨で洋行され、水産家としても裕に一家を成す實力を有せられる、其頭腦と學績の優秀さは、令息にも遺傳されたと見え、令息も野球界の名手として名高かつた。

先生が第一高等學校を去られたのは、狷介の爲だといふ人もあるが、余は先生位宏量で公平な人は多くないと思ふ、人の長を擧ぐるに吝でなく、天理教の教祖お幹の墓で、賽錢の銀貨山積し、之を叺で持運ぶ人足に、十錢銀貨一ツ盗む者がないとて、其德化を稱揚されたこともある。

一高の獨逸語教授グンデルが、退校後余の鄕里で布教中（先生は彼のため來つて講話されたこともある）日獨開戰で本國教會から救助を斷たれ、氣の毒な境遇だと先生から話があつたので、余は其救援方を時の文相一木喜德郎氏へ話した處、文相は、既に熊本高等學校へ採用することに內定したと打明けられ、余から之を先生に傳言したこともある。先生の著書は英獨語は勿論、ポーランド語等にも譯せられて、其名は寧ろ世界的に高い。

女記者事件、涙香先生の濡衣

黑岩氏に取つては實に氣の毒ながら、新聞社會には有勝ちな女記者問題が持ち上つた。中央新聞の女記者を一口食つて、流石に議會の猛者たる吉植庄一郎氏も大いに手を燒き、グーもスーも言得なんだことさへあるといふが、黑岩氏は全くの濡衣だ、然も社內の問題となつた丈け珍だから記して見る。

理想團の講演會をユニテリアン教會で催した時、聽衆の一人であつた河越照子といふ一女史が、講演者の山縣五十雄氏に會談を求め、女記者たるべく希望したので山縣氏から黑岩氏に紹介され、氏は婦人の新聞記者も珍しいのみか或る方面には却つて適任であらうとて、之を入社させることとした、而して余に然るべく引立てるようといはれ、又教育部主任の松山傳十郎氏には、之を女學校その他へ紹介するやうにとのことであつた。

女史は芳紀二十二三に見え、色こそ黑いが、又近眼鏡（？）を掛けてこそ居るが、眉目の整つた淑からしい容貌だ、其提出する記事など極めて稀で、偶に函根入浴記だとて、和歌など添へて出されたけれど、余は之を採用せなんだ。後に黑岩氏から、何故掲載されぬかと頗る不滿らしく言はれるので、余は朝報の名譽の爲に採擇せぬと言つて退けたので、氏は不機嫌ながら沈默された、實は若干のハンデキャップを附しても載せたいけれど、餘りに酷いので其れも出來なんだのだ。

それに女史に對する社内の評判が追々惡くなる、安藤金栗氏（是は政界に於ける早耳として敏腕家であつた）などは、社中の古老には記者としての大家もあるから相當敬意を表するやう女史に注意したけれど、女史は總ての社員は我が雇人だと稱して取合はなんだとて、大いに憤慨されて居た。

女史が我等社員を雇人と見做すのは、自身で黑岩夫人を氣取つてのことであらう、女史の斯く氣取るのは、一種の狂的錯覺に過ぎぬけれど、之にも若干の珍談がある、成程女史は社長室を淨めるやら、黑岩氏には實に忠順に見え、何處へでも黑岩氏の跡を付ける、何か原稿らしい物を持つて、其訂正などを求めるので、黑岩氏も内村先生や余等の前で、それは今でなくとも宜いでしようとて、左も忌々し氣に女史に斷はられたこともある（或る教會に於て）。

黑岩氏と女史との間には、何か艶聞關係があるらしい評判も内外に傳はつたこと勿論だ、余等は素より氣にも留めなんだけれど、社會部の人達は、之を事實と信じたらしく、自然黑岩夫人の耳にも入て將に葛藤を生ぜんとしたとも聞いて居る。

清新軒の會合の際、堺枯川氏から、川越女史が來て、黑岩氏に手切金を出すやう交渉して呉れとの依頼があつた、無論拒絶はしたけれど、手切金を要求しようとする位では、關係が成立したものと推察せねばならぬと言出された。内村先生なども苦り切つて居られたが、余や秋水から、何よりも當の黑岩氏に正面から說明を求めるが宜い、左もなくて徒らに揣摩臆測などするは不本意千萬だと發議したので、去らばとてやがて黑岩氏の釋明を求める段取とはなつた。

次の會に黑岩氏は出席して、自分の人格に掛けても何等疚しいことないと斷言し、極めて率直に下の如く打明けられた、女史は初めての女記者でもあり、社中唯一の女性ゆゑ成べく保護もし發達もさせる心底で、待遇も他と異つて渥くした、或は自分が晩食を鳥屋などで認める時同伴したことも兩三回あつた（女史と福田秀子と内村先生や余等とも會食した）それが多少疑惑を招き、又女史をして或る疑ひを持たせたらうとは後に氣付いた、或日女史が神經衰弱らしい故靜養したいといふから快諾した、處が函根から一書を寄越して、先生も來られよとか、序に宿費を持參せよとかいふので、自分は始めてヘンだと氣付いたものゝ旅費が無くては氣の毒と存じ、女史の新富町の家を訪ふて其父君に金子を渡した、次で女史から求婚の書面が來たが驚いて捨置くと、葉書に英文で督促書を認めて寄越す事などあるので、更に其家を訪い、父君と並べおいて、自分には現に歴乎として妻もあり子もある、結婚など出來るものでないといふと、父君は娘の不心得何とも申譯ないと詫る、其れで歸り掛けると、女史は自分の自轉車に乘らうとするのを縋り止めて、思ひ返して呉れなどといふ、實に意外とも何とも言語道斷の始末で困り切つたといふのだ。

斯くて間もなく女史の退社を見たが、女史は始め一高の學生と許婚の間柄であつたのに、破談となつてからは、時々精神に異狀を來すのだといふ、黑岩氏の釋明で一同納得すると共に、其飛んでもな

い濡衣を氣の毒に思ふた。

舊藩主の爲貴族院議員推薦失敗

余の舊藩主奥田子爵は、才氣英發で、惡くいふと智辯は以て其非を飾るに足る程の敏腕家たる素質を具へて居られる、蜂須賀侯が佛國公使として赴任される際同じく渡佛されたが、當時通譯官として公使に隨行した守川盛三郎氏が佛人アッベール氏の講義を通譯された關係から、余も一書生として新橋へ見送つた、其際子爵は余を顧みて、巴里ではガムベッタにも面談するなどと氣焰を揚げられた。

我藩は僅々三萬石であつたけれど、武勇と裕福とで以て知られたさうで、其餘光か、資財のあるに任せ、子爵は例の才氣から株式にも手を出し、郵船株の買占などにも成功され、一時は鼻息も相當荒かつた、或時片岡孤笻氏（是は其先代まで重士の家筋で、始終子爵の根岸邸に出入し居た）に托し、余に國會議員たるべく勸め、選擧費二萬圓（今の七八萬圓に相當しよう）まで援助する、其代り記者の早耳として、政界其他の事を知つたら直速報しろといふ條件なんだ。余は記者たる天職として、政界の機密などを投機に利用される事は爲し能はぬ、のみならず絶えず言論の自由を持つ余として、議員などに成るのは、却て自ら屈するものだとする平生の持論から之を辭謝した、併し子爵の好意丈けは難有感佩する旨申添へた。

余は歸省した折、鄕友に之を話すと、其れは面白い、一ッ國會に打て出ろ、それには順序として先づ縣會議員となれ、渡多野傳三郎氏なども斯くしたのだ、依つて千圓出せば公認候補として必ず當選するからなどと勸めたが、余は信濃川の杭が何本の、堤が何百間のといふ問題にドウして頭を入れられるものか、馬鹿を申す可らずと一笑に附し去つたこともある。

然るに子爵は其後投機に失敗し、果は前夫人との間に出生された第一子を廢嫡し（此方は高橋健三先生や、岡山の閑谷黌などに轉々され、後には或る工場の門番にまで成られたのを、余から和田豐治氏に强て依賴して、富士紡績小山工場の事務員とした）第二子に家督を讓られたが、尙古い知事連などと組合ふて、種々の事業を計畫され、或は余の渡米中、佐々友房翁の國民黨にも加入されたが、不運續きで彌よ沈淪されたのみだ。

依つて余は之を貴族院議員とすれば、其歲費で生活は何とか出來ようし、華族として政治に與るも立派であるし、殊に其方が適材であらうと考へ、其爲、再び復爵されねばならぬとて、安藤金粟氏の紹介で、當時の爵位局長（或は宗秩寮總裁か）岩倉具張公の霞ヶ關邸に推參した。

逐一事由を申述べると、公爵は莞爾として、イヤ彼の奥田ならダメだよといはれる、怪しみて其譯を伺ふと、公爵曰く、奥田の先妻は余の夫人の妹で、共に澤三位（伯爵宣嘉卿）の女だ、隨つて奥田の家庭のことは、巨細に存じて居る、折角面白い工夫だけれど、復爵など所詮出來ぬと。

是には余も返すべき辭なくスゴ〳〵引下つたが、余の舊藩主家には、藩祖大阪役の關係から、或る祟りがあり、代々正夫人には世嗣ぎの子息がないと傳說されたのに、子爵夫人卽ち澤家から入輿されたのには幸に第一子が出生された。

此夫人は跡見花蹊女史の門下で才色双美であるのに、子爵は近い神田講武所邊に發展し、果ては藝妓を購ふて、邸に入られたのみか、夫人とも夜も同室させて却て夫人を虐待されるといふので、夫人は離緣して遠く秋田の某醫師に再嫁されたことは、老人の談でも公爵の話でも承つた。

子爵の大磯の別邸は、東久世老伯爵の設計で作られ、親戚や同族などの來泊を避けるためとて、流石に茶掛つては居るが、小室のみの珍な建築であつて、子爵も末路玆へ閉居して、東京朝日新聞などにも好ましからぬことを書かれ、終には鄕里に引込み、數奇な生涯を終られた。始めから政治運動のみに關係し、貴族院に出られたらば、彼の板倉勝憲子なども親戚であり、才氣も多いから、牧野忠篤子(舊長岡藩主)などとも匹敵する地位を得られたらうに、實に惜いことをしたものだと、余は今でも嘆惜を禁じ能はぬ。

初度の燒打迄、余の媾和主義

日露戰役が開始されてからは、編輯の多忙は一方でない、余は芝の三田から通勤しては不便でもあり、外電や戰報が夜半をも問はず來るので、その擔當をも兼て、新聞社で銀座二丁目の東仲通りへ一戸を借入れ、之を社宅として余に住はせることとなつた。

此家は例の三等煉瓦ながら、內部は全く日本風に改築したので、木材などは實に贅澤な物を用ゐてあつた。持主の齋藤といふのが美術品輸出商でもあつた爲であらうが、建具なども精良を極め、天井こそ低いが、水屋なども風雅で、申分のない造作であり、中庭を隔てゝ奧に離れもある(玆で梁上の君子に見舞はれ簞笥を空にされたこともあつた)。

序に記し置くが、余は玆で始めて東京人の一種の自治制の一班を見得た。卽ち銀座四ヶ町で衞生組合を設け、富豪の松澤(丸八と稱す)組合長となり、町內道路の掃除、便所の始末から、祭禮の催し物まで引受け、正月の松飾りなども依賴に由つて引受ける等、實に行屆いたもので、大通りは店の間口に由り、仲通りは一戸平均(余は一ヶ月一圓の負擔であつたと思ふ)に費用を負擔させる、戰役で出征する者、凱旋する者の送迎までも引受て、實に便利至極であつた。

社宅も宜いが、夜半過ぎでも社へ來る電報を屆けられるので、戶をドン〳〵叩いて起される、其れに直向ひ側が醫師で、其急病で叩き起されるのとも混線して、双方とも閉口した事が多かつた。

當時の人氣は實に緊張の極に達し、例の浦鹽艦隊が出て暴れる、我上村艦隊が十分抑へ得ぬとて頻に不平を鳴らす者もあり、余も後に慚愧に堪えなんだが、戰機も戰略も辨へぬ癖に、上村艦隊を緩慢

として論文で攻撃したこともあり、市民中では上村中將の留守邸へ投石したり、其令孃の通學を途中で罵詈する者などもあつた程だ。

やがて講和會議に移ると、圓城寺天山氏は極力之に反對し、論文でも雜報でも、力を剩さず攻擊するので、發行停止が頻々と命ぜられる、報知新聞の如きは、當局の意を迎へて急に論文を改めて、停止の厄を避ける、其ため同紙に讀者を吸集される惧れが多いので、黑岩氏は悲觀の極、以前の舊同志のみと大地へ坐つても新聞を發行し直し、全然新スタートから出發するといふ決心で、停止を受けると共に、全社員に何分沙汰するまで出社を差控へるようと公示された。

其處で翌日圓城寺天山、松居松葉、天城安政、小林天龍の諸氏が新聞社に最も近い余の社宅へ打寄り、彼此談合して大いに牛肉で飲んで氣焰を揚げて居る處へ、社から明日出社するようとの書面が來た、是はお前丈け御採用なんだなどと冷かす者もあつたが、翌日出社すると、皆も出勤して居る、黑岩氏から前記決心の次第を打明けられたので、孰れも納得して、成るべく發行停止を食はぬよう注意することとした。

當時は新聞の讀者が激增するので、各社の競爭にも油が乘り、報知の如き其頃既に二十萬から三十萬枚近く賣れ出した、黑岩氏の焦心されたのも無理ではない。

余は倫敦タイムスの論文が、常に清新な文句を使用し、英語界に一新例を開くことが毎度の上、其論旨の英國内は勿論、列國にまで重きを置かれるのは、其主筆の見識のみではなく、主筆其人が問題毎に關係ある諸大臣や諸黨派の領袖は勿論、列國使臣や各階級の重な人々を克明に歷訪し、其最も正當と見る說を基礎として、自個の考察と判斷とを加へる結果だと聽いたゆゑ、余等も亦然すべしとする持論から、之を當時の外相小村壽太郎子、陸相寺內正毅伯等に陳述し、求められるまゝ屹度祕密を守るゆゑ、總てを打明けて話して貰ひたいと請ひ、幸に容れられて相當機密や、軍狀を窺ひ得たから、余は餘り媾和に反對せずして、寧ろ贊成の意向を取つた。但當局と約束ゆゑ社內の人々にも話す譯にも往かず、往々衝突し激論もしたが、去りとて退社すべきでもないから、別に之を主張する手段を執つた、卽ち中央公論の誌上に於て之を發表したのだ。

中央公論との關係

聊か枝道に入るようだけれど、玆に少しく中央公論のことを記し置かう、余の記者生活中、最も自由に又十分に主張し得たのは、實に同誌上であるからだ。

同誌は初め反省雜誌と稱して、創刊は隨分古い。後に高楠順次郎博士が編輯されて居たが、余の中央新聞時代に田村江東氏が、一ツ中央公論の編輯を引受けないか、編輯費七十圓といふから以て一夕の飲を恣にし得やうと持掛けたが、余が不承知で談が調はなんだことがある、次で萬朝報の社宅に入

るに及び、同じく朝報社の同僚であつた香川魁庵氏が來られて、其同窓の學友であつた麻田駒之助氏から頼まれたとて、中央公論初欄の論文を引受けよと交渉があつたので、之を快よく承知した。

當時の余の家の女中は、魁庵氏の顔が餘り黑いので、煙突屋さんと尊稱し、又同僚の紫安新九郎氏が紫の風呂敷包など抱へて來訪されるのを、保險屋だとて面會謝絶を喰はしたことも有つた。此紫安氏は同じく朝報社に居ながら、丹後の居村に戻つて、村長たるが宿望だなどいひ、且つ頗るの妻君孝行家で、魁庵氏などはチン九郎と綽名し、余と一夜其牛込の宅を襲ふたこともあつたが、後に犬養木堂翁の周旋で大阪市役所に奉公し、其れが機緣で同市から選出され、憲政會の幹部格にまで進まれたやうだ。

中央公論で余は講和論を發表した、當時斯る議論をした者、全國廣しと雖も、高橋光威氏（原内閣の翰長で、今も政友會代議士）の大阪新報と中央公論のみだといはれるが、公論は殊に情理兼到るとて評判になつたと聞く。

余が始めて公論に關係した頃は發行部數四千を超えなんだが、徐々に增加して七千となり、一萬となり、二萬三萬となり、手堅く進み行つたので、竟には麻田氏も雜誌成金と稱せられるまでに至つた。余の罷めたのは大正となつて、桂公の同志會組織ともなり、余の說が兎角之に偏すると氣遣はれたから、余も進んで手を切つたのだ。

中央公論は西本願寺法主で英雄僧と知られた大谷光瑞師の息の下に養はれたものだ、高楠博士に繼いだ櫻井義肇氏の後を承けて麻田君が擔當したのも、此關係からで麻田氏は大谷家の譜第である。麻田氏は非常な篤實家だ、其夫人が病のため全くの聾となられたので、兒達の教育から家事は、總て麻田氏の令妹が引受けて居られた、此令妹また感心な女性で、一身を捧げて兄夫妻やその子供のために盡し、今に婚嫁もされぬ。其話に、甥や姪は自分が外出すると、待かねて門に出でて歸るのを首を伸べて居る、母が不具で親しみ得ぬからだと思へば、可愛相で遣る瀨がないとのことであつた、其奉仕振りなど確に女性の一模範であらう。

光瑞師が上京された時、余に面會を求められるとて、麻田氏が迎ひに來たから夜の九時頃帝國ホテルへ往いたことがある。師は軀幹長大な漢子で、席には令弟尊由師も居られ、茶を供する女性が九條武子夫人だとて、光瑞師から紹介された。武子夫人は評判の美人だとは聞いて居たけれど、成程身長もズツと高く、白皙豐頰眉目は能く整ふてゐるが、黑髮を平らに分けてあつた故か、余は格別美人とも感ぜなんだ。

師は英國外交のことなど語り、外相サア・エトワード。グレーに一本參つて貰ひたいなどゝ語られる、意氣も剛壯で、寸分だも宗教家らしい臭ひがせぬ。

尊由師も亦然りだ、師も中〳〵の豪傑で、其小兒時代、父君へ寺内正毅伯から軍人にされよと忠告

された程だが、如何に何でも佛家から軍人はとて謝絶されたと聞く。尊由師が日露戰役中、旅順包圍軍を訪ふて望樓へ上られた時、隨員の升巴陸龍氏（大分縣の佛家で、柔道二段といはれ、年若いに似ず滿洲分教師主任を托された程だ）など砲聲や銃音を聞く毎に窓の下へ屈み込むけれど、尊由師は平氣で色さへ動かされなんだのみか、升巴氏の腑甲斐なさを笑つて、爾來信認頓に衰へたともいふ。

尊由師が面談を求められたので余は殊に築地本願寺の別院へ矢張麻田氏の案内で訪問したことがある。當日高槻臺に干菓子を盛出されたのを、余は其まゝ引退ると、麻田氏は之を包んで持ち歸るが禮だとて尊由師と共に玄關へまで送り出て車夫に渡された、余は其まゝ之を車夫に與へて、歸來老母に話すと、本願寺の檀徒たる母は、有難い御菓子を勿體ないことをしたとて余を叱られた。

余が閑院宮家の家令松井從德氏を訪ふた時、出された白菓子を其まゝにして去ると、氏から包んで持歸るのが皇族方邊りの家風だとて贈られたことも有つた。

大谷光瑞師

光瑞師の裏方（夫人）籌子の方は九條公爵家の出で、正しく今の皇太后陛下御同胞で然も姉君に當らせられる。光瑞師との伉儷は甚だ篤いが、御子がないのみか、師は頗る情に淡泊だから、御夫婦とは名ばかりかとて、檀徒は勿論、寺中にも多く疑ひを挾むものがあつた、麻田氏も其一人で、師が裏方と上京して、築地別院へ泊られた時、折節夏であつたを幸、氏は探險家氣取りで窃に次室まで忍び寄つて蚊帳の中を透かし見て、始めて名實共に完全な御夫婦であることを確知したと、その秘密話であつた。

裏方は極めて羸弱く居らせられたが、師とは何處までも安危を同じふする意氣込で、其樺太行にも伴はれた。師は大の旅行家で、印度で佛蹟を尋ねられたは勿論、深く中央亞細亞の内地までも入込み支那でも甘肅から新疆敦煌邊までも探險された。而して獲られた貴重な唐代のミイラを始め、掘出した壁畫佛典など、今も旅順の博物館に唐代の珍しい陶器や人形などと共に陳列し置かれる。余が日本へ持歸られたら貴い資料とならうにと申すと、師は風化し易いミイラなどは、濕氣の多い日本では直に腐蝕する、唯大和の大臺ヶ原山の頂上のみ好適地だが、彼の險阻な場所へ置く譯にも往かぬ故、旅順に藏し置くとのことであつた。

されば師の樺太旅行も、例に由る强行的で、海上風濤の險惡さも隨分激しかつたけれど、裏方は齒を喰縛つてもジッと辛抱し續け、一言半句も其苦を訴へられなんだ堅固な意志には、流石の師も驚嘆と共に痛々しく思ひ、一層情合も濃かになられたといふ。

裏方は後に重病に罹られてからも、師の篤い看護を受けつゝ、合掌したまゝ一辭だも苦をいはず、偏に彌陀具誓の迎へを待たれるなど、如何にも道心堅固さが露はれて、多くの佛徒も感に堪へた。而

して逝去の砌、既に懐胎し居られたことも明からであつた。

裏方逝去後、光瑞師は再び娶ろう共されぬ、洵に未來永劫の契りを堅守される、斯の裏方に對して左もあるべき事と總ての人は併せて師をも益々尊崇しつゝある。

師は大旅行家たる外、佛典に深いのは持前ながら、猶他の科學、殊に漢洋の植物學にも深く、且識見も遙に俗流を拔いて居る、桂公なども深く其人傑たるに推服し居られたが、德富蘇峰先生は、若も師を政治家としたらば、實に非凡な大政治家となられたであらうと評して居られる。

中央公論は師から毎月二百圓の補助を受けて居たが、後に利益まであるので麻田氏から辭退したと聞いた、勿論であらう、尙余の關係中、毎年秋になると大谷家所有の京都の山から產したのだとて香氣の極めて佳な松茸を贈られるが例であつた。

後藤新平子も、同誌の余の論文を激賞して、余を招かれたことが一再に止まらなんだ。余が多少世間に識られたのには、同誌に負ふ所實に少くはなかつた。卽ち我回顧中には、到底之を逸すべくもないから、大谷師の事と併せて玆に附記する次第だ。

余が講和論を主張したのは、我軍隊の實力程度を識つたのみでなく、出征軍人の遺家族の痛苦にも深い同情を持つたからだ、既に奉天を占領して、哈爾賓までも進戰しようとならば、軍隊及軍需品の輸送のみでも容易ではない、露國は軍隊を出すに多くの便宜が加はる反對に、我國は今一層多數の軍隊を繰出さねばならぬ、隨つて輸送も東淸鐵道（今の南滿洲鐵道も）のみでは足らぬから、當時陸軍方面では、索道でも造つて鋼索車に由る外はないとて、潛かに米國方面をまで調査した程だ。卽ち此上戰爭を繼續すれば、今までの如く連戰連捷とは參り能はぬ、總ては引上げの潮時が大切だ、媾和の機會など苟くも之を逸すべきではない。

此點に就て、余は當時の陸相であつた寺內伯から、腹藏のない事實を承つて、國內で士氣を振作するの必要は認めながら、去りとて既に米國大統領ルウズエルト氏の斡旋に由つて、ポーツマスで媾和會議が進行される以上、漫りに非媾和論など主張すべきでないと信じた、況んや國民各個の家庭殊に出征者を持つ家庭の事情を深く懇ろに考慮するをや。

出征軍人の家庭

日露戰役で余の一族は相當の痛苦を喫した。余の舍弟は余以上に耳が遠いので、余は强て英語學校を退かせて野口幽谷先生に入門させたが、彼は更に洋畫にも志し、白馬會に入た、それが徵兵適齡で不思議にも合格し、新發田第十六聯隊に入營し、服役中に朝鮮元山の守備隊としても派せられた、三年の服務を終つて歸京後、更に美術學校にも入つた處、端なく日露戰役となり、卅七年二月早々直ぐに仙臺の第二師團に召集され、間もなく滿洲へ出征した、當時輸送中東京を通過するに、新宿方面の

軍用鐵道に據り、然も其時間が午前二時といふので、余は告別を兼て幼い兩兒と共に、寒さを冒して新宿軍用驛に往いた、余等の寒さに辟易したに就いても、遠く滿洲、殊に酷寒の荒野に往く舍弟を思ふては密に同情に堪えなんだ。

彼は衞生隊として各地に轉じ、左掌に爆彈の破片を受て衞戍病院に入り、沙河戰線から復舊して戰役の始めから終りまで勤務した。

余の從弟の一人は鴨綠江徒涉で勇名を馳せたが、更に間もなく臀部に負傷した。其兄も弟も皆銃創を受けた。更に他の一人は、撫順戰で其乘馬を敵彈に粉碎され自身亦左腕に負傷した、其兄は旅順戰に加はつて脚に貫通銃創を受け、後送されて東京衞戍病院に收容され、其少しく癒ゆるや、余の家に移つて療養し、余の妻などは看護婦役をも務めた、而して其全く癒ゆるや更に出征して蒙古部なる昌圖方面までも進んだ。

幸に一人も死なんだけれど、而して六人中三人までは金鵄勳章の賜與を忝なふしたけれど、余としては相當の痛苦を覺えざるを得ぬ、況んや彼等の父母をや。

余は之から推しても、出征者のある家庭を思ひ遣らざるを得ぬ、殊に戰死者を出した家庭の慘苦は何程であらう。

國家の大局から視ても、日本は最早長く戰ふべきではない。人道から視ても、是れ以上無理に戰ひを續けるのは、寧ろ罪惡と申すも激語でなからう、彼の非媾和論を唱ふる人達、殊に余と相交はる非媾和の强硬論者は。不思議にも家庭にも一族にも出征者がないのを確めて、余は强硬論が國民の志氣を挫折させぬ効果を承認しつつも尙その底に人情なきかを疑はざるを得んだ。

萬朝報も頻々たる發行停止を避ける爲にも、余等の平和論が多少認められたけれど、騎虎の勢ひ中ころ下り得ぬ、東京の人氣は日を逐ふて險惡化し、殊に國士を以て任ずる人々の一部には、媾和反對の國民大會をも開く段取とはなつた、此國民大會は恐らくは此種の會合の嚆矢でもあらう。

國民大會は河野廣中翁を總帥とし、小川平吉、細野次郎、櫻井鐵太郎、圓城寺清、大谷誠夫、村松恒一郎の諸氏の發企だ、河野翁、小川、細野、櫻井の諸氏は檢束されたが、以下の記者諸君は妙にそれから免れた。

彌よ大會の九月五日に、一行が堂々と旗など押し立てゝ會場の日比谷公園に練込むと、公園の門を塞ぐやら、木柵を造つて交通を斷つやらしたので、一方發起人が檢束さるゝと共に、群衆と警察官との衝突となり、群集は先づ公園に近い霞ヶ關の外務大臣官舍と、內山下町の內務大臣官舍とを襲擊するに至つた。

內務大臣官舍の襲擊は最も强烈で、玆に群集と警察官と入亂れて鬪つたが、夜に入ては最も猛烈を加へた、現に朝報社から紛亂狀態を畫がくべく往いた畫家の德永柳洲氏などは警察官に斬り掛けられ

て、覺えず合掌して助けを求めつゝ、鐵柵を跳り越えて公園内に逃げ込んだが、其れでも側で斬られた人の血を浴びて、黑紋付の絽の羽織は、全く蘇枋を染た如くになつて千切れ、且鐵柵を越えた時腕に摺創などを生じた。

柳洲氏が歸つて來ると、社中は沸き返るやうになり、殊に血の氣の多い松居松葉氏などは、激昂の極に達したのも無理はない。

悲慘な夜景

編輯局内の湧返るが如き激昂も稍〻靜まつて、一統夜間の編輯に取掛つた頃（九時過ぎ）遙にワアワアといふ喊聲が聞え、漸次に近づいて一群の民衆は朝報社の門前まで押し掛けた、彼等は南から北へ向けて進行しつゝ、沿道の總ての巡査交番所を燒打ちする、警察官など已に隻影だも認めぬ。

此時圓城寺氏が露臺の上に立出で、例の朗々たる音吐を以て、民衆の激昂も、畢竟愛國心から發するので、洵に已むを得ぬ當然の結果だとて、巧に之を褒め、唯願はくば違法のこともないやうに、吾等は何處までも諸君に同情すると演說したので、群衆も盛んに拍手して萬歲を唱へ去つた。

トコロが此群衆は直社から三四軒先の四辻の角にある交番所を押倒して街の眞中に引出し、側の雜穀屋の軒燈からランプを取卸し、其石油を交番建物（六角型の箱でペンキ塗）に注ぎ、マッチの火を點じて盛んに燃え上がるのを見極めてから更に北進した。

余が編輯の終るを見て銀座東仲通りの社宅へ歸ると、不安に襲はれる人々は店の戸を締て軒下邊にイみつゝ何事かヒソ〳〵語り合ふ、如何にも凄慘な光景だ。

社宅へ歸り着くと、極めて近く東北に當つて大いに火焰が揚がる、是は京橋側卽ち八百屋市場の入口にある警察分署（建物は石造）が燒打ちされるので、喊聲と共に火光が凄まじく立昇る、幸に風がないから延燒の恐れなく、我附近の人々は唯恟々として見物する丈けだが、余の隣家の十歲ばかりの娘は竟に恐い〳〵とて泣き出し、其母や職人に縋り付いてゐた、何といふ光景であらう、之が實に十二時頃だ。

民衆は下町の殆んど全部に亙つて分署交番所を燒盡した、翌朝の總ての新聞は、詳しく之を書立てたが、併し彼處に詳しく、此處に粗な違ひこそあるけれど、全紙面を其記事で塡めたに拘らず、統一的に其眞狀を呑込ませるには足らなんだ、匆忙中の記事ゆゑ餘儀ないけれど、余は記者に歷史的に記述する技能の缺如することをも感ぜざるを得なんだ。

當夜の燒打最中、米國公使及米人等と靈南坂下を通行した曾禰藏相は、背から投石される公使等を顧みて、我日本人が媾和に反對して玆までに到る元氣の旺盛なことを語られたさうで、米國公使などは大に感じて居たと藏相から聞いた。

大浦遞相も燒打の翌朝、乘馬服で身を固め、馬を飛ばして町々を廻覽されたが、電柱に政府攻擊や民衆煽動の過激な文句を貼付あるのを見ては大抵之を引剝がされたので、之を聞いた人々は、遞相の沈勇を稱へたといふ。

警察官は全く民衆反抗の目標となり、翌六日戒嚴令が布かれ、全都殆んど無警察となつたので、遂に軍隊が繰出され、襲擊される懸念のある官衙や官邸など總て軍隊で守護されたが、群衆も軍隊には一切手出しせぬ、軍隊も亦沈着に警衛するので、秩序は始めて保たれたやうだ。

群衆の燒打は實に巧妙を極めたものだ、軒燈内のランプを卸すにも、猿の如き輕快さで、擧止の敏捷なこと、到底普通人ではない、當時の噂に、或る方面で豫め燒打するため、常陸邊りの博徒を雇ひ入れたともいひ、或は警察に怨みある博徒連が、此機會に乘じて、復讐的に活動したともいはれる、

國民大會の外、新富座でも講和反對の演說會が催され、其れで民衆が彌よ激昂したことは勿論だ、然も此燒打のため、十日警視總監足立綱之氏は罷めて關清英氏が代り、而して十六日には内務大臣芳川顯正伯が引責辭職して、農相清浦奎吾氏が其後任を兼ねらるゝこととなつたが、桂内閣のやがて辭職する運命も明白となつた。

此燒打ちの被害は、民衆側の死傷五百五十八人、官吏側四百七十一人、巡査交番所の燒棄されたもの百四十一、破壞されたもの二十八、而して爲に民家の類燒三十八に達し、内閣の味方であつた國民新聞も襲擊された。

凄慘な内相官邸前

九月五日燒打の翌夜、同僚の茅原華山氏の外遊を送るべく帝國ホテルで開宴した。氏の外遊は、主として其出身校の關係から、奥田義人男等が世話されたといふ、華山氏は名だたる文士で、其文章は才情流露、頗る妙を盡したもので、一部青年間に多く思慕されたものだ、外遊の留守中、夫人は小學校に教鞭を執つて子女の教育を引受けるなど、感ずべき逸話もあつたと記憶する。

何分にも燒打の直翌夜で、滿都尙人心恟々の最中ではあり、内務大臣の官舍は、軍隊で人垣を作つて守備し居るから、流石に侵入するものもないが、併し暢氣にも濠邊（當時は日比谷大神宮の裏に尙濠があつた）で薪を燃やし、火の付いたまゝの薪を、軍隊の頭を越して官舍の垣内に投込む、官舍内からは其ため時々ブス〳〵煙が漂ふといふ光景で、特に夜に入つては、物靜かながら頗る凄慘に見受られた。

ホテルは直官舍に隣して居るから、何時襲擊されるも測られねば又飛火を喰ふも知れぬとて、火は夜九時限り落すゆゑ、送別宴も早く切り上げて貰ひたいと注意に及んだものだ。

去れば送別宴も極めて靜かで、黑岩、圓城寺、山縣、斯波、及山本常樹の諸氏と余位の小人數であ

つた、特に圓城寺氏は官憲に睨まれても居るからといふので、別に早く退席し、人力車の提灯なども、手拭で定紋を隠し、途を迂廻して去つた程だ。

余は斯波、山縣の兩氏と、內務大臣官舍邊から、日比谷邊を散策がてら見物し歸つたが、依然として火の付いた薪を時々抛け込むものもあつたが、併し間もなく止み、警備の軍隊も哨兵の外は、公園の鐵柵外で、銃を組み合せて休憩して居る、而して人出も思ひの外稀で轉た寂寥を覺えた。

內務大臣の芳川伯は、無論何れへか立退いて居られやうが、前日の燒打ちで、あの雲煙縹緲たる容顏にも、多少緊張を呈したであらうかなどとも想ひ遣つた。

前日警察官が東京市の所有たる日比谷公園の門を塞ぐやら、木柵で出入を禁じやらしながら、市に何等交渉だにせなんだのは、惟しかる專斷だとて、市參事會員などでは、大分氣焰を擧げた人もあり、警視廳では平あやまりの外なかつたやうだ。

珍なことには、後に日露戰役の論功行賞が行はれた時、東京の各新聞社は大抵大金盃を頂戴したは宜いが圓城寺、大谷、村松など燒打の因を爲した國民大會發企の諸氏が三百圓宛賞賜された一事だ、是は開戰前から國民の志氣鼓舞のため、都鄙で演說などした勳功なんだといふ、村松氏はそれで櫻の苗木を買ふて、鄕里の宇和島市へ寄贈したが、予は後日、之を燒打の賞與だと揶揄するが例であつた。

翌三十九年の九月五日卽ち此燒打の一周年には、東京市民の電車賃引上反對の大會が開かれ、其夜電車への投石などで、第二の騷擾が惹起された、余は當夜本鄕からの歸途、電車に乘つたが、電車には余の外、老婆と二人の娘があるのみだが、須田町へ差蒐かると暗中から投石し、硝子など破碎されたので、婦人連は悲鳴を擧げて俄に降車した。余は値上反對可なるも電車を襲擊して何の罪もない乘客を惱ます亂暴を怒つて、之を紙上に書立てると、社會部の外交員某氏が來訪して、主張如何に公平でも、餘り非難しては憎まれるからとて、筆鋒の寬和を求められたこともある。

此燒打が因を爲したのでもあらう、大正二年二月桂內閣に對する第一回の憲政擁護運動の起つた時も、國民大會に引續いて燒打が行はれ、內閣側のためにしたといふので、國民、都、報知、やまとの諸新聞社も燒打を喰つた、國民新聞社は最も猛烈で、斬込んだものさへあつたので、阿部充家氏の如き猛者は、同じく拔刀で渡り合ひ逃ぐるを追ふて斬付けもしたので、裁判沙汰にまでなつたが、結局正當防衞で無罪の判決を受けた。都新聞は襲擊した彌次馬中には、野球の選手もあつたと見え、日比谷公園側から、マントを着たまゝ石を拾ひ、それを狹い路次內へ投げ込み、彈路を屈曲させて新聞社の橫窓を打割るなど、手腕は如何にも美事であつた。

また報知新聞が多數の彌次馬に包圍された時、スグ向ひ側の東京日日新聞では、若干の社員がバルコニーに出て之を喝采したとやらで、報知社では餘りに同業の誼がないとて、深く憤慨したものもあつたと聞いた。

やまと新聞も襲はれたけれど、格別のことなく、唯投石されて窓を粉碎された位であつた、而して桂公からは、被害新聞社へ若干の見舞金が贈られた。

山本内閣の時、原敬内相の下にも燒打があり、御用紙として中央新聞が襲擊された。此際東京朝日新聞の記者が現狀視察中、警官から斬付けられたとて、各新聞聯合で内相彈劾に及んだが、之には余も關係があるから、後の山本内閣倒壞の章で述べやう。

第十九　黑岩周六氏

新聞界の一人傑、非常な讀書家

黑岩氏の名は夙くから知られ、余の如きも書生時代に能く知つて居た、氏が米國クワツケンブスの演說法を雄辯美辭法と題して譯されたのなども、余等の愛讀書の一であつた。當時氏は自ら名を大と稱し居られたようで、演說會でも、黑岩大と稱し居られた。

當時書生として政談演說を聞くことは集會條例で禁止されてあつたので、余の如きは法律學校と英語學校とへ一度に退校屆を差出し、而して兼て同學生と組合つて買置いた紺前垂などを掛け、急拵への丁稚小僧と成濟まして演說會場へ押掛ける、其翌朝再び入學願ひを差出して依然講義を續け聞くといふ調子で、警察でも能く此事情を呑込んで居た、學校當局は素より申すまでもない。

當時政談の雄は、沼間守一、末廣重恭、馬場辰猪といつた人々等が主で、西村玄道、高梨哲四郎、島田三郎、青木匡、田口卯吉などいふ連中もあり、黑岩氏も其一人で其演說の身振り手振りなど、飜譯の雄辯美辭法ソツクリなので、余の如きは聊か氣障な心地もした。

何といつても馬場氏が雄辯家であつた、洋行歸りの新知識で、眉目も秀麗で、論理整然、舌端火の如くであつたから、余の如きは其の一言一句初めから終りまで全部繰返し得るまで能く記憶した、然も當時の辯士は羽織の着流しで、袴など滅多に着なんだ、馬場氏の如きも、冬期など婦人のショールのやうなものを長々と襟卷として居られた。

黒岩氏とは其後記者として會見もした、余の初めて朝報へ入社した時は、三十間堀の編輯局を出てから、ズツと奥の路次内へ別に一戸を借りて其處を事務所のようにして居られ、山田藤吉郎氏と共に挨拶に及ばれた、氏は純金の煙管に菊水の刻煙草を吹かすが癖で、此處では時として同好の道樂人を集め、溫袍など着込み、大胡坐で花合せに徹夜せられるが例だと聞いて、頗る意外に感じた。

併し氏は非常に强い感情家で居ながら、又努めて理性に遵ふ特性にも厚かつた。曾て余が論文で教科書事件を攻擊し、東久世伯が之に關係あるやの說をも捉へて、非難を加へた處、氏は編輯局で余に、氏の緣女と伯の令息との緣談が決して結納の取交せから、結婚の日取まで極つたことを話し、伯攻擊の論文では實に弱り返つた、併し理論としては申分ないから諦らめて居ますがネと打明けられたこともあつた。

氏はまた非常な讀書家で、其家の玄關には、訪客の冗談贅舌で讀書を妨げられることを率直に記し、早く要談を終つて歸る客を歡迎し、更に全く來訪せぬ客を歡迎するなどとも記し、且大抵の客には留守を遣つて擊退されたといふ。

氏が新聞記者として大に識られたのは、彼の探偵小說の飜譯で、それが到る處に歡迎され、朝鮮の或る料亭の女將などは、涙香さんの小說といへば、必ず目を透さずには居られぬが例であつたといふ、氏は原書を再三繙讀して悉皆腹に入れ、然る後幾んど自分の手で作るやうに譯せらるゝから、極めて明瞭に、極めて面白く讀まれたのだといふ、後にはラ・ミゼラブルの如き高尙な小說にまで手を着け、三度〳〵の食事にも其卷を手離されず、唯譯し往く間、時々原文を參照的に視られた位であつたと聞く。

氏の飜譯小說は、新聞に載つて歡迎された外、更に刊行されても新刊としては勿論、貸本としてまでも永く愛讀された。

斯まで評判の宜い氏の小說は擧げて扶桑堂といふ書肆に無償無代で版行を託された。是れは氏が始めて萬朝報を發刊された頃、扶桑堂の主人が俠氣から氏に二百圓を提供した其恩誼に酬ひらるゝ趣意だといふ。

朝報發刊の辛苦は、實に一種の立志傳たるに足る、當時別段の資本とてもなく、紙代は日々現金でなくてはならず、郵送するにも五厘切手を毎日買入れるといふ狀態で、氏は山本、生島、片山の諸同志と共に、編輯もすれば探訪もする、營業は勿論、夜間露店で新聞賣りをもしたといふ、ドン底から新

聞紙を仕上げたことに於て、氏は正しく斯界の一大人傑といはねばならぬ。

徹底性の凝り家、後の禿頭

黒岩氏が多くの新聞紙中から赤手空拳で屈起しようとならば、何等か特色を持つて、世間の耳目を衝動せねばならぬとて、新聞紙を赤色としたのも其一ツであらうが、權門勢家の不良な點を摘發したのも其信條の一であつた。

此れがため氏は探偵小說に散見する變粧を外交部員にまで實施させて、警視廳以上の邊にまでも潛入させたが、又尋常火災や盜難などの小問題で其家の番地や人の年齡など、兎角に宜い加減なのが例だが、之を精確にさへすれば、總ての記事にも信用が集まるといふので、極めて細かなことにまで注意させられた。

此風氣が朝報社の型であつたやうで、外交部員など總て驚く程の眞劍さであつた。或る一人が警視總監の大浦兼武氏が潛かに妾を蓄へて居る、場所は赤坂溜池の裏路内で、妾の名は堀貞といふ、現に大浦さん一夜忍び姿で路次の奥の妾宅へ入込んだのを付け行いて見屆けたと報告に及んだ、小林天龍氏が疑はしいと注意すると件の外交員は、之が萬一不實ならば自分の首を賭するといふので、幸德秋水が机の塵欄に書いた。トコロが堀貞とは大浦氏の愛嬌の法學士堀貞氏のことで、當夜大浦氏をアラマアと悅び迎へた若い婦人は、美人で聞へた氏の令孃卽ち堀夫人と後に判つたので、社中大笑ひをする、外交氏大に面皮を失して進退伺ひに及んだこともあつた程だ。

黒岩氏は又記事の直截簡明を貴び、堂々たる大記者をして、一々雜報をも刻苦して書直させられた。去れば新聞記事一行のために費す原稿紙は、實に九枚何分の割合に當つたとのこと、隨つて時事短評のため、八面鋒といふ欄を設け、寸鐵殺人の筆法を用ゆるやうにとのことであつたけれど、何人も之に適するものを書能はぬので、黒岩氏自身時々精苦して書かれたこともある。徒らに長くて不得要領な文句を並べるものなどに比すれば、其差月鼈も啻ならぬ、事は舊いが今も新しく諸方の新聞の好い參考ともならう。

黒岩氏は凝り家であつた、西洋音樂から、金石學にも、相當見識を持ち、長唄などは堂に入つて居られた、舞踊を視るにも巧者で有つた、撞球にも凝つて、一簾の選手たる資格を具へ、聯珠では恐らく日本有數であらうが、總ては徹底的に研究されたのだ。

唯本式の圍碁は古今の有らゆる棋書を讀まれたに拘らず、又田村秀哉（本因坊）に師事されたに拘らず、實力は初段に四目程度に止まつた、尤も棋書を讀んだ丈け、批評は旨くて、本因坊も時々舌を捲いたことがあつたと聞く。

尤も良く凝られたのは、彼の天人論の著述だ、氏は其ため希臘以來歷代のあらゆる哲學書を買込み

内村先生にも指導されて、それを順序正しく讀破して、然る後、天人論を著はされた。常識で哲理を論じ、釋迦が蓮華を尊ぶのは、熱い印度で、蛙が蓮の葉の上を悦ぶと同じ心理だらうなどといふ筆法もあるので、世間の喝采湧くが如く、所謂洛陽の紙價を高からしめて、其出版には、重版又重版、幾んど間に合はぬ程に賣れ飛んだ。

隨つて其利益もタイしたものであつたけれど、氏は悉く朝報社の收入として、一文も私有されなんだといふ。併し利益に恬淡な氏も金錢にはシマリがなく、如何なる月でも、社の會計から前借されなんだことがなく、此點からいへば、山田藤吉郎氏の經濟殊に家計に手堅かつたことと、全く反對であつたと聞いて居る。

凝り性の一端として、氏が角力通であり、三木愛花氏と共に、文筆家中の好角通で他の追隨を許さなかつたことも世の知る所だ、彼の名力士荒岩があそこまでに成つたのも、氏に負ふ所、實に少くなかつた、而して此緣故で氏は西方に深い關係があり、相應負債も脊負ひ込み、余に自分七十歳になつたら始めて此負債から免れ得る豫定だなどと打明けられたこともあつた。

角力のためから、氏は花柳界へも相應出入されたらしい、新橋のお久米やその他の老名妓は、皆氏を先生〳〵と呼び、氏がお辭儀をして腦天の禿掛つたのを見て笑ひながら、先生お辭儀は言葉丈けに成さい、左もないと禿が露出して見つともないからなど揶揄したこともあつたが、晩年氏は余等と多く赤坂方面へ能く遊ばれた。

夫人身受けの珍事、貞節な夫人

黒岩氏の先夫人は生粋の江戸ッ子で、然も其美點よりも多く缺點の所有者なので、氏の舊友中から其離緣を勸める人も少くはなかつた、併し情誼に篤い氏は千忍萬忍されたけれど、或る事情のため、寧ろ夫人から離籍を迫つた位なので氏は竟に之に應じられた。

其處で後年氏の舊友相計り、今更新夫人とても、堅い方面から迎へるよりもと、豫て馴染を重ねられた赤坂の妓榮龍を身受けして氏に贈つた、其身代金などは、山田藤吉郎氏其他が多く引受けられたのだと後に余は耳にした。

余が朝報を去つてやまとに移つてからのことだ、其營業部に勤務中の鈴木英也氏、古くから青年自由黨などを組織した信州志士で、其れが赤坂の竹の家といふ女將の情夫扱ひを受て居たとかで、此の鈴木氏は現に其引祝ひが竹の家にも配られて來たこと、女將は踊の師匠まで兼て居て、殊に榮龍と親しかつたことまで打明けたので、余は其意外の成行に一驚した。

然るに數日後の萬朝報に、我黒岩社長が榮龍を購ふたといふ世說もあるが、榮龍の引いたのは事實

だけれど、引かせた當人は綽名を禿岩といふ相場町の者だとて、其禿岩なる人の寫眞まで揭出したものだ。其日恰度有樂座で何かの會があり、余は恰も朝報の中內蝶二氏と落合つたので、鈴木氏から聽いた次第を話すと、中內氏は顏色を替えてまで驚いて居られた。その惶惑は如何ばかりであつたらう、余は其大なる悲劇であり、喜劇であることを想はざるを得なんだ。

後に松下軍治氏や大谷聽濤氏と新夫人拜顏のためと、例の惡戲から黑岩氏邸へ押掛けると折しも風邪で引籠り中の氏が面會される、確めると新夫人の榮龍たることが分明したけれど、生憎外出中とあつて面會し得なんだが、後に大阪の旅宿花屋で落合つた時、黑岩氏から始めて新夫人を余に紹介されたが、何ぞ知らん、余は榮龍時代盛んに圓城寺氏などと一座したので熟知の間であつた。

新夫人は極めて黑岩氏に貞實で總てを氏本位とされたので、先夫人とは比較にならぬとて、氏の周圍にも評判が宜かつた。晩年氏が病んで大磯で療養中、須崎默堂氏と余と往いて見舞つて歸る時、夫人は驛まで見送りながら、氏が平常から養生家で、人參は勿論、九枝三葉までも服用され、唯今は六種の服藥で、それのみにも容易ならぬなどしめやかに語り居られた。

氏は心臟の痼疾があり、曾て內閣問題で余等と檢事總長平沼騏一郎氏を大審院に訪問した時など、彼の寬かな階段ながら、三階の樓上まで登るには息切れがして、直に總長室に入るを得ぬので、斷つて別室に休憩し、總長から特に紅茶など饗せられて後、始めて面談に及んだ程だ。

大浦兼武子なども、氏の宿痾を氣遣ふて、余が面會する每に深く注意するやうにと傳語されるが例であつた。

氏が最後に大學病院へ入院された時、余は支那から歸つて之を見舞ふた、醫師から面會謝絕中なので、氏の令息日出雄氏と別室で病狀など話て居る處へ、夫人が來られ、氏が特に面會を望まれるからとて余は病室で氏に面唔した、當時夫人は看病のため日夜衣帶も解かぬといふ誠實振りで、余等も實に感心せざるを得なかつた。

氏は初め朝報で盛んに世間の惡口もしたので、他の非を訐く爲にも、非世間的が宜いといふ主義であつたが、山本權兵衞內閣倒壞のため、余等は極力氏を引出した、其ため氏は最期まで花々しく公人として奮鬪されたが、其れは別項で記述しよう。

第二十　明治大帝崩御

群衆の祈禱、富人の忠誠

明治四十五年七月二十日東京全市、否、日本全國民を驚倒すべき發表があつた、其當時侍醫頭の岡博士と御用掛たる青山三浦兩博士始め、多數侍醫の拜診として宮內省から公示された明治大帝御容體書だ。

大帝には此月十日帝國大學の卒業式にも臨ませられた。御平素から糖尿病の御容子であらせられたが、檢尿などは固く拒ませ給ふたなどとも傳へられた、大學臨幸の折も階段の御昇降さへ御大儀に拜されたといふに、其十四日から御就床あらせられ、而して十八日に既に御重體に陷らせ給ふといふから、御病勢の昂進迅速を極めたと申すよりも、大帝が常人の企及し能はぬ御我慢强い結果といふが至當でもあらう。

余は一夕日比谷公園を步行中、不圖宮城前に於て陛下の御平癒を奉祈するものがあると聞きて、取敢へず行て見た、二重橋から（向つて）右の濠端から砂利敷きの上へヒシと打俯した無數の群衆がある、皆熱心に合掌し拜伏して居るその光景の崇嚴で而して慘憺たる、余をして覺えず足までスクませた。其れ以後、晝間行て見ると、笠を折敷いて拜伏し合掌する農夫らしい人々も多く見えた、但夜分ほどの多數でなかつたけれど、日が經るに從つて祈誓の人が殖え、竟には楠公銅像附近までも御全治祈禱の群ならぬはないやうに成つた。

二十九日からは彌よ御昏睡狀態に陷らせ給ふたとの發表があつて、國民不安の念は總てを壓した。余は當時太平洋通信を主管して居たので、前日來社員を宮內省に詰め切らせ置いたが、此日の夜半過三十日の午前一時半頃電話のベルが鳴るので、スハとばかり之に取付くと、悲しい聲で、陛下には午前零時四十三分心臟麻痺で終に神去らせ給ふたと一時十分に發表せられたことを報じ來つた、余自身神氣昂奮のまゝ、豫約であるから卽刻大倉喜八郎、益田孝の兩男爵邸へ之を電話した、益田男は寐もやらで案じ居たとて、取次の女中に哀意と謝意とを傳へさせ、而して大倉男は自身に電話口へ出で、到頭御隱れ遊ばされましたか、何とも申しやうもありませぬなアといつたが、やがてブツリ電話を切られた、蓋しそのまゝ、泣入られたことは音聲から考へても想像に難くない、世間から尋常富人といはれた此兩男爵に此至誠のあつたことも、余として聊か意外にも感じたと共に、又大帝の御德望の深くあられられたことを感激せざるを得なんだ。

外に五六ヶ所へ電話を掛け終ると、兩脛がシタタカ蚊に襲はれたことを始めて感じた、更に外面を

見ると、少しく東雲らしいので、宵から一睡もせぬながら、神澄み心昂ぶるまゝ、先づ玄關の八疊の間へ机を持出し、週刊サンデー（それも通信社と共に余の主宰であつた）の誌上へ奉弔文を掲ぐべき筆を執たら、今度は涙ばかりハラリ落ちて、胸が一杯だ、是れではとさまゞに考へ直すと、萬感漲り落つる如く、正に是れイムスピレーションの最高潮にも達したのであらう、一氣に稿を艸し終る時、曉色迫り犬の聲もすれば、玄關前の大きな門（芝公園源流院の門で余が前に賃居しつゝあつた）も寺の和尚に由て開かれた。やがて新聞紙の配達もあつたが、平生のまゝで、家人も皆起出で、朝食に取掛らうとした頃、始めて崩御の號外が續々として配達され來つたので、折柄の晴れながらも、天日また曇る心地した。

御質素な御病室、大浦子泣く

天にはす刻の日なかる可らずで、七月三十日直ちに　皇太子嘉仁親王殿下が三種の神器を受けて御踐祚あらせられ、樞密院に御諮詢の上、大正と改元があつた、其詔勅に曰く。

朕菲德を以て大統を承け祖宗の靈に誥げて萬機の政治を行ふ玆に

先帝の定制に遵ひ明治四十五年七月三十日以後を改めて大正元年となす主者施行せよ

同時に　皇太子妃節子殿下を皇后に御册立、先帝の皇后宮は　皇太后陛下と敬稱させられ、又三十一日から向ふ五日間及び御大葬當日廢朝あらせられる旨仰せ出されたが、向ふ一ヶ年の諒闇期たること申すまでもない。

始め此年六月頃から米價が騰貴して、細民の愁訴隨所に聞え、米商の不正枡を用ゆる者の檢擧されるもあり、到る處施米の議などが行はれ、七月八日東京市では外國米賣出しを評議し、鐵道廳では施米の運賃割引を發表したが、聖上御惱のことが一び知れ渡るや、今まで嗷々たりし愁訴は火の消えた如く、殊に崩御の悲報傳はつてからは、國民は唯々天に哭し地に泣いて、我れと我身を知らぬといふ爲體で、諒闇とは申しながら、世は全く闇の心地した。

御大葬は九月十三日で、晏車六龍に駕して遠く伏見桃山に向はせられた、當日全市民は新たな哀愁に鎖されたのに、翌朝又も國民をアッといはせたのは、實に乃木大將夫妻が其前夜殉死したといふ新聞號外で、官民とも彌々益々嚴肅の氣に打たれた、斯の大帝にして斯の臣あり、余は今多く筆を走らせ記するに忍びぬ。

皇太后陛下には御髪こそ卸させ給はぬけれど、旦け暮れ唯先帝の御事のみ偲ばせ給ふ中、翌大正三年四月十一日假り染の御病氣が基で、忽ち先帝の御跡を追はせ給ふた、實に大帝崩御後二十一ヶ月目だ、御諡號を昭憲皇太后と申す、斯くて三日間廢朝仰せ出され、五月二十四日大葬を行はせられた。

余は大帝の御葬儀を拜し能はなんだが、今度は特許を得て晏車を代々木驛に奉送した、大帝のそれと

同じく伏見御陵に葬むらせ給ふものの、靈柩車の御發靭に普通停車場を用ゐさせられては臣民の乘降にも不便であらうとの御心遣ひから、代々木原頭に假停車場を設け、驛前驛後は總て白黑のダンダラ幕で打掩はれてあつた、御發車は午後七時なので、余は規定の通常禮服に喪章を附け、上澁谷なる大山公邸の前や、竹籔間の狹い路などを辿つて新驛に駈付け、多くの人々と共に恭々しく柩車の剳り出すを奉送した。

或る日大浦子爵を訪ふた時、子爵は特別を以て先帝の御遺骸に拜訣（御暇乞のため）を許されたとて襟を正し『御遺骸は御病中のまゝ御室に安置されてあつたが、その御室の疊など、日光に焦げて赤くなり、吾々風情の家の物よりも御質素だ、陛下が御平生御儉約を守らせ玉ふたことは、是れでも推量し得られるので、何とも言へぬ畏さに、唯涙のみ迸ばしり出で、他の何物も見辨へ能はなんだ』とて、子爵も流石に語りつゝ大粒の涙を落された、誰れかは同じ涙を禁じ得よう。

明治大帝の崩御は、我臣民一統を肅然たらしめたのみではない、實に世界にも大なる感動を與へて現に倫敦タイムスの如きは、日本が大帝の御啓沃に由て歴史的にも稀有な發達を遂げ、今や世界の一大雄國とはなつたが、大帝崩御のため、日本國民は其偉大な指導者を失ふて、國運これから下り阪となるであらうと極めて長文を以て之を論述した。我國民も斯くして世界的に彌よ警戒して大帝の宏謨を苟くも失墜せぬようと、皆心中に誓はぬはなかつた。

第二十一　明治大帝御事蹟

英國を呑ませ給ふ、コンノート親王神威に打たる

明治三十九年二月十九日英國のアーサー・オブ・コンノート親王來朝し、翌二十日參内して英國皇帝から贈進のガアター勳章を捧呈さるといへば、別に意味もないようだが、實は大帝の大帝たる御面目が玆に活躍し居るようで、然かも世間未だ弘く之を知らぬようだから、敢て謹んで之を記す。

親王來朝の折は西園寺内閣（外相は加藤高明、内相は原敬）であつたけれど、英國皇室のガアター勳章贈進のことの定つたのは桂内閣の時代であつて、卽ち日露戰役終つて後、英國皇帝からその最高勳章を同盟國の天子に贈呈されるといふので、コンノート親王を軍艦タイアデムで日本へ遣はす旨交渉があつた、桂内閣は素より一議に及ばず之を承け、その儀式萬端まで内定した上、大帝の御裁可を奏請に及んだ。

此儀式の一ツに、コンノート親王が軍艦で横濱御着の際、大帝御親から同港埠頭まで出迎はせ玉ふ旨の一節のみに勅許が無い、桂首相から再三伏奏に及ぶ毎に、陛下は唯打笑ませ玉ふのみなので、首

相は伊藤山縣の兩元老に勅許を賜はるよう努力懇囑した

山縣公は例の口不調法故、それよりも陛下の御氣に入りでもあり、又奏請にも巧みだからといふので一も二もなく伊藤公が引受けられて、參内拜謁の上、英皇室の厚意から、ガアター勳章の謂れやら親王が英皇室の代表であることやらを、例の調子で言上し、横濱まで御出迎ひ遊ばすよう奏請すると陛下は相替らず笑ませ玉ふばかり、流石の伊藤公も奈何しがたく、之を事細かに首相へ打明けた。

事茲に至つては最早爲すべき手段がないとて、首相は竟に辭表を懷中して拜謁された、ところが陛下には早くも首相の心中を御看破あらせ玉ふてか、コンノート親王御着の折は新橋驛まで出迎へようゆゑ、その如く取計へとの御諚なので、首相はハッとして伏したまゝ辭表を捧げるまでもなかつた。

斯る間にも、日露戰役の結果たる南滿洲鐵道その他の利權を引繼ぐべく清國との一切の協定をも終つたので、桂内閣は豫期の如く明治三十九年一月七日辭職し卽日西園寺内閣成り、而して二月十九日の朝には英艦タィアデム横濱着、コンノート親王は其日午前十一時四十分新橋驛に着かれたので、陛下には東宮と共に御出迎へ遊ばされた。

偖て翌二十日宮中正殿に於て勳章捧呈式が行はれた、コンノートと親王は英國の正粧として嚴めしい金色燦爛たる服裝の上に、重く且つ長いガウンを着流し、手づから勳章を捧げて御前に膝行し、之を陛下の御脚に纏ひ參らせたが、何うした機みか、親王は指頭に負傷されてサッと血が流れ出で、侍立の内外臣僚多く色を喪はれたが、陛下には御顏の筋一ッ動かし玉はず、御膝を突出させたまゝ、親王が傷所を繃帶の上首尾能く贈呈式を終つた後、始めて御挨拶あり、傷所の痛みをも御垂問あらせられたので、親王も旅館に充てられた霞ケ關離宮に引取つてから後、接待官等に、明治大帝の御威嚴と御沈着とは實に天授であると感嘆しつゝ物語つたといふ。

桂公等も陛下が横濱まで行幸なかつた御趣旨を始めて悟り、コンノート親王に對する御態度などを仰ぎて、大帝が正さしく不世出の英主で、世界を率ゆる御大度さへ持たせ玉ふことを識つて益々深く傾倒し奉つたと聞く。

陛下は又謹嚴そのものであらせ玉ふた、山縣公は首相としても元帥としても、曾て單獨に御前に伺候し奏請したことはなく、必ず宮内大臣か、侍從長か侍從武官長が侍立の際に於てされたが、伊藤公は唯一人御前に出でられたことが珍らしくなかつたといふ、而して伊藤公も曾て余等に、或る夏の午後、御前に伺候すると、陛下から其方も腰掛けよと御許しは出たが、併しそれも憚つて、卓前に立つたきり御下問にも奉答する内、我腰から背へ掛けて折からの、日光がカンノ〳〵照り付ける、不圖見奉ると陛下の御膝から下へも日光が直射するのに、陛下には御平氣で何とも仰せられないから、自分も何とすることも出來ず、唯流汗淋漓で、凡そ是れ程弱つたことがない、其れに就けても陛下の御謹嚴で御我慢の御强さには恐懼の外ないとシミ〴〵語られた。

銀鈴の御聲、乘馬の御名人

行幸等の鹵簿以外、余が始めて大帝の御英姿を拜し得たのは、明治二十四年十一月二十六日第二回帝國議會開院式の時であつた、陛下は御顏色の聊か蒼味を帶ばせらるゝ程白くあらせられたが、御丈け高く、實に堂々たる御高軀で、御足の運びの勇ましく、恰かもコトンコトンと進ませ玉ふように覺えた、殊に勅語を讀ませ給ふ御聲のスガ〳〵しさ、別に高いとも思はれぬのに彼の廣い式場（貴族院議場）の隈から隈まで透徹する、丁度銀鈴を轉がす如く、何ともいへぬ神々しさで、式場に控ゆる兩院議員は勿論侍立の皇族大臣始め、階上傍聽席に綺羅を飾る外國の使節も中外の貴紳も、皆自然に頭を垂れぬはなかつた、勅語を賜はつてから、陛下は議員等を顧盻しつゝ御退出あらせ玉ふたが、總ては人間以上、正さしく活ける御神と拜せられて、余は終生忘れんとしても能はぬ。

陛下は御身長頗ぶる高く、且御肉も豐かの方であるから、御體量も二十貫以上であらせ玉ふたことは申すまでもない、その御乘馬は殊に御得意であつたが、併し鞍上の御姿は、稍々俯目加減（俗にいふ猫背に近い）なので、調馬師の某が潛かに今少し反り身であらせられたら彌が上にも御立派で申分がないがと申したのを、後に聞召した陛下は、某こそは能くも馬の性質を悟らぬと見ゆ、朕の體量からいへばアラビア馬ならば格別、通常體格の馬は、俯目で乘らぬと重さに堪へぬと仰せられたといふ

陛下の御父孝明天皇は、攘夷論などで天下の沸騰した時、極寒中も每曉早く霜柱の立つ御所の御庭に荒菰を敷かせ、御自身御束帶で其上に坐らせられ、天地神祇に身を以て國難に替らんとを御祈誓あらせられたが、當時御七八歳の大帝も、父帝陛下の御坐の端に侍して同じく神祇を御拜あらせられ、また大帝と同齡のため幼時から御相手に召出された藤波言忠子爵も屢々御庭の一隅に侍せしめられたと子爵の直話であつた、大帝は斬くして御幼少の時から身を以て國家國民に殉ずるといふ御教訓を切實に父皇から享けさせ玉ふた、此精神こそ大帝の御一代を一貫した大御心であつた。

又慕政盛んで帝室式微のため、列聖が寒素であらせ玉ふた故か、大帝も自然に御質素で、天授の歌人として、日々幾十首も詠み出でさせ玉ふ御和歌なども、大抵は反故か、罫紙の欄外などに認め置かせ玉ふたといふ、その御一代中、御避暑御避寒などの仰せ出されがなかつたのも、又御强健で御我慢の强いためではなく、又民を煩はすために御質素自ら甘んじさせ玉ふ大御心の發露であらう。

殊に日清役の際、大本營を廣島まで進めさせられ、陛下御自身廣島城內に坐はし玉ふた時など、極寒中も小さき火鉢一ッ廣い御座の間に置かせ玉ふ丈けで、侍臣から餘りに恐れ多いと申上げると、陛下には出征中の將士が寒苦を想ひ見よとの仰せに、一同唯感激に頭を擡げ得なんだといふ。

當時陛下は出征兵の慰勞を兼て軍の衞生狀態視察のため石黑軍醫總監を派遣あらせ玉ふた。總監歸つて復命の際偶々或る陣中にて天長節なりしも、國旗などの用意もなければとて、兵站部の小吏が紙

に梅干の汁を以て日の丸を描き、それを立てゝ奉祝したといふので、總監も深く感じ、それを記念に貰ひ受けたとて、天覽に供しつつ具さに言上した處、陛下の御目には露の光りが見えさせられたと總監は話された。

京都が御氣に入り、征露役には御泰然

日清戰役は君民共に國運を賭してのことで、然かも明治大帝宏謨の發露の第一で有つた。

さて戰爭の始まつた明治二十七年の三月には、大帝と皇后宮兩陛下の大婚二十五年祝典が盛大に行はれ、而して五月十五日には第六回帝國議會（前回解散後の臨時會）が開かれ、翌六月には再び衆議院の解散となり、その二十日には可なり大きな地震もあつたが、七月二十五日には豐島沖の海戰、二十九日には成歡、牙山の陸戰があり、八月一日には宣戰の公布となり（九月一日は總選擧）九月十三日には大本營を廣島に進められ、大帝は翌十四日東京御發輦、京都へ御一泊の上、十五日廣島御着、第五師團司令部（卽ち舊廣島城內）を御座所と定めさせられた。

去れば文武官ともに廣島に集合し、第七回議會も十月十五日廣島に開かれ、一方海陸共に連戰連捷で士氣大に揚ると共に、文武官の所謂發展も著るしく、廣島花柳街の景氣は素晴らしいもので、當時口性ない下々のものは品行の方正なのは陛下と軍馬丈けだなどとも申した程だ。

清國が天險と恃んだ旅順口も十一月二十二日陷落し、威海衞は翌年一月九日陷落し、曾て鎭遠定遠の兩戰鬪艦を率ひて堂々我國に來航し、流石の勝海舟伯をしてさへ舌を捲かせた水師提督、我國の官民を畏怖させた支那無双の豪傑丁汝昌も、自殺して降を乞ふたのみか、陸上では營口、海城、田庄臺まで悉く我軍の占領に歸したので、北京政府も最早戰ふの勇なく、始めは張蔭桓を使節として來朝させたけれど全權資格すらないとて追ひ歸され、竟に李鴻章自ら媾和使節として二月十九日馬關に到着し、我全權伊藤首相陸奧外相と春帆樓で談判し、その間李が旅館たる引接寺に引返す途次、小山祿之助なるものに狙擊された椿事（三月廿五日）も突發し、爲に折角我國に集中した列國の同情も支那へ轉換する虞があるので、心ある者の憂慮は一方ではなかつたが、幸ひに大帝の英斷で、兩陛下から御慰問に亞で休戰さへ許され、次で四月十七日には媾和條約が調印されたので、その二十七日には大本營を京都に移され、大帝は當日京都へ還幸あらせられたが、皇后陛下も同所まで御出迎へあらせられた。前年九月十三日東京御出發以來實に八ヶ月目だ。

獨佛露の三國干涉に由る遼東還附の詔勅は五月十四日京都で發せられた。然かも大帝には五月二十九日御發輦あらせられるまでは、京都御所で皇后宮と共に御靜養遊ばされたが、伊藤公等は大帝も流石に御故鄕忘じ難しであらせ玉ふたであらう、實に此頃ほど御暢快であらせ玉ふたことは、曾て自分等の見も聞きも及ばぬ所であつたと語られた。

時は五月青丹良きは唯奈良のみでない、京都も實に一年の最好時節だ、殊に上下の擧げて緊張し切つた征清戰も片着いた、大に國威を中外に輝かして好結果を收め得た、大帝が玆に御快暢であらせ玉ふたのも恐れながら當然であらう。

此京都が大帝の御氣に入つたのは、恐らくは此時に優すことはなかつたであらう、後年大帝の御思召で、以後歷代の天皇の御卽位大典を京都に擧ぐるの永制を定めさせ玉ふたのも、單に古典的な深い聖旨に基くのみでなく、又大帝が御生誕地として、山も川も、草も木も、總て御氣に召したためと拜察するも、强がち附會ではあるまい。

大帝の東京還幸は、廿九日靜岡御一泊、卅日御歸京で、而して皇后宮には一日遲れて三十日京都御發、卅一日東京へ還啓あらせられた。兩陛下御同列でなかつたのは、大帝が大本營と共に俱にせさせ玉ふので、御女性を軍師に伴はぬといふ大御心と拜察して玆にも大帝の御心入れの尋常ならぬことが窺はれる。

是から十年後の日露戰役は、明治三十七年二月十日宣戰公布朝野共全力を擧げて敵に當つたけれど大帝には泰然として宮中を出でさせられず、遠く出征軍を御統率あらせ玉ふたのは、流石に御規模の益々勇大を加へたので、御勇氣の程も難有い。翌年三月十日には奉天の大勝と、五月二十七日日本海戰の大勝利とで、全く强露を屈服させ、九月ポーツマスに於ける日露媾和條約が成立し、帝國の威信彌々高く大帝の宏謨も幾んど大成を示すに至つた。

第二十二　やまと新聞時代

大浦子と初對面、笹川潔氏の跡受け

明治四十年春、舊知の福田常松氏が來て、松下軍治氏の意を傳へ、頻にやまと新聞に入らんことを勸誘に及んだ、始めは一笑に附したが、後には眞劍となつたので、余が之を朝報社で話の種に語り出し、松下氏のことだから、最初十年分の俸給三萬圓も前渡し置けばなどと冗談半分に申すと、同じ席に居た香川魁庵氏から之を大浦兼武子爵に話したと見え、子爵からも、如何なる條件なら來るか其意圖を確めたい、三萬圓の前渡位は別段六ケ敷い事もなからうなど言はれたとのことに、余も始めて此問題を考へ、大橋新太郎氏に相談した處面白いから一應大浦子に面會せよとて、氏から子爵へ余を紹介される手順となつた。

斯うなつては何よりも先づ朝報社を罷めるが順序だから、既に紹介者たりし幸德秋水も去つた後でもあるし、余は直接黑岩氏へ打明けた、スルと氏と山田氏との連署を以て、一旦斯うと言ひ出しては枉げぬ貴公の流儀だから、餘儀なく言出でに任す外はないとて、長文の感謝狀に添へて一封金を贈ら

れた、感謝狀を貰つたなど、余に取ては是が實に嚆矢であつた、それ丈け朝報社の情誼に對しては、忘れがたい感情を持つ。

大橋氏の話に、大浦子爵は鬼總監などいはれて、容貌から威めしいように想像されるけれど、實は眉目も整正して、每時莞爾々々して居られる、全く意外だとのこと、又德富蘇峰先生の如きも、絕えず往訪され、現に氏が余紹介のため子爵を訪ふた時も、先生が居合せられたとのことであつた。

斯くて打合せ通り一夕、余が往訪すると、成程國務大臣でもあつた人には似氣なく、謂はゞ局長級に相應はしい住居で、建築こそ稍新しいが可なり手狹の家であつた。折しも子爵は風邪中だが、約束ゆゑ缺禮ながら病蓐中で會ふとて、玄關の直ぐ次の階下の一室で面會し、余の酒客たるを聞いたからとて、白葡萄酒などを頻に侑められた。

面語の要點は、十年分の俸給前渡しなどは無論冗談に止まるけれど、余が記者としての面目を辱るとか、其能力を失つた場合でなくて、恣に余が罷められた時、余の生活を保證する丈けの責任を持たれたいといふにあつた、子爵は、其儀は申すまでもないことであるから、松下の要求を容れて、彼れの新聞に努力して貰ひたいとのことで、初對面は終つた。

子爵からの印象は、大橋氏の說の如く如何にも宜い、爾後屢々之を訪ふたが、何時でも訪客が下の應接室に充滿するので、如何に急いでも一時間か二時間待たねばならなかつた、子爵は其二階の一室を會見所とし、正面には小楠公の畫像と、僧五岳の額を揭け置かれ、且辭去の時は、必ず玄關まで見送られて、苟くも渝ることがなかつた。余の識る貴紳中で、終始一貫、士に對する禮を缺かなんだのは、實に子爵の特色であつた。

斯くて後、余は初めてやまと新聞に往いて松下軍治氏に會見して入社のことを取極めた。當時のやまと新聞は、其紙幅が特別に大きく、且獨逸人クンツィと、英國婦人某孃とが居て時々英獨文を揭出した、外に代議士として勇名を馳せた斯界の老將小室屈山氏や、井土經重氏(靈山)も居られた、前主筆は笹川潔氏で、大浦子爵の紹介で入社し、入社の際、全社員を召集して一場の訓示に及び、其官僚的態度が少からず老骨連の反感をそゝつたとかで、余の行動も幾んど目を側だてゝ迎へられたといふ、併し斯くとも知らぬ余は、相替はらずの態度で、何分宜しくと挨拶し廻つたので、孰れも案外に感じたといふ、其ためか、屈山氏などは種々の昔話をされ、往時代議士時代、地租問題で愛宕組なるものを組織して同志の糾合に奔走し、其ため、綱曳跡押しと三人の車夫を用ひたのは、實に自分(屈山君)が開祖であつた、けれど壯士が愛宕館の樓上に闖入し來つて大いに鐵拳を揮つた爲、何も角も滅茶々々に終つたとて、隱す所もなく哄笑された。

松下軍治氏、極めて情誼に厚い

人間到る處青山ありで、如何なる新聞社にも、多少の變物の居らぬはない、獨逸文學者として今でこそ大人氣しく仙臺の第二高等學校の先生で治まつて居られるが、一時は相應に雄飛もし脱線もした戸張筑風氏もやまと新聞の文學欄を擔當し時々出社された。

少年から文名を馳せて、變つた天才と稱せられた正岡藝陽氏も居られた、小川煙村氏も居られた、漢文家たる井上靈山氏の外に、俳句家として、石楠派を創立した臼田亞浪氏も居られた、殊に漢詩に巧な寺岡鏡谷氏（彌三郎）などは早くから營業部長として、創業の功苦を積み來られた、此等の逸話を叙する以前先づ總てを統卒する社長松下軍治氏のことを記するが順序であらう。

松下氏は信州の人で早くから出京を欲せられたが、父が許さぬので然らば屠腹するとて、刄を腹に突立て流血淋漓たる光景を示されたので、其れ程ならばと父君も我を折つて竟に上京を許されたといふが、何ぞ知らん、此屠腹には兎を布に包んで腹に抱へ、其上から刄を刺したので、兎は特質として刺されても悲鳴を擧げぬとか。

氏は幼時國の眞言寺に入つた事もあるとか、眞言秘密といつたようなことが得意で、社員を聘するにも種々の試みをする、彼の男の鼻の格好から見ると油斷が出來ぬなどゝ能く余に話されたものだが、或る時社員に俸給を渡すのに、ワザと百圓札と十圓札とを取違ひ、其男が社長室から編輯局へ駈け行く靴音を聞き濟ましてから呼戻し、その百圓札を取替て、正直さを試すなど隨分油斷のならぬ點もあつた。

氏は天性相場好きと見え、國産の麻を賣りに伊勢方面までも遣られ、其收得金で桑名に於て米相場に手を着け、何時かは東京の本場を踏んで、思ふさま相場を張らうといふ志望を懷いて居られたと聞く。

上京後、やまと新聞を引受けられる前から、新聞が遣り度く何か書いて見たがモノにならぬので慨然たるまゝ、小石川のドン〳〵橋の上に彳み、其書いた物を河中へ投捨てられた、折節茲へ昔の駕籠で通り掛つたのが漢方醫として名高い淺田宗伯翁だ、翁は諸事舊式で、明治時代となつても依然駕籠に乘つて患者を見廻るといふ爲體で、恰も其途次であつたのだ。翁は此時駕籠から不圖氏の態度を見、兎に角我が家へ來て見ろとて伴ひ歸られたので、氏も暫らくは淺田家の食客となり、其間も蒟蒻版や謄寫版などで頻に新聞らしいものを試作され居たといふ。

後に或る緣故で福地櫻痴先生の周旋でやまと新聞を手に入れられたのだが、其等の緣故で、氏は祥月命日毎に淺田翁の墓を展したのみか、櫻痴先生のために、出來る丈け盡して先生の生活を助けるなど、其誼を重んずるの情實に感に堪へるものがあつた、余が先生を識つたのも、氏の紹介で、先生の原稿で、未だ出版されぬのも大分氏の家にある筈だ。

先生の歿後、石碑を建てゝ其名を不朽にしたいとて、立派な石碑を造り上げ、先生の舊居にも緣が多いからとて、之を上野池の端に建てようとされた、無論無造作に出來る事と思ふて居られた處、豈

圖らん上野公園から付屬一帶の地面は宮内省の所有で、其特許を受けねばならぬが、省の方針としては如何なる功績があろうとも、個人の建碑など罷り成らぬとて、種々の筋を辿つて運動されたが寸効もないから、余は最後に元の先生の住宅跡の地所を少しばかり買取つて、茲へ建ようと建策したが、其れでは餘り見素ぼらしいからとて、更に東京市の管轄たる淺草公園へ移す方針に變じた。

淺草公園でも、個人の建碑ではと大分故障が出る、其内に不幸松下氏は病死される、余等は其遺志を嗣いで、公園内には現に市川團十郎の銅像と、小ながら瓜生岩子のそれがあるといふのを理由として百方說き付け、辛ふじて特許を受けた後、建碑し得たが、上野へ建てるのが變つたため之を改刻するは勿論、其除幕式には、殊に大隈老侯を煩はすとて、余から切に願ひ入れて老侯の承諾を得、兎に角盛大な式を擧げ得たのは、確大正八年の十一月であつたと記憶する、氏も是で定めて地下で滿足されたであろうと信ずる。

諸事豪壯で行く

松下氏は後にこそ築地海岸の元米國公使館の跡（後に築地ホテルとなつたと記憶する）を買入れ、堂々たる和洋の建築をして引越されたが、余の入社當時は下谷の練塀町に居られた、是よりも以前は貧富度なく、其生活振りにも浮沈が多かつたが、常に米さへあれば何とか活きて往かれるものだとて毎年年の始めに一ヶ年中の飯米を買入れられる家法だつたといふ。

余の俸給なども、空切手で仕拂はれたこともあり、銀行へ持參すると、行員が取調て、生憎預金が切れましてと氣の毒氣に斷つたこともある、併し氏は絶えず相場に手を着け、儲かる頃など、百圓札を手掴みのまゝ、仲買の使ひなどに與へられるので、窮乏時代でも氏を惡く言ふ者はなかつたと。

氏が嚴格な大浦子爵の知遇を受けられたのは何かの犯罪事件で仙臺方面へ拘引された頃、向後は屹度改悛して君國のために御奉公するからと申出たので、子爵も感動され、殊に知遇されたのだと聞く、氏は又同じ手法で大審院長として極めて嚴肅であつた平沼麒一郎氏の知を得られたと見え、曾て余に心から信用される人間は今日平沼一人だとまで密に語られたこともあつた。

氏の小田原の別莊は當時可なり名高かつた、始めは同町の天神町へ五六室の一家を建てられたのだが株で成金となると地所を買ひ弘げて山上にまで及ぼし、茲に更に規模の大きい本家を構へられたのみか、小田原の飲料水が惡いとて、一里程距つた石橋の山へ貯水池を造り、茲から私設水道を布き別莊へ引用し、餘水は泉池にまでも引かれたが、山縣公は勿論小田原方面に別邸を有する清浦子、大倉喜八郎男、益田孝男なども、皆前後してその分與を受けられた、殊に庭園には水なかる可らずとする山縣公は飲料水の外、門内の小流れや家の底から中庭へまで注入する流れをも受られた、而して念のためとて氏が固辭するのも聞かず、一の證書を取替はして水料年額二百圓づゝ拂はれるので、氏は山

縣の爺奴の用心深さを見よなど笑つて居られた。

別莊の主家には可なり贅澤を盡されたもので、欄間の障子さへ骨を金砂子にされた、是は氏を愛顧した田中光顯伯の意匠だとて、氏は殊に踏臺を持出して余に一覽させられたこともあつたが、阪の上り側には大きな石を据ゑ、伯から釣鐘石と命名され、之に因みて別莊名も洪鐘庵と稱せられた、諸事豪壯好みの氏は、函根の荒川底から途方もない大石を庭上へ運び込み、其のため夥しい人夫など使用するので、石好きの山縣公は、余に對して松下も思ひ切つた道樂をするのう、併し京都で鞍馬山の奥から好みの大石を曳出すこと丈は、快は快だが三菱程の力がなくては出來ぬとて笑つて居られた。

此別莊の直ぐ上の隣地は、閑院宮家の別邸で、氏から地面擴張のため御拂下げを出願した處、許可がない、スルト氏は地境を垂直に切下げられた、宮家から危險であらうと抗議されると、氏は天變地異は存ぜぬが、自分の地所を如何に處分するも自由の筈でと取合はれなんだ、是が實に氏の筆法だ。

併し宮家に對しては尊皇的に敬意を表してゐられた、現に余が庭の阿屋へ上ると、氏は下から皇倉しく呼下し、垣一重隔てた彼の室では、王女達が琴など引かせ玉ふので、阿屋に入ることは禁止だと話されたが、後には氏の希望通り地所も拂下られ、氏はまた特に宮樣へ拜謁まで許されたとて大悅びで居られた。

此別莊の出來る頃小田原では何か金持の華族とかゞ大別莊を建てるそうだと評判し、松下を間違へて松平など言つて居たといふ、氏は此別莊へ屢々舊友を招いて地引網など曳かせられて、山縣公も着流しで能く來遊された、或時氏が公を招待して、先づ飯を喰始めると、公がオイ松下、拙者だから宜いが客より先に主人が飯を喰ふなど禮でないがと笑はれたこともあるとて、席に侍した新橋の名妓お妻が之を一例として松下さんは豪傑ですネと評したこともある。

又大浦子が山縣公、清浦子等と同じく招待された時、席に居た妓を顧みてヤ先刻は汽車中でと挨拶されると、清浦子は、大浦君が藝妓に話し掛るなんテ恐らくは空前の沙汰であらう、然も秀逸だネと評せられたので、公等も絶倒されたことがある。

此由緒ある別莊も、氏の歿後整理のため賣ることゝなり、余から三井家へ持掛けた處、別莊を持たぬ家憲だとのことに餘儀なく、竟に山下龜三郎氏の手に歸した、價も四十萬圓以下で、山縣公なども惜いけれど其れでも賣る外あるまいと憮然とされた程だと聞いた。

衆議院に出る時

松下氏は借金の名人といはれたが、併し徒らに低頭平身などをされぬ、却て其反對に出られるから妙である、曾て金錢問題で大倉喜八郎翁を訪問されると、折節散髮中だからとて可なり待たせられたものだ、彌よ面會の段になると、氏は先づ一杯の水を求めてグッと飲み干した上、ウンと翁を睨み付

け、貴公は天下の士を遇する道さへ知らぬなど一喝を食はせて大いに其度膽を抜き、然る後欲する丈けの資金を出させられたと聞いて居る。

山縣老公のお相手をして圍棋など試むるには、無遠慮に大胡坐をかゝれて、清浦子さへ膝も崩さず神妙に差控へられ、大倉翁などは次の間へ平伏されるといふのに、氏丈けは、フヽンと時々老公の手を冷笑までされるので、其れが又頗る老公の氣に入つてゐたのだといふ、安廣伴一郎氏が老公の前でグビリ〳〵飲んでは管を捲き、散々に老公を罵倒して、却て愛されたと同工で往つたのでもあらう。

氏は如何なる貴紳の前でも無遠慮であつた、曾て余等と大隈侯を訪ふて内閣組織談を遣つた時、侯は一同を加藤高明子へ紹介することゝなつたが、オイ松下、貴公は私の處ならこそ宜いが、加藤の前では其毛脛を出して叩く癖丈けよせよといはれたことがある、氏は毎時侯の前で袴を捲り上げて毛脛を剝き出す例であつたようだ。

又、伏見宮元帥殿下の御邸へ推參して、余等と山本權兵衛伯を彈劾した時、氏は「若し權兵衛が嚙り付きましたら」など言出されたので、黑岩周六氏が溜りかねて氏の袂を引いて留められたともある、後で黑岩氏から嚙り付くなんテいふ意味が殿下に判るものかといはれて、成程なアと一笑された程だ。

氏が始めて東京市から衆議院議員として候補に立たうとされた際、其智囊たる寺岡鏡谷氏は乘るか反るか、思ひ切つて遣るべきだと勸めた、併し初めの氏は言論社會でも甚だしく不評判であつたのでそれを緩和すべく余に依託し、築地の待合若松にでも一會を催ふすやうにとのことに、余は圓城寺天山、大谷聽濤、村松恒一郎、福田和五郎など當時の新聞社會の矢釜數屋數氏を招待した。

話を持出すと、何んだ松下が出ると、それよりも貴公出ろ、松下などを援助が出來るものかと言ふから、余は然らば默殺されても宜い、惡口丈け封じて吳れといふと、折角柏軒の賴みだ、默殺としようといふことになつたので、茲で祝盃を揚げようとなり、金主が松下なら大いにシャンペンを拔けといふ、余が命ずると、席に居た照近江の第二代お鯉（西園寺公の寵妓と傳へられた）がシャンペンサイダアの瓶を持出す、余が女將のお松に若松家ともあらうものが、シャンペン酒とシャンペンサイダアとを間違ふとはと罵倒すると、女將も流石に憤慨して、盛んにポン〳〵拔き立てるので、シャンペンの代金のみが百二十圓からに上つたので、松下氏も後に呆れて居られた。

併し首尾能く松下氏は當選されたので、後には其御禮兼祝ひの爲とあつて、箱根塔之澤の環翠樓へ件の猛者連の外、社の高木信威氏なども參加し、斯波貞吉氏其他各社の主な記者二十餘人を招待した主人側の接待役が余、藝妓の掛りがお妻で、新橋の名妓二十餘人を呼んで大騷ぎをし、一泊に及んだが、一組の情事さへなかつたとてお妻も呆れて居たが、翌日は山駕籠を仕立てゝ元箱根まで男女で押上るなど、隨分タヽラ遊びをした、茲でも亦松下式が見える。

當時藝妓に强請られて、ウンと箱根細工を買はされ、彼の豪傑福田和五郎氏さへ財布の底を拂つた

などの珍談もあつた、福田氏は之が機緣となり、能く松下氏の小田原別莊へも來遊し、余と青葉滴る下にお妻を相手に頭山滿翁との關係を仔細に吐かせたとも有つた、藝妓の豪傑觀なども實に無量の趣味があるものだ。

活動寫眞利用の元祖

松下氏はやまと新聞のため、實に多くの資金を注入された、素より相場からの收入を投ぜられた故全然資金と視得まいけれど、それでも前後通じて融通されたのは八十萬圓を超えて居るといふ。

愛國忠君主義をモットーとして活動寫眞を宣傳に用ゆると共に、新聞の廣告にも利用したのも、實に氏を元祖とせねばならぬ、此ため余等も編輯局に於ける山縣公の額面まで持出して本鄕座などへ出掛け、余と畫家の菊雨氏との珍立會も場面に上つて居る、更に淀橋にあつた活動寫眞の撮影場へさへ出掛けたこともある。

此寫眞を東北地方から東海東山方面に持廻り、梅原薫山、鈴木英也の諸氏が主となつて、說明大いに勗めたなど、今も地方の人々の記憶に新であらう。

氏はまた學生角力を國技館で試みた、其ため余は學習院長乃木大將を聘すべく目白の學習院に大將を訪ふたことがある、春寒料峭の折柄、火鉢に火の子もない學習院の應接室で大將の登校（電話で豫め打合置いた）を待受け、仔細を申出で、大將の臨場と學生への訓示演說を求めると、大將は例の調子で、出場と訓示とは出來兼ねるとニべもない挨拶であつたが、併し學生角力其ことは運動上良いことであるから、學習院生徒には寧ろ進めて往觀させると、生徒中の若い宮樣方の御臨覽また差支ないことなど懇に話された。

それで各宮家の若宮樣方の御來觀を仰ぐべく、閑院宮家の家令松井從德氏にも依賴に及んだ。氏は小田原の宮家御別邸地所の問題などで、松下氏とは既に懇意でもあつた、若宮樣方の國技館御臨場には差上ぐべき茶菓や辨當などのことに就ても松井氏に打合せた處、總ては宮內省で扱はれるが例となつて居るから、水一杯、茶一碗たりとも差出すに及ばぬとのことであつたといふ。

學生相撲は實に盛んであつた、併し松下氏が例の氣象で催したればこそ二日間國技館で大盛況を現じ、各大學にも角力道が盛んになり、今も其餘勢を青年團などに存續するのであらう。

氏は又池の端の舊博覽會建物を利用して、江戸博覽會その他を催されたが、其以前櫻田事件の義士表彰を企てられた、是には田中光顯伯などの昔の勤王家は相當力瘤を入れられ、山縣公も寧ろ奬勵されたようだが、一方井伊家や開國論者中には異論があり、大隈老侯なども餘り賛成されなんだやうだつた、依つてその性質を轉換して九段坂で相馬の武者押しといふのを催ふされた、是は磐城相馬の名物たる磐城馬を狩出し、之に甲冑の武者押しをするので、兎に角帝都の眞ん中で催すのだから、異樣に

東京ッ兒を衝動した、相馬方面との交渉は、彼地出身の井土靈山氏が專ら擔當し、甲冑隊には自由黨出身の辯護士で、大元氣の江間俊一氏などが大火形の甲に金ピカ鎧など着流して大將株となり、大旗小旗を押し立て、上野公園から九段まで練込み、九段では陸軍省から階行社を借受、玆で朝野の名士を招じて園遊會を催す仕掛けで、前の首相田中義一大將（當時は中將であつた）なども大ニコ〳〵で來觀し居られた。

之が機緣となり、池の端で江戸博覽會などをも催すに至つたので、幾んど隔年位に種々の博覽會を催されたが、殊に江戸博覽會では歴史的文化的江戸時代の精華を示すといふので、本多家の例の名物、大鹿角の甲や蜻蛉切の槍が出品され、前田家からは精功無比の御臺所や姫君の衣裳やら、御能の衣裳が出品され、德川公爵家からも、將軍の御膳部、道具一式が出、又代々將軍の書畫なども出陳されて人氣は湧くが如くであつた、然も池邊には多くの賣店やら、餘興などがあり、滿都爲めに賑ふて官設の博覽會も及ばぬ景況で有つた。

此博覽會に出陳された本多家と土居家などでは、家寶を一夜たりとも寶藏以外に置く能はぬとて、如何に保管方を保證しても頑として承諾されず、其爲、佐藤六石氏等の交渉掛りをして手古摺らせたなどの奇談もあつたやうだ。

兎に角此江戸博覽會が此種企畫の最期として松下氏を飾る一ッ共成つた。斯うして松下氏は相當利潤も得られたが、併し費す所も亦莫大であつた、去れば氏の歿後、或る富豪がやまと新聞を五十萬圓に賣收しようと内談に及んだけれど、百萬圓以下ではとて故人投資の事情を打明けた處、富豪も合點して手を引いたこともあつた。

賭碁賭將棋の强

松下氏は實に相場界の雄でもあつた、余は其方へ掛けて全く趣味も知識も絶無であつたから、一切關與せなんたが、日本橋の魚河岸の俠客佃政なども一時氏のため幾萬圓かを融通したこともあるといふ、此俠客には、余も松下氏の紹介で面會したことがある、彼れ曾て農商務省へ陳情したいことがあるとて、その書面の起草を余に托するため、三十間堀の待合で會見したのだ、彼れは關東無双の俠客として、其名は東京ッ兒に知れ渡つて居るに似ず、風采頗るやさしく、態度も恭謙で、碌々に口も利けぬやうな男で、ネチ〳〵と一應事の次第を余に話した後、一寸酒筵となつたが、やがて松下氏とお妻（洗ひ髪のお妻）と三人で花合戰を始められた、是れも余に取て無趣味なので、余のみ匆々引上げた。

また吉原の鐵砲菊と通稱する山田喜久次郎氏なども松下氏のため大分に働いた、此鐵砲菊も極めて風替りの男で、屢々やまと新聞へ押掛けては漫談に花を咲かせた、余が遊廓での落し紙は勿體なくも

血氣旺盛な男子の精を注いだものだ、それをムザ〳〵反古として捨て去るよりも、何か化學的に處理して活用し利用する方法はないものかと言出すと、彼れは、イヤ昔から必要物として使用されて居る、京都特製の紅（婦人裝飾用、殊に口紅）には、それが無くてならぬ物であり、又活人形の顏に、彼の光澤を出すにも之がなくては出來ぬから、落し紙は各樓の老人の所得とされてある、此老人大抵飯炊きやら見廻り役やら勤めながら無給だが、此落し紙の賣揚げで結構生活し行ける、それを知らぬ警視廳で、不潔物として一切燒捨てろと內命したから、自分が出頭して衞生部長の山根正次さんに申立てると、氏も始めて知つて、その命令を取消されたといふ。

大正十四年余は今市からの汽車中で、鐵砲菊に邂逅した、一行八九人で中には道化切つた幇間の櫻川歌孝などもあり、福岡共進會見物の歸り掛け、大社に參拜した處だといひ、福岡で興行中の力士若常陸から是非松江へ一泊しろと勸められて來たのだとて、此力士が始めて常陸山へ弟子入りした時、鐵砲菊が可愛がつたので、一日飄然として吉原へ尋ね到り、歸り掛けにおッちやん、三拾錢お呉んなといふ、何にするのだと問へば、電車で故鄕の津和野へ歸るんだといふ、電車で三十錢で山陰道の果ての石見津和野まで歸れると思ふなんテ、如何に子供でも呆れたなどと話す、車中には恰かも木下警察部長（島根縣）も夫人と乘合ひ、鐵砲菊が風采堂々として六尺豐かな洋服姿を見て、何者かと驚ろいたとて、後に余に問はれたこともあつた、彼れの一行は、松江で皆美館に泊まり込み淺草の貿易商と稱し、その夜桂亭へ繰込んだが、何處でも素性を判知し得なんだといふ。

松居松葉氏が始めて洋行された留守中、松下氏は、松居夫人に贈金すべく余に托しようとされたことが有つた、此夫人は烏森で左褄時代に斗酒尙辭せざる豪傑女で、一盃も口にし得ぬ松居氏と不思議に氣心が合ひ、彼女唄へば彼れ踊るといふ仲となり、高利の連帶まで相共にし、竟に晴れて夫婦となられたのだ（余は氏の先夫人とも知り、鎌倉滯在中、堺枯川氏等と牡丹餅や種々の馳走に預かつた）松下氏の話に、曾て徹夜で花合戰をする時、お慶（松居夫人）が常に心から親切に世話して呉れたから其れに酬ゆる爲、留守見舞を贈りたいとのこと、併し夫人は今や全く酒まで斷つて賢夫人と稱せられ、殊に舊主仙臺侯の大奥に永年仕へて、松居氏をさへ辟易させた程に嚴格な母堂にも能く奉仕して居る夫人の處へ、舊知の人から金など贈つては、却つて誤解を招く掛念も多いとの余が諫めを容れて、左らばと中止された、併し氏の昔を忘れぬ床しい氣象は玆でも認められやう。

氏は相場と共に勝負事にも剛情で、而して又思ひの外に强くも有つた、黑岩氏なども、賭け無しでは每局勝つたけれども、賭けるとすれば松下君が妙に四目以上强くなるとて驚ろいて居られた、將棋は余が角一枚落しても足らぬ位であるのに、賭ければ互角で宜いとて、無理に拾圓札を出して挑戰される、氏は男の子を紐で背に負たまゝで指されるゆゑ、余は侮り切つた爲でもあらうけれども、美事に拾圓を奪取された。

或る時、小田原の別邸へ山縣老公を招請せられ、若松家の女將お松と妓のお妻とが酒席のお執持をした、頻りに余にも出ろといはれるが、崖下の別室で折節來合せられた倉辻白蛇、梅原薫山の兩氏と談笑中で、殊に薫山氏は余等の助言もあつて、氏との賭碁に大勝したので、窮屈千萬な公の席へなど出ですとも右の軍資金で暢氣に遊び興じようと、新聞へ書いて贈らねばならぬ用があるからと斷はり、三人で街を遊び廻つた、隣室の蚊帳中で眠つて居たお松等からは、余等に昨夜惡處へ行つたのであらう、夜更けて歸つて湯殿でザア〳〵水を浴び、蚊帳に入つても藝妓の噂さまでして居たではないかなどゝ冷評され、余が更に朝早く山縣邸に推參すると、公も昨夜は論文のため大層忙しかつたそうぢやのうと同じく皮肉られて辟易したが、翌日公は更に松下氏の案内で、其お貞さん始め、お松お妻等を率いて道龍薩埵へ參詣に赴かれた、此留守中に居殘つた小妻から端なくも惡戯を演出した。

小妻はお妻の姪で、同じく對馬の出身ながら、新橋では別の家から出て居た、小田原から歸つて後に、余と白蛇氏、正岡藝陽氏と三人對酌した時、小妻が小田原の別邸で、薫山氏と對坐中、氏が最初から上京の際、旅費が盡きて羽織まで賣却し、辛ふじて函根の險を越えたと、着京後も人力車夫となり哲學館へ通ふてやつと卒業したまでの鬼氣人を襲ふ底の話を聞き、酷く感に堪へたことを打明けたので、三人大に茶目氣を發揮し、嫌がる小妻に强いて一々文句まで敎へ、一通のラブレターを認めさせ、來る幾日三十間堀の茶料理富貴亭まで是非とも御出で下さいといふ手紙をワザ〳〵郵便函へ入れさせた。

罪のない惡戯

正直眞ッ方な薫山氏は、小妻のラブレタアを眞に受け、ノコ〳〵富貴亭に出掛けたが、當の小妻は頓着なく內に居て　富貴亭からの電話で始めて氣付き、薫山氏がクド〳〵いふたとて、惡いことをしたと考へて居る處へ、薫山氏その小妻の抱主たる何某屋へ押掛られた、小妻彌よ恐れをなして二階に潛み居ると、薫山氏は抱主の老妓を相手に頻りと小妻の背信破約を責め立て、小妻は留守だといふのを、左らば其歸りを待たうと長火鉢の前へ腰を据ゑて動かれぬ。

小妻は二階でビク〳〵慄ひ上つて居るばかり、抱主も持あぐんで居る時、折よくヒョコリと遣つて來られたのが抱主と馴染の憲政會總務望月小太郎さんで、薫山氏の話を聞いて、まア〳〵居らぬものは仕方がないとて、例の雄辯でまくし立て、なだめすかして兎も角薫山氏を戻らせた。

斯くと聞いた余等は彌よ興が乘り、之を松下氏に話すと、斯ることには人一倍面白がる氏は、卽坐に彼の抱主を電話に呼出し、小妻が薫山を欺すなんテ怪しからぬ、薫山は出刄庖丁で斬り込むと血眼になつて居るが、併し小妻も結婚する氣になりさへすれば、おれが相當の身代金を拂ふて遣るが、如何だ、一ッ小妻と相談して薫山に嫁入りさせぬかなどと、凄い處や優しい所を言聞けて、獨りで悅に

入り、一方では又薫山氏を呼んで冷すと、薫山氏濟ましたものだから、余等も安心して、委細打明けて笑ひ消して了つた。

が濟まぬのは、小妻への氣の毒さで、三人で更に小妻を呼んで詫び、その申出でに由つて、抱主始め抱へのお酌まで呼んでケリを付けた、ィヤ惡戯も大抵にするものだと始めて感じた。

斯ういふ話は恐縮だが、序乍ら記し置く、例のお妻は寒菊といふ待合を築地に開いたので、松下、黑岩の諸氏と能く行つた、松下氏の病むや、病中乍ら好きの芝居とあつて歌舞伎座見物を催し、黑岩大谷諸氏の外、お妻をも呼び、歸りに寒菊に立寄つた、是が四月の二十四日と覺ゆるが、お妻は五月二日の朝頓死した、前夜は好きな鰻をたべ、最晨の羽左衞門の誓くの畫幅を掛け、新調の渦模樣の抱卷を引つ掛けて眠つた儘往生し、玆に頭山滿翁などとも大きな艶名を蠹かせた名妓も終りを告げた。

松下氏が小田原で山縣老公などを招待する場合、極つて濱町小常磐の老人を聘して庖丁を執らせられたが、老公も酷くそれが氣に入られたやうだ、此の小常磐は鯛のアラ煮が名物で余も內村鑑三先生などと能く出掛、老人から自分が本當の常磐だのに、小常磐などとは怪しからぬとか、菓子の煉物では何と申しても本所の越後屋が昔から隨一だなどとも話したものだ、其死するや、葬儀には山縣老公も殊に家從を會葬せしめられた。

松下氏の嗣子勇三郎氏は帝大獨法科出の學士だが、實は夫人の伴れ子で、柳原前光伯の落胤だ、現に容貌なども其異腹の兄たる義光伯に酷似して居られるが、氏の實の娘おないさんに娶はせられた、其婚禮披露は華々しく帝國ホテル邊りでとあつたけれど、おないさんの希望で、物靜かな山谷の八百膳で催ふされた、主賓は媒酌人格の田中光顯伯や、山縣公の準夫人貞子の方、黑岩、大谷の諸氏及び寺岡鏡谷、佐藤六石、余等で、流石に吉原の老妓と新橋粒選の名妓に周旋させられたが、併しおないさんは仲々の女豪傑で、別に或る社會主義者と情好關係があつて、正式の婚君とは決して實夫婦とならなんだ、是には田中伯なども頗る苦慮されて松下氏の死後も幾多の波瀾が重ねられた。

松下氏の實子には、おないさんの外に、二男子一女子があつた。

松下氏は寧ろ死處を得たと申すべきであらう、恰も大隈內閣時代で、其音羽護國寺に於ける葬儀は盛大を極め、墓地墓石共に壯大で何處までも松下式を發揮して居る、氏は兎角の評はあつても、兎角豪快痛烈な漢子であつたことは何人も爭ふまい。

第二十三　幸　德　秋　水

社會主義者たりし徑路、その孝心

社會主義者の巨魁として、竟に明治四十四年一月二十四日刑場の露と消えた幸德秋水とは、余も少からぬ因緣がある、余が日清戰役に從軍すべく、廣島の客舍に逗留中、來往しつゝあつた小泉策太郎氏（三申）一日飄然來訪して秋水を中央新聞に入るべく斡旋せよといはれる、其談に、氏は秋水と共に夙くからめざまし新聞記者として玆で筆を執られたが、彼れ本來中江兆民先生門下の秀才ながら、事毎に不平を起して仕處を轉じ、轉ずる毎に成上らずに成下り、今や此廣島のケチな新聞にまで流落して居る、若し帝都に乘出さば、再び才氣を復活するであらうからとて、親切面に溢れた。

余は依て秋水と面談することに成つたが、容貌溫和で、既に要談を終りながら、冗談口一ッ利くでもなく、何かしねくねして疊の塵など捻つて居る、此調子では活潑機敏な大岡先生の氣に入るまいとは考へながら、余は渡淸の期も切迫したので、小泉氏のいふがまゝを書いて、秋水を大岡先生に紹介した、それは明治二十八年四月と記憶する。

斯て六月初め余は歸社した、秋水など、到底採用されぬと思ひのほか、編輯局で余を迎へた、當時秋水は飜譯擔任で、然もヘラルドとメートルとに目を通し、歐米の或る問題に就て新聞の切拔きを遣り、其問題に掛けては一廉の通と成り、やがては論文なども草するが、それも中々要領を得て居るので、余は小泉說果して驗ありと思ふて居た。

斯くして交際も進み、共に酒も飲めば時としては遊里にも足を入れる、秋水は溫和な上に、咽喉も美しく、淸元など隅には措けぬので、婦人にも持てること、何としても余の如き飲んだくれの惡口黨の比ではなかつた、其麻布市兵衞町住ひの頃、結婚したが、其夜或る樓で余と落合つた、余は其結婚式に列しての歸途玆へ舞込んだので、更に秋水を發見したので、驚いて譯を問ふと、秋水は口直しに來たのだといふ、其打明け話しに、彼女は極めて忠實なので非常に母の氣に入り、自分が女中式の女など眞ッ平といふのを强て結婚しろといふから、餘儀なく今夜三々九度の式を擧げたが我慢出來ずに飛出したのだといふのだ、性來親孝行の秋水、母の勸めを拒み得なんだのも無理はないが、其飛出したのもヨク〳〵であらう、而して彼の氣性の一端も窺はれる。

秋水が一夜余の本鄕西片町の家へ泊り込んだ時、從容として、今日は最早自由民權でもない、必ず新旗幟を建てねばならぬとて、社會主義を研究せんことを言出した。余は公衆のため此主義でなくてはとの信念でなく、自個の功名を基とする主義などには贊成出來ぬと答へ、その後、石川半山なども

秋水と共に兎も角社會主義の研究を試みようといひ、村松柳江氏も同意見であつたが、余は飽まで反對し通した、柳江氏は間もなく全く斷念され、半山氏も中途で研究をも罷められたが、秋水丈けは到頭押通したのだ、併し吾等主義こそ氷炭相容れなんだが、友情は終生渝る所がなかつた。

秋水が中央新聞を去つたこと、余が秋水の推薦で萬朝報に入つたことなどは既述の通りだ、萬朝報に於ける秋水は、才氣縱横で、朝報の一異彩であつた「机の塵」は彼れの意匠から出で、又社會主義の見地から屢々地租輕減論を唱へ、同じ朝報の論文欄で、繰返し圓城寺天山氏の非地租輕減論と鬪つた。

此時代には、朝報に堺枯川も居たし、川上清氏もゐた、石川三四郎氏も居た、共に社會主義者で、斯波貞吉氏なども研究者ではあつた、正面からの反對者は山縣五十雄氏等と余とであつたが、秋水は特に枯川と意氣相投じ、爾後始終同一行動を執つた、余は此兩主義者と殊に私交が濃かであつた。

國士を以て自任し、衆議院でも異彩を放つた細野次郎氏などは、殊に秋水の文と才とを推重し、其選擧應援の演說などをも求めたことは一再でなかつた、秋水の末路を救ふべく同氏が余等と呼應したのも此機緣からだつた。

銀屏に友禪縮緬の夜具、管野ちか子

秋水は朝報社を去つてから、直に枯川氏と共同して社會主義の平民新聞を發行した、秋水の居處で新聞發行所たる數奇屋橋内の舊長屋作りの家は、元の明治法律學校の跡に近く、其頃は丸山作樂翁の居であつたのだ、國粹主義の純保守者の舊居、今や社會主義者を住はせ、其新聞を發刊させる、滄桑の變位の沙汰ではない。

余は屢々玆へも訪ひ行いた、或る時、談次、同じ主義者の松岡某が死んで間もなく、その妻が西川某と通じたのを、余が社會主義には婦女の貞操をも認めず、女子共產かなどゝ難ずると、秋水も彼等が前夫の坏土未だ乾かぬに此事あるとはと一時は憤激して鐵拳を揮はんと思ふたといひ、枯川氏は、併し彼等兎も角公然相婚したから諒すべきだなどゝ恕めて居られた。

余が米國から歸つた頃、秋水は駒込千駄木に居た、玆へ尋ねて、マルクスの資本論を見、參考のため一册買入れようと歸り掛けに、丸善に立寄つた處本鄕から目鏡橋まで圓太郎馬車に乘つた間であらう、懷中物を掏取られて購ひ能はぬので、後に其書を秋水から借受た、これは英譯のもので、マンチエスター紡績業の發達や、其擧げた統計、殊に工業器械の發明が失職者を生ぜず、生產を增大すると共に、益々勞力を要することなど、余に取つても極めて趣味あるよう感じさせた。

秋水は後更に麻布本村町へ引越し、玆で結婚したが、今度の夫人は京都で足利尊氏の木像の首を斬つたといふ勤王家の遺女で、盆畫などを良くする淑やか女性であつた、社會主義者で舊勤王家の女を

娶るなど、何といふコントラストであろうぞ。

此頃のことだ、大いに富を成した小泉三申氏が、赤阪の三河家で舊友會といふを催し、秋水、枯川氏を始め、半山、久津見蕨村の諸氏などを饗した、席上で三申氏がお互ひに宿昔の志を語らうといひ出され、半山は三十萬圓程の金子を獲て思ふように使用して見たいといひ、余は自個所有の一大巨船を浮べて、冬は南洋近く、夏は樺太邊へ游戈したいといひ、秋水はグッと碎けて、銀屏風の陰に微かに雪洞を點じ、友禪縮緬の夜具で寢て見たいといふと、三申氏が、イヤ其れは余も希望であつて、彌よ實行して見たが、偖詰まらぬものだよと抹し去られたので、一同大笑ひしたことがある。

秋水は中々の皮肉家であつた、其師兆民先生の病中の作たる「一年有半」は實に秋水が筆を執つたので、能く兆民先生の面目を躍如たらしめて居る、秋水は先生のため實に能く盡した、其點で、博文館の大橋新太郎氏なども頗る感稱し居られた程だ、秋水の筆は極めて垢拔けして簡明であると共に、多くの皮肉があつた、兆民先生直傳の故もあらうがまた天性だ、彼の靜岡事件（大井憲太郎老などの國事犯）で唯一の有志女性と稱せられた景山英子女史（其頃は福田姓）が、內村鑑三先生や余等のサークルに入込むや秋水は之を「メカ半」と綽名しゐた、何たる皮肉であろうぞ。

秋水の最後に移つた新宿代々木の家には、彼の大逆事件で知られた菅野親子女史が居た、此頃秋水は貞淑な夫人を名古屋にゐる夫人の姉夫妻に預け、女史と同棲しつゝ有つた、余が往訪して、例の聲高で談論の序、女史と情好關係あるとはなどゝ斬出すと、秋水倉皇として手を揮つて沈默を求める、聞けば女史は別室で讀書し居るのだとやらで、やがて午食の時、女史が食事など運び出した、眉目は締つて居ながら色の青黑い格別野心など有そうな女とも見えぬようだ、秋水のさゝやき告げる所によれば、女史は既に肺結核で居る、今更之を捨てるも忍びぬから、何とか保護せねばならぬとか、老母存生の間は、決して無分別の事などせぬから、安心して吳れなどと染々語り、且細雨蕭々の間、余と相對して、今の地位では、同志に推されく〳〵て隨分心にもないことをせねばならぬなど、苦慮することも打明けたが、後に思へば、彼の大逆事件なども既に此頃から秋水にほの見えて居たらしい。

余が雨を冒して歸り掛けると、近くの建部遯吾博士邸の門邊にゐた二人の刑事巡査が來て、恭しく余の名刺を求めた、例の警視廳の看守者であろうが、今度の家で始めて見た、千駄木、本村の時代には見受けなんだ。

大逆事件の眞相、悲むべき母の自刄

余は後に秋水救助の運動に手を着けて見た、余の崇仰した品川子爵門下に其人ありと知られた平田東助伯は余多く識る所がなかつたけれど、伯帷幕の智囊と稱せられた有松英義氏（後の樞密顧問）とは可なり別懇であつた、一日對談の序、秋水を過激な主義運動から脫せしめる方策として、余は彼れ

に孝道を完ふせしめる爲にも、土佐の鄕里に隱栖せしめるが第一だと主張し、氏の同意を得た。

此頃の警視總監龜井英三郎氏も細野次郎氏等と計つて、同じ方針で活動したらしい、而して秋水の親友たる小泉三申氏も陰となり陽と爲つて居たことは勿論だ、余も龜井氏とは知り合だから、いふまでもなく細野氏等とも聯絡を取つた、平田伯が內相で余等記者團を官舍で饗應した時、龜井氏は洋食など殺風景だらうとて、跡で福田和五郎氏と余とを誘ふて烏森の濱の家で二次會を開いた、其際氏は余に先夜足下は木挽町の田川へ往いたかと問ふ、餘りに能く知つて居るからと反問すると、實は重な待合に行く連中の氏名は皆警視總監まで報告される、唯足下は林田雲梯、倉辻白蛇等の外、妙な連中と一所だから、異樣に感じて氣付いたのだとの答へであつた、それに同じく二十八日會々員でもあり、何等相隱す仲でもない、殊に余が太平洋通信で早く桂內閣の辭職することを素葉拔き、それを大阪朝日が號外としたので、桂公が驚き怒つた際なども、龜井氏の盡力で兎も角ケリを付けたことも有つた。

此の前後から秋水は屢々余を來の訪ふた、余の本鄕の家へ來た時例の附添刑事が門前に居て、使ひに出る女中に、また御馳走が出て永引くだらうかなどと質問し、又余と秋水と柳町の鳥屋で會食した時なども、斷へず見張つて居、秋水がやまと新聞に余を訪ふ時など殊に社の前後を見張るといふ嚴重さであつた、余も忌々しいから秋水を築地の若松家へ誘ふ時、刑事が張出しの新聞に讀み耽つてるを幸、車を疾走させて之を捲かうとしたが、素より捲かれるような刑事でない、余も彌よ忌ま〳〵しくなり、刑事の待つてゐる部屋へ聞へよがしに、音高に警視廳燒打ちなどと途方もないことを醉に乘じて驍舌り立てたことが屢々有つた。

秋水に隱栖を勸めると、秋水素より異存はない、唯可愛相な菅野親子女史も伴ひ行くから諒せよなどいつたものだ、秋水は此隱栖中十分に母を安堵させ、其間讀書と修養とを重ね、母百年の後徐かに世に出る決心であつた、それに就いて余が資金調達に奔走し、未だその成功を見ぬ中、秋水は三申氏の助力で一時病を熱海溫泉で養ふこととなり、屢々葉書で消息したが此熱海逗留中端なくも大逆事件で捕へられるに至つたが、當時偶々同宿した正岡藝陽氏の談によれば、下駄箱に赤土の揑ねたのがあつたのを、警察官等は之を爆發彈でないかなどと大騷ぎしたといふ。

余の見解によれば、大逆事件は秋水以外のものの發企計畫で、秋水は後に狀を知り得たに過ぎぬ、然も同主義者の謀略で、且主義者の親分たる秋水としては、總ての責任を引受けざるを得なんだので其心事は察すべき點がないでもない、彌よ秋水が市ケ谷に投獄されるや、余は約一ケ月に近い間、日日辨當を差入れた、是が舊友に對するセメてもの余の心ばかりの最後の誼であつた。

秋水刑死の後、有松氏も余に、秋水の豫審調書を讀んで見たが、成程隱栖の意思は確で、敢て足下等を欺いたものでないことが推知されると染々語られたことが有つた。

何としても泣かずに居られぬのは秋水の母だ、余は秋水刑死のこと決すると共に、彼の母のことを

懸念に堪へなんだが、案の如く、斯る子を持つて皇室にも世間にも申譯がないとて、鄕里で自刄し果てた。賦性大の親孝行たる秋水は、斯の事あつた爲、恐らくは死しても冥し能はぬであらう、余は母氏の志を悲しむと同時に、又秋水の爲にも數掬の涙を禁じ能はぬ。

小泉三申氏は、秋水生前の志行を記念するため、久津見蕨村氏を主任とし、知人銘々其知る所を記して提供することとし、余も數十枚を艸し送つたが、其まゝだ、三申氏の談に、相當出資はしたけれど蕨村氏が放縱で纒めぬため、計畫行はれなんだといふ。

秋水は相當に漢詩も作り、書も雅味があり溫和でもあつた、余は一ツも之を保持し置かなんだことを遺憾に思ふ。

第二十四　枯川と紫山

義兄弟一家、俳味タップリ

幸德秋水の同志として、學識意氣共に伯仲の間にある堺枯川氏も、文壇人として捨がたい一人だ、彼れは俳句をも能くする丈け、人間に俳味も饒かだ、糸瓜の如くブラリとする要領も飲み込んで居る、社會主義者としてよりも、別方面に於て余は多く敬重する。

枯川氏が總てに要領を得ることは實に驚くべき才だ、如何なる難解の書も、彼れに取つて、緒を執らへて亂糸をほぐすやうなものであらう、曾て余は西洋の著述で、苟くも英文で發行されるものは、政治經濟から有らゆる文藝物まで、其要點を抄略して世に提供することは世間の必要とする所でもあり、又世に貢獻する所以の一ツでもあるから、足下の文筆と才力で、之を遣つては如何、之を生活の資として世に立ち、別に志す所へ向ふも宜いではないかと、切に勸めたことがあつた、枯川氏もつく〴〵考へてゐられたらしいが、竟に苦笑を以て余に酬いられた、或は何等かの創作ならば格別、單に要抄飜譯ではとの意思でも有つたらう、否、社會主義の信仰が厚くて、之に叛むく能はなんだのであらう。

文士の夏目漱石氏が滿鐵總裁中村是公氏と同窓の學友であつたと聞いて、余が枯川氏に語ると、彼れは余も高等學校時代は、滿鐵の理事清野長太郎(復興局長官として昨年卒去)と同級生だつたと語り彼れは財界の名士といはれ、自分は貧しい社會主義者だと笑つて居られたこともあつた。

枯川の長女、名を眞柄といふ、妙な名と思ふものがあろうが、枯川氏は始めマーガレットと名付けたものだ、如何に西洋カブレでも餘りに酷いでないかと余等がいふとやがて略して眞柄とされたのだ。

此眞柄孃の生母、卽ち枯川氏の夫人は同じ文士堀紫山氏の實妹だ、枯川氏は山路愛山氏と齊しく、末松青淀男を輔助して、舊長州藩毛利公爵家の傳記を大成された、其頃では相當大金の報酬を得られたが枯川氏は例の淡白な質とて、眞柄孃赤兒時代の養育費や病弱な夫人の入院費などに遣ひ捨てた。

此夫人のため、枯川氏は家を鎌倉に借り、自分は時々通ふて居られた、玆へは余等も泊り掛けに押掛け、同じく近所に居た松居松葉（松翁）夫人の馳走になつたことなどもあるが、此夫人病死後、枯川氏は今の夫人と婚したのだが、是は仲々健氣な女丈夫で、自ら女髮結までして、能く頻々投獄される枯川氏の留守を預かり、又能く眞柄孃をも養育し、夫をして寸毫も後顧の患なからしめた。

枯川氏前夫人は靜淑であつたが、その妹の堀保子女史（紫山の末妹）は、義兄の枯川氏にカブれてか能く社會主義者と婚しなどして、一時は相應に新聞紙上に傳へられた。

堀紫山氏は數奇な古い文士だ、始めは尾崎紅葉氏の門下となり、讀賣新聞に筆を揮ひ、その綺麗な文章は一時世間に傳唱された、その芝新堀町時代には、放浪文士の小梁山泊のやうで、種々の人が集合した、美術の鑑識で大名を成した森大狂氏や、松江へ遊びて嫁ヶ島へ名都々逸を殘した小林蹴月氏なども御定連で、上司小劍氏も其二階にとぐろを捲いて、始終ごろごろしてゐられた、當時若い小劍氏を小馬鹿にして幾んど低能扱ひにしたものもあつたらしいが、奚んぞ知らん、蛟龍竟に池中の物たらずで、小劍氏は小說家として一方に雄視するに至つた。

紫山氏は後に年若い夫人を娶り多くの子女を生ませたと聞くが、更に二六新報に入り、その關係で秋田清氏（前の內務政務次官）を文事で助け、そのため屢々內幸町の秋田事務所に來り、序に記者倶樂部にも顏を出して、秋田氏や余等と盛んにヘボ將棋に差し耽つたが、その後も舊態依然であらう。

歐洲大戰のヤツと罷んだ頃、枯川氏は獨露兩國に遊び、然も旅行安全がてら、眞柄孃を伴ふとやらで時の原首相から旅費の支給を受けるやの說があり、略話も決定したとて、余と面會の序、余が支那へ行くので、暗に別を叙したこともあつたが、首相から當時判然せぬ獨露の內情を知るは結構ながら社會主義者に聊かでも資金を輔助したとあつては、守舊派連の非難をも考へねばならぬとて、例の原式用心から、竟に相談が中絕されたと聞いて居る、而してその後余は枯川氏と未だ面晤の機會を得ぬ。

第二十五　紅葉山人

その珍聞、却つて女に欺かる

文壇に於ける尾崎紅葉は、絶代の才物と稱すべきだ、其牛込の家は昔大田蜀山人が居た處だとかで好んで蜀山風の字を書いて頗る得意であつた、余も屢々此家を訪問した記憶がある。

紅葉の逸話として世に傳はるもの大小多くあるが、玆に記すのは甚だしい素葉拔きで、餘り世に知られて居ぬから、ホンの一興にと述べて置く、亦以て彼れの性格の一ッと、當時の世相の一面とをも窺ひ得られよう。

紅葉館の美人中にお花といふのがあつた、豐艶ながら人氣は左程でもなかつたやうだ、これがぞつこん紅葉氏に打込んで、紅葉氏のとなら、絶對服從とまでの信仰家ながら、先生彼女に滿足を與へぬ、彼女が兎に角他に往く緣が極つたらばとの遠慮から、之を言出すと彼女は絶對服從した。

ところが甲州選出の代議士加賀美嘉兵衞氏と、岐阜縣選出の同じ代議士の野口何某とが、此お花に打込み、加賀美氏は妾に抱へようとし、野口氏は妻が病死したので、迎へて正妻にしようと熱烈に口

說き立てた。

お花も頗る其去就に迷ふた、何時までも紅葉館で客を相手にウカ〳〵暮すでもない、何とか早く身の振方をと、之を其伯母に當る木挽町歌舞伎座の茶屋武田家の女將へ相談に及んだ。

女將は成程野口さんなら立派な正妻だが、併し土臭い岐阜縣の田舍へ引つ込まねばならぬ、東京育ちの女としては容易であるまい、加賀美さんの方は妾ながら、名にし負ふ富豪でもあり男振りも秀れてゐる、それに旦那こそ田舍住まひでも、お妾としては東京で樂に過ごされる、此方が寧ろ宜かろうと女將式の見解と勸告とに、お花もその氣になり、武田家に一泊して、紅葉館への歸り掛、加賀美氏の止宿する烏森の吾妻屋へ立寄つて承諾の返答に及んだ。

性急の加賀美さん、特に大氣に入の美人が直接に承知の挨拶に來て呉たからとて、大恐悅で歡迎の上、一寸手附けといふよりも初の契りをと求められて、紅葉山人との約束を忘れたのではないが、此場合、お花としては否ともいへず、竟に加賀美氏に許した。

斯くてお花は戀焦れた紅葉山人に加賀美氏へ抱へられたことを打明けたものゝ、肝腎の一事は言ひ出し能はずに、ツイ口を拭ふて居た、山人はホク〳〵して、去らば豫約の如くと、一夜某處へお花を誘ひ出し、私語喃々、年來の希望を達せしめた上、お花への記念にとて指輪など贈つたものだ。

萬事あけすけで、隱し切れぬお花の惚け一切の秘密は玆に暴露した、併し當の山人は恐らくは終生

之を悟られなんだであらうといふ、苦笑すべき一諧話だ。

因に記す、紅葉館の多くの女中は最初主として京都美人を用ひ、お政を總元締に、お愛、お留、ズツと若くてはお絹などがあり、東京ッ兒にはお夏や前のお花などがあつた、奇人たる名記者中井錦城氏は、同じ長州人たる山縣公や品川子から禮を厚くして迎へられても振向きさへせなんだが、此お政に參り、百方口說き立てゝ陶製の盃まで嚙み碎いたので、お政も半分恐ろしくなり、竟に之に從つたといふ、後に其眞似して盃を嚙み碎いた上、坊主頭にまで成つて却て笑ひの種を貽したヘボ記者（後に日本銀行員）もあつた。

第一の名花と唄はれたお愛は高田半峰博士に圍はれ、お留は官界の才人都築馨六男に許し、お夏は一時鳩山和夫氏と浮名を立てられたが、實は浮名丈で、その實、民政黨の一將降旗元太郎氏と宜い仲になつたと聞く。

盛岡から來た美人で、菅原傳氏に許し、子まで生んで貞節を守つりつゝ、涙の出る程の貧苦に堪えたお染といふのもあつた。

お絹は後に美名を馳せたが、彼の無頓着な長田秋濤の物となり、同じく貞節で、秋濤のため女優にまで成つたとも傳ふ。

美人薄命の諺を地に行く間にあつて獨り才色双絶の須磨子女史のみが大橋新太郎氏正夫人として今世に時めくのは殊に珍しいであらう。

第二十六　桂　公

三十年の記者生活、若槻禮次郎氏

余が初度の米國行の折、桂公は陸軍大臣であられたが、玉木懿夫氏を介して余に懇切な注意を與へられた、玉木氏（椿園）は萩人たる緣故で、始めに品川子爵の家にあり、子爵の紹介で中央新聞に入られたので、後に大岡硯海先生の斡旋で三井家に入り、今も勤めて居られる、同氏に托しての公の忠告は、自分（公）も明治の初年に洋行して經驗もあるが、乘船早々、日々の食堂では洋食の馳走で、品數も多いから、今まで粗食し來つたものは、勢ひ貪ぼり食ふ癖がある、其多食する爲、先方へ上陸する頃は、宜い加減に胃腸を損するが例だ、柏軒もその過失を繰返さぬやう十分節するが宜いといふ趣旨だ。

余は深く公の親切に感じ、その忠告を刻命に守つて、多食を差控へた爲め幸に健康を損ずるに至らなんだ。

第二次の桂内閣で、公が辭職の決心をされたことを一ヶ月以上早くから知つた余は、無遠慮に之を太平洋通信で素葉拔いたが、世間では何等感付かず、宜い加減の法螺と見做し、唯大阪朝日新聞が號外として報じたに止まつた。

然も當人の桂公は、當時輕井澤で避暑中だつたが、機密の漏れたのを心外として、時の警視總監龜井英三郎氏に嚴重な調査を命じた、龜井氏も非常に當惑されたが、余も此彌縫には閉口し、遞相後藤新平子の秘書官菊池忠三郎氏等に計つて、群馬縣知事の神山潤次氏等が利根川で鮎狩を催し、朝野の政客が集まつた頃、誰いふともなく其樣な噂が出たといふことに取繕ふた、公は洪水のため、中仙道を迂回して東京に歸られたが、併し余には格別小言もいはれず、唯酷いことを遣つたなと一言されたのみだが、果然豫報過たず、公は俄に辭職された、然も用意周到な公は、夙くから辭職の心構へであつたので、唯素ッ葉拔かれたを意外とされたが、餘り反響がなかつたので濟んだ次第だ。

余が若槻さんに面會したのも公からの紹介だ、余が公に豫算のことを能く調べて見たいといふと、其れなら次官の若槻に逢つて敎へを聞くが良い、自分から能く紹介し置くからとのことで、やがて余は番町の邸に若槻氏を訪ふた。

若槻氏の答辯は、中〳〵能く肯綮に中るので、余も公のいはれる如く、氏の財政通で、又一個の才幹であることを納得した。

若槻氏が後に大隈内閣の大藏大臣となられた頃、恰も彼のシーメンス事件の裁判で、三井物産の諸

重役などが罷免された後なので、三井の理事有賀長文氏など大いに憂慮して、何とか世間の誤解を釋明する方法もがなとのことに、大藏大臣に依頼し、大臣から日本の貿易業のため、三井の信用を害せぬようにと各新聞に注意させるが一番捷徑だろうと献策に及んだ、他日若槻藏相から、余に出省を求められ、東京朝日の松山忠次郎氏が入代りに去つたのを見つゝ藏相に面會すると、シーメンス事件から三井を誤解し延いては日本貿易に阻害を來さぬよう殊に論文等で然るべく取計らひを希望すとのことに、余は果してと穴の明く程藏相の顔を見詰めたが、當の若槻氏は恐らくは心付かれなかつたろうと今までクスグツタク考へてゐる。

余は或る日公に向つて、小生新聞記者たることやがて三十年近く相成るが、若官吏たる三十年ならば年金とやらも相當に附いて、老後を安く過ごし得ようけれど、小生には左る恩典など露程もない、あるものは唯新古の借金位のもので擔石の儲とてもない、就ては三十年記者生活の一記念として、セメて細小な書齋でも作りたい、それには汎く朝野の篤志から寄附金を募るべく奉加帳を調製するに付筆始めに閣下の御記張を願ひたいといふと、公は腹を抱へて笑ひ、ィヤ面白い計畫だ、第一番に筆を取ろうと快諾されたが、丁度滿三十年の頃は、不幸公大に病みて、葉山から鎌倉へ移られた頃で、眞逆言出すことも出來なんだ。

併し大浦子爵なども、公から此話を聞かれてか、自分も貧乏だが柏軒のため相當寄附しようと香川魁庵氏に語られたことがあつたと聞く。

此計畫は公が逝かれてから、余も氣乘りがせず、今や記者生活三十年どころか四十五年に及んでも、依然たるまゝで居る。

公の不幸な死、明治大正間の第一人

余が公のため聊か微力を致し得たと思ふのは、公の同志會組織の際から引續いて、護憲運動に反對したこと位であらう。

此場合、言論團の間にも、一ッの活動を要するとて、會合用の事務所を設けることに成り、其費用は後藤子爵（遞相）の手許から支出することとなつたが、其扱ひを余に依託された、彼奴なら兎も角胡麻化すなどの働きもないからといふのででもあらう。而して直接仲小路簾氏（農相）から毎月余へ手交されることになり、余は其ため兩三度麻布廣尾の仲小路邸へ行き、その祕書官に會計報告をした記憶もある、ィヤ小面倒なものだ。

此事務所は最初新橋倶樂部から櫻田本郷町の或る旅館に移り、竟に櫻田クラブ近くへ小さな一家を借り入れた。

公は一日余を三田の邸へ招いて、何等獲る所もないのに盡力するのを感謝するとて挨拶された上、

牛鍋の馳走に預つた、牛鍋は公のお得意で種々の打明け話しなどもあつた、余は常に近い故もあつたが、公の三田邸へのみ行いて、官舍へは一兩度の外推參したことがなかつた。

公が護憲運動で罷められる時、山本權兵衞伯が一朝突如來訪したことを余に語り、これは恰も騎兵隊が不意に横合から飛出したものだなど評し居られた、權兵衞伯の運動は公に取つて大きなショックであつたらしいと共に、伯は確に公の苦手であつたやうだ。

公は第三次桂内閣が二ヶ月にも滿たぬ中に罷められた、而して間もなく病に罹られた、初めは葉山の別邸で靜養されたが、後に鎌倉に移られた、茲は岩下清周氏の別莊で坂路の可なり峻しい所に在つた。余は茲へ見舞ふたが、名刺を通ずる丈で面謁は求めなんだ、蓋し可なりの重體で、人に逢はれるのが宜くないとの遠慮からだ。

此頃長谷の通り（茲から公の靜養所までは辛ふじて人力車の通ずる畔路があり、これから阪路へさしかゝるのだ）へ公家の受附處を置き、公の受けられる見舞の果物やら菓子やらが絶えず多く提供されて、見舞客の從者などに滿足させた、蓋し公夫人の周到な心付けであらう。

公が彌よ逝かれるや、公の邸では勿論、同志會事務所へも、畏い邊りから賜はつた御辨當や、菓子その他が分たれて、黨員や新聞記者も頂戴した、是は公家の人々の注意のみではない。實は公夫人の心付きであらうと、余は少からず感心した。

公の葬儀は芝の增上寺で催ふされた。余は當日病を押して參列した、隨分の盛儀ではあつたが、公ほどの偉人の葬儀を何故國葬にせなんだのか、公は勿論維新の元勳ではない、併し政治家の功績からいへば、伊藤、山縣以上だ、國葬とするの當然なこと言を俟たぬ、それをせなんだ時の山本首相や、原内相は、何といふ心得であつたらう、もしも此際、明治大帝が御在したらば、御諚でも國葬とされたであらうにと、余はツク〴〵慷慨に堪へなんだ。

世間では公の愛嬌振りをニコポンといつたものも多かつたが、是は公の極々小さな一面に過ぎぬ、公の功績は日英同盟、日露戰役、日韓併合などで明白で、茲に一辭の加ふべき要もない、余の見解を以てすれば、公は實に識見の周到な政治家で、此點では恐らくは明治から大正へ通じての政界第一人者で、他の追隨を許さぬであらう。

支那で袁世凱が羽翼を伸ばし、第一革命などの行はれた時、桂公をして若し在らしめばと嘆じたものは決して余等のみでは有るまい。

公の家督は長子早世のため嫡孫の廣太郎氏が繼承されたが、公の令孃は伊藤博文公の實子で男爵たる文吉氏に嫁し、第三子三郎氏は、井上馨侯の實女千代子孃と婚して侯の嗣勝之助氏の養嗣子となられた、卽ち長州元老の伊藤、井上兩公侯の血統は、桂公のそれと結合されたのだ、これは公の遺德の然らしめた一ツと見ても可なりであらう。

其周圍の奇材駿逸、妙な曾禰子

伊藤、山縣、松方内閣の跡へ出現した桂内閣は、少壯家揃ひであつた丈け、世間からも相當見縊られて居たが、却て着々奇勳偉功を立てたのは、單に首相たる桂公がエラかつたのみではない、其下にも亦偉才駿足があつたがためたること申すまでもない。

中にも忘るべからざるは、農相及び後に藏相を承はつた曾禰荒助子や、終始外務大臣としての小村壽太郎侯や、始めて遞相となつた大浦兼武子や後藤新平子等を擧げねばならぬ、兒玉源太郎、寺内正毅、山本權兵衛などの諸將軍は申すまでもない、實をいへば、多士濟々といふのが桂内閣の特色だ。

曾禰子は公使として巴里駐劄中は、例の爲す所もなく、美術の鑑賞と書道の稽古のみに耽られたが、機を視ること神の如しといはれる丈け、日英同盟をも賛成し、駐佛中は能くその民狀を視察された。余に語られた處でも、佛國人は思ひの外に勤儉で、農民などは大抵素足である、贅澤なのは巴里人のみで、巴里を見て田舍を知らぬでは、眞に佛國を識るものでないとのことであつた。

其歸國の折、片瀨の別莊に居られたので、余は江見水蔭氏の砂地浪宅を訪ふた序、一尾の小鮫を子爵の別莊へ持參をすると、子爵は水野遵氏と花札など引いて居られたが、今夜是非一泊せよとのことに後刻再び罷り出た、厚い木綿夜具を重ねて子爵と夜半まで語つたが、可なり古い別莊で、隣地との境

に一古松が聳えて居た。子爵は近い松林をも指し示して、頻に植林の必要など語られたものだ。

余が初度の外遊の際、子爵は農相であつたが、各省の囑託でも受けて旅費手當とすれば宜いといはれるから、余は中央新聞で扶持を受けて居る。他から其樣な物など貰はれぬといふと、子爵は後に松井といふ奴は、欲を知らぬ漢子だと言つて笑はれたといふ、余が歸朝した頃も、ホームシックにでも掛つたかい、思ふたより早く歸つたゝなどと揶揄し居られた。

日露戰役中の藏相として、子爵は奥州九州の金山を發見したと稱して外國人を煙に捲き、以て外債募集に便ずるやら、大阪の松本銀行を救濟して、財界の破綻を蟻の穴の中に防ぎ止めるやら、中々隅に措けぬ腕があつた。抽籤附きの債券募集なども、實に子爵の强い主張で出來たと聞いてゐる。

子爵は頗る瓢逸家で、余の銀座二丁目時代に、三丁目の待合藤村へ遊ぶ毎に余をも引張られた。一夕巴里で美術商をして成金となつたといふ林忠正氏と同席し、子爵は一時早く歸るとて、玄關に揃へてある立派な林氏の下駄を一覽し、これは宜いものぢやといひさま、足に引掛けて、自分の薄汚いのを殘してサツ〳〵と引上げられた。一寸しても此手法だ。

子爵はまた枕橋の八百松樓に宴會があつた時、多くの雛妓の踊るのを眺め、彼女は處女、彼女は非處女だといはれる、而して其容姿一見で判別し得る方法を余に傳授されたが、大岡硯海先生なども、成程と感心して居られた。

小村侯は、其始め高利貸に攻拔かれる丈けで、別段奇才とも見られなんだが、日清戰爭の始まるや代理公使として北京から旗を捲いて引揚げる機敏さやら、安東縣方面に於ける民政署長としての切れ味には、流石の山縣老公も感嘆され、それ以來大いに識られ、桂内閣では外交方面を擔當された。

此時代には、侯は同窓の學友であつた工學博士で實は國士たる長谷川芳之介翁（烏取縣から代議士に出た時、一萬俵の米を選擧費に充てたといふ豪放振りを示した）を始め、外務省切ての一奇才といはれた山座圓次郎氏などを巧に操縱し、其結果として、頭山滿翁を始め、例の七博士などの一團が隨處に崛起し、政府當局の軟弱を責め立てゝ、盛んに公衆の公憤を刺戟したので、國民の元氣は天に冲せんばかりとなつた。此等の妙機緣は桂公や小村侯でなくては出來ぬ藝當だとて後年感嘆する人々も少くなかつた。

大外交家の小村侯、秋山海軍參謀

余の初めて小村侯に見參したのは、明治三十二年華盛頓府の日本公使館であつた。余の渡米する時、伊藤公から侯（當時は男爵）に宛てゝ紹介狀を與へられた、表書には小村公使閣下とある。公は殊に敬意を表して閣下の字を用ゐたのだと語られた。

余は華盛頓府のホテルで始めて宜い氣持になつた。紐育は勿論、市俄古でも、ヒラデルヒアでも、將たボストンに於てでさへ、ホテルでの三度々々の食事は皆現金拂で、給仕やら、食堂入口のボーイやらに、一々チップを與へねばならぬ。如何にも現金主義で頗る厭な感じを持たさるを得ぬのに、華盛頓のホテルのみは、後勘定で宜いとて現金取引をせぬのみか、萬事鄭重で奥床しい。

市街も華盛頓だけは騷々しくない。家屋も高々三階四階位で、摩天樓などは全くない。且廣い、ユツタリした市街の辻々には、偉人の銅像の建てゝあるなど、到底他の米國市街では見られぬ圖だ。

日本の公使館は素より壯麗ではなく、ホンの平家建ながら、玄關口の頂上にある金色の菊の御紋章は、自然と我頭を下げさせるのみか、又何とも言へぬ嬉しさがこみ上げて來る。

公使の小村侯は、紺色の角帶に細い縞の二子の羽織といふ如何にも無頓着な風だ。而して取敢ず晩餐を俱にしようといふので　日本料理に日本酒だ。

侯は紐育へ出張の時などは、一夜のベット代二百圓の一流ホテルに泊り込み、往年の學友たるロックフエラーその他一流の金滿家と往復されるが、食事は大抵同市にある日本料理屋（主人は讓治といふので前年有栖川宮殿下からジョーヂワシントンの綽名を賜つた家で、玆の女將は中々の利かぬ氣で有名であつた）で取られるが例であつた。

それ程公使は日本式生活が好みだ。當夜の話に、米國は地方分權主義の國柄で、華盛頓のみで眞の外交が出來ぬ、少くも市俄古、紐育、ボストン、ヒラデルヒアは勿論聖路易、桑港なども眼外に措き

能はぬ。故に自分は皆各市を巡回して、それ〳〵手を廻したとのことだ。

一日侯と公使館顧問のスチヴンソン氏との案内で、議事堂を參觀した、侯は下院議事を傍聽した上で、殊に議員數の少い上院をも示され、又彼の廣大な圖書館をも隈なく案内された。

侯の注意で、一日は又書記館船越光之丞男の案内で、メトロポリタンクラブ（即ち外交官のみの倶樂部）を始め、大統領官舍のホワイトハウスやら、華盛頓記念碑へも上つた。大統領官舍は赤色、青色、綠色、黃色の間などがあり、カーテンから椅子から絨氈まで皆一色で室名通りだ、大統領の書齋は中二階と思はれる所で、其前に花園がある。

記念塔は當時に於て米國第一の高塔（二百七十餘尺）で世界各國から寄贈の石を用ゐたとて、エレベータアで昇る中、船越男の注意で見るを得た、日本文字が彫り付けてあるが、何でも文久何年伊豆國產など讀まれるとのことだ。

此船越男が獨逸公使館へ轉任するといふので、公使館で送別の晩餐會が開かれ、余も陪席した、男は別に臨み、余が歸朝の際、夫人への贈物を托された。夫人は山縣公唯一の愛孃松子姫だ。

此晩餐會で、始めて秋山眞之氏に面會した。氏は米國公使館海軍武官として、當時大尉であつたが米西戰爭觀戰のため、サンチアゴへ出張して二三日前歸つたばかりだとのことで、米國海軍はサンチアゴの港口に汽船を乘沈めて之を塞ぎ、西班牙艦隊を封鎖したとて其計畫の奇拔且剛壯なことなどを口を極めて賞揚し居られた。後年日露戰爭の時、旅順口入口に廣瀨中佐等が商船を乘沈めたのも、恐らくは秋山氏が此觀戰から得來つた壯圖であらう。

余が華盛頓出發の際、秋山氏は驛まで見送り、サンチアゴ觀戰の記念品だとて、白木綿に包んだ物を兄の秋山將軍に屆くべく余に托し、且トランスヴアール戰爭に關するエドワードホップ著述のパンフレットを贈られた。

秋山氏が日露戰役中、東鄕提督下の參謀となり、彼の三段備へを立てゝ日本海に露艦を邀擊したことや、舷々相摩すの名文句を以て、海軍報告の特色を發揮された事は、世間周知のことだ。氏は少將となつてから、余等の二八會に入り、時々會飲もしたが、惜い哉先年既に物故された。

侯の外交家たる腕前は日英同盟と日露戰役とで遺憾なく發揮された。殊に日露條約成立後、侯自ら病軀を押して北京に乘込み、日清條約を締結して日露條約に完全な生命を與へ、以て日露大戰役の大尾とされた如き、君國に盡すの至誠も亦尋常でなかつた。

一代の奇才後藤子、人材拔擢法

一夕暢談の折、話談の人物評に及んだ時、桂公は後藤（新平子）位多くの獻策をする男はない。彼は中々の讀書家で頭が敏い上、更に若手とも交渉して盛んに新知識の吸集に勤めるからナ、併し其獻

策中隨分突飛なものも多い。到底悉く採用しがたいが、去りとて全く之を捨てる譯にも行かぬ。中には實に進んで而して適切な考案もあるからとて、その採否を錯らぬことを暗示し居られた。之を見ても公が能く將に將たる大器であることが證明される。

此後藤子に余の初めて見參したのは、築地三丁目の杉山茂丸先生の邸（若松家に向ふ表通りの西角にあつた）に於て、然も先生から紹介された。先生は例の圍爐裏邊で大胡坐のまゝ、時々長いシャベルで木炭を火に加へながら、子爵をキサマ呼ばりして、恰度弟扱ひだ。子爵も亦黑い山高帽を被つたまゝ、爐邊にあぐらをかき、先生が何か冷かされると「ナニ、其れも手本（先生のこと）が惡いからだ」などと嘯いて居られる、如何にも腹藏のない仲らしい。

此築地三丁目を廻つて、河岸通りへ出た處に柏家といふ待合がある。玆へ子爵と朝比奈知泉氏とが泊り込み、翌朝になつて分れられたが、子爵は何だかフロックコートが急に窮屈に感ぜられたけれど格別氣にせず、歸邸してからズッと後に、夫人にポケットから月給袋（これは民政長官としての俸給）を出せといはれるので、夫人が搜されるけれど見當らぬ。子爵は月給袋よりも、大切な書類がある筈だとて、カン〳〵我鳴りながら能く見られると、其フロックコートは乃公の物ではないので、頻と思ひ惑はれる。

一方の朝比奈氏は、同じフロックが妙にダブック（子爵よりも氏は遙に小男だ）けれど、是も氣に止めず、不圖ポケットを探ると金子がある。天の賜、意外のことだと俄に又押出して、散々遊び廻つて遣ひ果されたが、後に柏家へ泊つた時、子爵のと間違つたことが判つたといふ、孰れも暢氣千萬だが、子爵のフロックを始末された夫人も其實、大の近視眼なので、服の違つたのに氣付かれなんだといふ。

子爵を最も始めに識つたのは、夫人の父たる安場保和男だ、男には余も見參したことあるが、其知事時代のことを語つて、知事程ツマラぬものはない。師團所在地ならば別に交際費を政府から吳るけれど普通縣には其れがない。毎年少くも一度は縣會議員を馳走せねばならぬ。知事たるが故に、公私の寄附金には必ず筆頭に附けられるので、其爲にも同じく私囊を開かねばならず。イヤ散々なものだなどコボされた。併し跛でこそあれ、利かぬ氣は眉宇に溢れて、實にシッカリした人物だつた。

子爵を更に識つたのは石黑忠悳翁だ。子爵は翁の推薦で、日清戰役の際、事實兵站監以上であつた陸軍次官兒玉源太郎將軍に信任せられ、彼の六連島の檢疫所を一手で創成し實行された、玆でスッかり將軍に惚込まれ、將軍の臺灣總督時代には、其の下に民政長官となられた、然も最も能く子爵の才を見拔いて、最も能く之を用ゐたのは恐らくは我桂公であらう。

日露戰役の直後、卽ち桂內閣の下では、子爵は南滿洲鐵道會社の總裁となられた。南滿洲鐵道こそは、我が日露戰役の結果中最も價値あるもので、之を善用すれば其利益の洪大なること幾んど測る可

からずだ。早くも茲に着眼された桂首相は、兒玉將軍と協議の上、殊に最大の信認と、極度の自由專制とを子爵に附與して總裁とされた。

子爵は勿論能くその使命を理解されて居たから、其得意の大規模で滿鐵經營の方策を立てられたのみか、其要所に充てる人物なども悉く舊來の手法を超越して、純眞に適材適處主義を敢行された。卽ち中村是公氏を副總裁に、久保田勝美、犬塚信太郎（三井物産から）野々村金五郎の諸氏を理事とされた、其拔擢法は實に後藤式で全く從來の型から飛離れて、世間をアッといはせた。

野々村氏は余と中央新聞時代の同僚で、且惡友でもあつた。其飜譯物、殊に文章のマヅイのを、余が無理に博文館へ賣付け、其原稿料を豫測して、余と茲彼處を飲み廻つた位で、其滿鐵理事たるや、余は或は同名異人とも疑ひ、滿洲に遊んで、大連の歡迎會に臨んだ時始めて同名同人であつたことを識つて、氏から更に大いに歡迎されたこともあつた程だ。

原氏等との比較

後藤子の滿鐵總裁時代は、最も好くその面目を躍如たらしめられた。子爵は滿鐵沿線の平和を保つ爲めには、北京政府は勿論、清廷の實權者とも直接諒解を得て置かねばならぬとて、自身堂々乎として北京に乘込み、悍馬の如き女性で、然も居傲尊大ながら、竟に女性たるを免れぬ西太后に結構な手土產を獻納して、破格の謁見を爲すは勿論、北京政府の大小官僚をも煙に捲いたなど、隨分腕前を揮つたものだ。

西太后へ進謁の折、式部官が前以て子爵に對して、太后の椅子の前段を階段など說明したので、陛下の稱號の出た所茲にあることを感ぜられたといふ。

子爵は又滿鐵の主催で開かれた天長節祝賀には、一擧十萬圓を支出して、大盤振舞をされたものだ、明治期の十萬圓は今の幾倍か、是は子爵の氣性に恐れ入つたとて永く大連に殘つてゐる話柄の一だ。

政治家としては、單に內政のみに努力して、國際的には多く考へぬものも少くない、原敬、大浦兼武の如き兩政治家は乃ちそれだが、我後藤子に至つては、多角的に種々の創意發案を爲し、それが往往にして奇矯に傾くものも多いけれど、日本として世界を視ると同時に、又世界の日本としても之を視る事を忘れぬ人だ。

原敬氏は華盛頓の軍縮會議に際して、一大決意をされたといふ、卽ち大隈內閣の袁世凱排斥、寺內內閣の段琪瑞援助を始め、引續く山東經營などで支那人から盛んに惡宣傳を放たれ、英米からも對支に大野心あることを疑惑されて、頗る國際的地位が思はしくなかつたので、此等の誤解を一掃するが爲にも、徹底的に平和主義を守らねばならぬ。而してそれには相當な犧牲を拂ふも亦拒むべきでないと決心し、斯て會議に臨むにも、德川家達公を委員に加ふるなど、例の周到な用意をされた。

當時大岡硯海先生は、此の間の消息を余に漏らし、足下は曾て朝吹英次君の石田三成を中央公論誌上で反駁し、徳川家康が孤兒寡婦を欺いても大阪を滅したのは、一に平和のためであると主張したが余も今度始めて家康の苦心を諒とし得たと沁々語られたことがある。

併し原氏は竟に内政的に偉大な政治家たるに止まつた。桂公ば此點になると實に比類稀な大識見家だが、後藤子爵も亦その點に、一隻眼を有して居られる。

何時までも日英同盟のみを株守すべきでない。既に日露戰役も終つた以上、更に露獨兩國とも親交して、共々平和の基礎を堅めねばならぬ「獨佛が相爭ふて止まぬ時は米國に乗ぜられて、歐洲は竟に死命を米國に制せらるゝに至るであらう。獨佛は宜ろしく相協調し、且英國とも提携せば、歐洲始めて永く盛運を持續しよう」とはシャルクの說だが、日本も亦何時まで露國と相憎むべきでない、寧ろ日露提携でないと眞の東洋の平和は招來し得ぬといふのが子爵の基礎的意見だ。

世間にはアングロサクソンの同盟に對する、ラテン連盟を以てするといふ說もある。是は白人種のみのことだが、子爵はそれよりも深刻に、日露獨提携の主張者だ、而して屢々之を伊藤公に獻策された。伊藤公が日韓併合後、露國を訪はれることになつたのも、全く子爵勸說の結果だといはれる。

然るに公は遙々露都から出迎へた露國藏相と沁々話し合ひもせぬ内、哈爾賓停車場で韓人安重根の毒手に斃れた、實に明治四十二年十月二十六日だ。

子爵は尙進んで伊藤公に勸誘したと同一趣旨を桂公にも繰返されたこと申すまでもあるまい、去れば桂公が明治四十五年(大正元年)七月六日に子爵及び若槻禮次郎氏を隨へて、滿洲經由、露獨に向はれたのも、亦實に子爵の意中のことたるや勿論だ。

然も今度は不幸にも、明治大帝が其月の中旬から御不例とならせられ、其三十日竟に神去らせ玉ふたので、桂公も匆々に行李を治めて歸朝された、而して子爵の計畫も亦實現されなんだ。

假令宿命論者たらずとも、伊藤公が途中毒手に斃れられ、桂公も國家皇室の大故に逢ふて俄に引返されたことを思はゞ、子爵たるもの憮然として胸を打たざるを得まい、然り、子爵は終生玆に絕大な感懷を去り能ふまい。

後進の引立と援助

後藤子爵が後に露國特使、日本の官民は之に近づくさへ危險として恰も臆病風に取付かれた如く、唯遠くから眺めて踏跙逡巡するに止まつた彼のヨッフェを訪問し、親しく語談された如き、またその國際的一隻眼から來たものだ、必ずしも落花流水のみでない。子爵に對する露國の感情は極めて良く、子爵の仲介で露國の或る種問題に對する敵意を緩和したことも一再ではない。子爵曾て外務大臣たりしこともあつて、頗る驥足を伸べようとされたが、不幸内閣の總辭職で志を遂げられなんだのは、恐

らくは多く心ある人々の遺憾とした所であらう。

子爵が桂公の内閣に入つて、遞信大臣となられたのは、第二次桂内閣で、公が明治大帝の大故に會ふて歸朝し、間もなく第三次内閣を組織せらるゝや、子爵は再び遞信大臣となられた。而して公の組織された立憲同志會にも入つて樞機を參畫された。

然るに公薨ずるや、同志會總裁は公の遺志に由つて加藤高明伯が之に就いた。而して子爵は大浦子と共に之が輔佐役となられた。

子爵は本來大浦子と仲が好くない、大浦子が己を空しふし誠を推して伯を守り立てるに對して、後藤子爵は聊か慊焉を禁じ得ぬ。竟に黨費問題を提出し、其容れられざるや蹶然として脱會された。理由は別だが子爵と前後して同じく同志會を飛び出したものに仲小路廉氏もある。

子爵は黨費に就て相當考へられたらしく、神戸の鈴木や、仙臺の荒井泰治氏などに合力を求められたが、彼等は合議の上、子爵一身上の所要とあらば、如何にしても調達するが、政治運動に費されるのでは出資し得ぬと申出た。子爵は怫然として、馬鹿をいふナ、不肖なれども後藤新平、一身のためには鐚一文たりとも依頼はせぬ、公事なればこそ頭を下げて頼むのだとて其まゝ話は打切り、且脱會屆を提出されたといふ。

併し此脱會のため、黨人間に於ける子爵の信用は全く地に墜ちたと申して宜い、子爵の緣故で同志會員となり、恰も置去りを喰ひつゝ奮然として踏止まつた者も少くない。子爵にして若し尺蠖の屈するを學び、黨人心理を解して辛抱して居られたならば、大浦子頓死し加藤伯急死された後、誰が何といつても子爵が總裁たり首相たること爭ふべくもない。餘りに脱會に敏なため、寺内内閣や權兵衛内閣にこそ入られたものゝ、竟には遙か後進たる若槻氏等が首相たるを觀るに至つたではないか。

子爵は極めて感激性が強い、隨つて多くの俠氣もあり、反抗心もある。往年相馬家の大忠臣の如く思はれた錦織剛清のため、子爵は一肩祖いで、彼れを援助し、竟に自身入牢の厄に罹られても平氣であつた。余の識る或る記者に對し、子爵は其の植民地に關する雜誌を發行するのを援助するとて、月々二百圓宛補助されたが、或る年末、之を打切りにするとて數ヶ月分を一時に寄與された處、記者先生大いに感動して、涙を瀧の如く流すので、子爵は坐ろに氣の毒になり、卽座に打切り說を撤回されたので、結局は一時餘計の惠みをされたに止まつたといふ奇談もある。

子爵はまた才幹を識別し、之を援加するに吝でない美德の持主であつた、彼の森山吐虹氏の如きは、一時子爵に於て其才智の非凡なのを愛重されたと聞く、又露國通の一奇才夏秋龜一氏の如きも、また多く子爵の恩顧を受けた、米國に遊學した河上清氏なども、夙くより子爵からの學資補助を受けて、優等成績で大學を出た、茅原華山氏なども若干子爵の補助に預つたとも聞いて居る。

況んや政治上に於て、殊に總選擧の場合など、子爵の援助を受けた者の數は、恐らくば箕を以て計

る程多いであらう。

余も外交論などで筆を執つて、大に子爵の御褒めに與つた覺えもある、併し子爵からの私恩は露ほども受けて居ない。是れ玆に極めて無遠慮に、子爵の眞面目を赤裸々に描き得べく企てられる譯だ。

子爵の普選準備會は、一般の政治教育として、實に此上もない好計畫だ、子爵はボーイスカウトを組織して、自身その指導の任に當られる如く、此政治教育のため一身を捧げらるべきであらう。生中に首相たらんとするが如きは寧ろ子爵自らの冒瀆とならう。露骨に申すと、子爵の眞の帷幕の士は、永田靑嵐氏位であらう。之を以て天下を取らうなどとは思ひも寄らぬ沙汰だ。子爵が其才を見て拔擢した江木翼氏も大臣となり、子爵の遙後輩たる若槻氏さへ既に首相となつたではないか、今更首相などに成らずとも、何等子爵を輕重するに足らぬ筈だ。

最短命の內閣、反對黨の惡辣

桂公が後藤新平子と若槻禮次郎氏等を率ひて歐洲に往かれるときは、日英同盟以外、露獨とも提携して平和の基礎を堅むべく、兩國と非公式に折衝するは勿論、同盟國たる英國を始め、佛國との理解をも得置くの底意を有し、歸朝後更に一政治團體を組織し、皇室中心主義で內を堅め、外は國際的に同盟提携を緊密ならしめて、東洋の平和安定を期すべく、豫め明治大帝に巨細伏奏し、其御嘉納をも得置かれたと傳へられる。

然るに公の脚未だ歐洲の中央にも達せざる時、大帝崩御といふ悲痛な急電に接し、取る物も取敢ず倉皇歸朝された。歸朝の日、家に落着く暇もなく參內して權殿を拜し、靈柩の下に伏泣して悲しみに百事を忘るゝばかり、未だ沈思熟慮の遑さへなき時、內大臣として新帝に奉仕すべく命ぜられ、是れまた多く考へる餘地もなく、只管恐縮唯々勅諚を畏み奉ずるの外はなかつた。公が內大臣たるの得失なども素より研究審思の機會なく、謂はゞ悲痛哀悼の中に、ズル〳〵引摺られたに過ぎなんだといふが全くの事實であらう。

然も時經て、始めて考へる際、公は年來の抱負を實現するの機會を失ふて、ハタと當惑されたであらう。勿論一身を新帝に捧げ奉るとはいへ、內大臣は公の得意でない、同じく奉仕するにも其才能の最大限を盡してこそ君國の爲であるのに、不得意な內大臣たる如きは、單に己を殺すのみではないと、公自身も感付かれたであらうが、是まで公を中心として活動した人々中、亦公の才能を埋め終り、年來の理想を謂はゞ暗から暗に葬るのは、國家社會のためにも不利だとして、其方向に活躍した者のあることも勿論だらう。

時の西園寺內閣は軍部方面の主張たる二個師團增置案と相容れぬため、軍部からの大反對が起り、陸相上原元帥の直接伏奏ともなつて、遂に總辭職の已むなきに至つた。當時田中男卽ち前の首相で政

友會總裁たる義一將軍の如き、上原陸相の帷幄内で大活躍されたこと申すまでもない。

斯くて竟に勅諚降下ともなり、桂公出でゝ第三次内閣を組織されるに至つたが、西園寺内閣を倒した張本こそ桂だとて、玆に憲政擁護運動までも起つた。公が内閣倒壞に與つたか否やは疑問だが、本來大將として陸軍に威望の高かつた公が嫌疑から免れようとするは寧ろ無理だ、況んや政治運動に長じた政友會や國民黨のことだ。公が宮中から倒閣を企てたと盛んに宣傳し、殊に公の同志會組織にケチを付ける爲にも、極力斯かる宣傳を爲しつゞけたのも無理はない。

公は形勢の急なるを視て、豫定よりも早く同志會組織に着手された。此同志會の綱領で、皇室中心主義を高調したのには、特に記すべき事情がある。始め社會主義者の大逆事件起るや、明治大帝の御軫念は申すも畏い程であつた。永年側近に奉侍した田中光顯伯の如きも、爾來社會主義を視ること仇敵の如くである程だ。

當時の桂首相や平田内相も、また憂慮に堪へず、既に明治四十一年七月十四日に成立した第二次桂内閣に對して、其年十月十三日彼の戊申詔書の煥發を命じさせ給ふた程だから、四十三年六月大逆事件が起り、翌年一月其公判決定するや、桂公以下引責辭表を上つたが、却下となり、更に二月の紀元節には、窮民の施藥救療のため御内帑金百五十萬圓の恩賜とも成つた。國民思想の推移には甚深な注意を拂ひ、殊に眞劍に努力した桂公等が、玆に大に思ふ所あつたは當然であらう。而して政治團體を組織するにも、殊に皇室中心主義を高調して、一般國民の向ふ所を明かに標置する用意を逸せなんだのも、また必然と見るべきだ。

桂公の同志會（憲政會の前身）は一面斯かる用心と、一面また公の信望に由つたのだから、天下靡然として之に傾く情勢が見えた。政治運動に老巧な政友會國民黨の人々が玆に深く考へて、思ふさま桂公及同志會にケチを付けようとしたのも、是れ亦當然であらう。隨つて其ケチの付け方の深刻であつたことは、今から思ふも悄然たらざるを得ぬ。

此護憲運動の眞ッ最中に、勅諚は政友會總裁西園寺公に下つた。是は加藤外相（高明伯）が英國皇帝の政爭緩和の例から思ひ付いた獻策だと傳へられるが、後藤遞相の如きは當時余に向つて、護憲運動終熄を保證された程だ。併し山本權兵衛伯の騎兵隊横出的運動となり、西公また勅諚通りせぬので、公は議會解散の議を排して、勅諚を無效ならしめる如くでは、内閣の事など問題にならぬとて、咄嗟に總辭職を決せられた。第三次桂内閣が二ケ月にも足らずに倒れたのは實に斯かる成行なのだ。

薨去後に去つた逸材、附たり細野次郎氏

豪傑の士は、文王を待たずして興るといふが、諸葛亮は劉備がなくては用ひられなかつたであらう。本多佐渡も家康なればこそ能く智囊としたのではないか、一方の將たる材幹は、將に將たる桂公の如

き人を得て、始めて大に驥足を伸ばし得るのだ。

桂公の同志會組織に參畫した材人の中、德富蘇峰先生や、秋山定輔、阪本金彌、木下謙次郎の諸氏のあつたことを忘れてはならぬ。

蘇峰先生は最も公の信認を得、同志會の宣言綱領などは、總てその筆に成つたのだ（世間の一部には、余が執筆したなど傳へるのもあるが、全く虛說だ）先生は公のために大に努方しようと期し、其門下を物色して、同志會のための文章部、演說部まで設ける計畫を立て、早くから山陰方面の新聞界に活動し居た梅田又次郎氏の如きもその演說部員に內定されてあつた程だ。先生は又護憲運動に極力反對し、熱心に議會解散を主張されたが、公は咄嗟に總てを投出された。亞いで病を獲て終に世を去られたので、蘇峰先生は、玆に全く志を政界に絕たれた。

先生は已に心を政界から絕つ以上、全力を餘事に竭して以て奉公を終るべしとし、玆に明治大帝を記念する明治の大歷史を作るべく發心し、それには明治時代の先驅たる織田時代に遡らねばならぬとて、日本國民史の大著述に取掛られたのだ。換言すれば先生をして此の千古不磨の大業に手を着けさせたのは、全く桂公の死だ。桂公の死に由て先生の心機を一轉させた結果だ。

阪本金彌氏は矮小瘦軀だが、全身是れ膽と策といふ豪傑だ。鑛山成金となれば、萬金を散じても聊か惜む色がない。一時は業餘の趣味を刀劍にも及ほし、可なりの名刀を蒐集された。

玆に一挿話を記する。それは阪本氏が政治運動にとて賣拂ふた刀劍を讓り受けた細野二郎氏のことだ。細野氏また豪爽の士で、書畫骨董の趣味も深い、未だ山陰線の通ぜぬ頃、出雲大社に參拜の途次、我松江市にも立寄り、古道具屋を漁つて或る品を見付け、店主が五圓といふのを七十圓を渡し、此品は是れ丈けの價値がある。自分は田舍まで來て掘出物などする吝な人間ではないと痰痾を切つて、店主を阿然たらしめたといふ。

晩年細野氏も氣が些とヘンになり、或る夏の二八會に利根川の上流で漁れたのだとて、大きなハイを寄贈し、且利根川上流の追貝の絕景が、耶馬溪などの比でないから、玆に皇室の御別邸をも建設せられたい。其れには是非諸君の御來觀を希望するとの趣意を申越され、尙ほ會からの歸り掛け、拙宅へ立寄られたいとのことだ。

細野氏と最も別懇な福田和五郎氏が當夜細野夫人からの希望もあり、氣の昂ぶつた主人を安靜する爲、無理でも立寄つて貰ひたいとのことに、余も後藤子爵などを勸めて歸途近い山王下の細野邸（是は平岡大盡の舊居で、數寄を凝らした日本家）に行つた。

細野氏大いに悅び、自慢の書畫を展觀させ、阪本氏から讓り受けた刀劍をも持出し、中にも朱鞘の大刀を引拔き、眞新しい疊にヅブ〳〵差込んでは引曲げ、引拔いてピンと元通り眞ッ直に返らせるなど、大得意であつたが、井上（馨侯）や益田（孝男）などは自身で良否を鑑定する識見も確信もなく、

一に道具屋の見立に依賴するが、自分は一切さることをせぬなどと、例の持論を滔々と述べ立て、果は子爵に湯殿を見物しろと自身案内に立たれたから、例の氣で萬一のことでもあつてはと余も同行すると、其は湯舟を御影石で拵へたといふ丈けだが、其れでも細野氏石を叩いて誇つて居られた。

斯くて間もなく追貝行となつた。二八會員の外、樋口銅牛氏など二三會員外の顔も見えた。先づ前橋市に立寄つて其夜は沼田に一泊、翌日車を連らねて山路深く追貝に往いたが、夜具類など皆馬で運ぶといふ馬鹿氣た大規模だつた。

追貝は全川岩で、無双な絶景だ、細野氏は丸で御大名然として大盤振舞をし、赤坂から藝妓までも呼寄せた。是が恐らく細野氏最後の氣焔でもあつたらう。

細野氏など足元にも及ばぬ坂本氏は、桂公に傾倒し、同志會の幹事長として、渾身の力を注がれたが、是も公の薨ぜらるゝや間もなく手を引かれた。後に余等と打明け話をした際、自分（阪本氏）は秋山定輔君等と計り、後藤新平子を守り立てる心底で、今成功せずば、子爵を更に丸裸とし、向後十年を期して目的貫徹の志圖だといつて居られた。

桂公の薨後、秋山氏も、木下氏も前後して同志會を去つた。此等奇材の士、公でなくば成すあるに足らぬと視たからだらう。玆にも公の偉なる所以が推知される。

第二十七　山　縣　公

古名將の風度、疊の上で死たくない

山縣公は年少から藩の槍術師範に就て學ばれ、其道に掛けては相當自信があると平生もほのめかし居られた。狂介として高杉晉作の下に奇兵隊一方の雄であつた時なども、得意の槍で英國軍艦内へ突進しようと企てられたこともあるとて、時々其無茶さを笑ひ話ともせられたようだ。

長州人は總じて文雅の才に饒かだ。品川子爵が彼の體でトコトンヤレ節を作つて、勤王軍の士氣を鼓舞されたことは有名の話で、一方また筆札にも妙であつた。井上侯も牙籌を執つての雄のみでなく、よしこの節（都々逸）にも名作がある。高杉のまゝよ三笠なども頗る有名なものだ。

伊藤公もその雄で、更に漢詩にも巧みで、書は申すまでもない。我山縣公も和歌漢詩ともに妙で、前者には通泰博士を師として名作も多いといはれる。書も骨立ながら氣品の犯しがたいものがある。武骨人のようだが、謠曲や仕舞以外に、淸元の咽は勿論、其方の鑑識も高いといふ、公を一介の武弁謹直人に止まるとするのは、全くその韻趣を解せぬ垣のぞきといはざるを得ぬ。

日清戰役には、公は早くから第一軍司令長官として朝鮮へ上陸し、險難を凌いで北進せられたが、其司令部の糧食掛りでは、洋食の器具二十人前丈け準備し往いた。それで何か特別に御馳走すべき時、掛りから洋食を供すべく申出た。スルと公は事情を尋ねて二十人前の用意があるのみだと知り、其れでは全軍の將校にも行渡らぬではないか、司令部の將校のみで特別に貪り食すべきでないとて、嚴しく掛りのものを叱られたので、此二十人前の食器は公の出征中一度も使用されなんだ。

又出征中恰も十一月の天長節に會つたので糧食掛から赤飯を差出した、公も機嫌よく、全軍の將士一般に行渡つたかと念を押されると、イヤ司令部丈けの分を炊たとのことに、公は怫然として、其れは宜くない。僅宛でも總ての兵卒にまで分與せよと嚴命されたので、左らばとて、俄に此赤飯を普通飯にかき混ぜて配つたので、白飯の間、數粒の色替りがあるといふので、兵士連も不思議がつたが、事の次第を聞くに及んで、一同公の心入れに感激し、中には涙を揮つたのさへあつたといふ。公の斯る心入れは、實に古名將の風度であると申すべきで、曾ては公を憲法に昧い政治家として侮蔑し居た余も、飜然として公に心からの敬意を拂ふやうになつた。

公の誼に敦かつた椿談がある。山田といふ某記者が曾て杉山茂丸翁の紹介で公に見參した。公は引見して、其氏名と容貌とが、往年漢學の師匠とされた山田といふ方に酷似するので其事を問はれると、記者先生頗るヘドモドして、囁吃多く答へぬのを、公は的切其れと自分で極め、食事までも饗應し優待し、其後も打解けて語らひ、若金錢に不自由でもあらば、遠慮なく申出るやうにとまでいはれるので、記者先生恐縮して、巨細を紹介者の翁に打明けると、翁も吹出されたが、併しこれも公の舊誼に厚いための錯誤だとて、大いに感心されたと聞く。

公もまた能く後進を引立てられた。望月小太郎氏が初度の洋行の際バルカン半島邊から屢々長文の書面を公に寄せ、事情を委曲し且意見をも添へてあるので、公は曾てそれを余等に示し、望月といふ男には、一度も逢つたことはないが、仲々マメな漢子らしいとて爾來少からず同君を助けられた。

都築馨六男の如き、本來ならば伊藤公の帷幕に入るべきだが、公に愛重されて其材を伸べられた。安廣伴一郎氏（前の滿鐵社長）なども全く公門下の駿足だ。氏は頗るの蠻カラで、洋行から歸朝した時は、中山寛六郎氏の靈南坂下の家に居候となつて居て、余も茲で始めて逢つた、中山氏が公の首相となつた際秘書官となり、安廣氏を推薦したので、公は其人物を愛し、竟には姪を娶はされた。世間では安伴など申して輕んずるものもあるが、實は大物で、公の前でも徒らに恐れ入る如きことなく、ボン〳〵直言されるので、更に彌よ公の氣に入つて居たらしい、曾て余等が內閣運動で公の邸に推參した時、公は容易に後任がないではないかなど言はれるので、イヤ何某〳〵があるとて安廣氏をも數へ擧げると、公は我意を得たりとような顏をされたこともある。

伊藤公が哈爾賓で韓客の毒手に斃れられたと聞いて、公は國家のため痛惜に堪へぬが、個人たる伊

藤としては、寧ろ死處を得たもので羨ましい、殊に自分の如き軍人は、何としても疊の上で死にたくはないとて、極めて悲痛な體であつた。以て公の面目を察すべしだ。

所謂重大事件、大正帝の仁慈と公の忠誠

やまと新聞時代のことだが、余は小田原近い石垣山、卽ち豐臣秀吉が、彼の小田原攻圍の折、自個の本營として、幾んど日本の總軍隊を指揮し、水も漏らさぬ策戰を施しつゝ、自分は遠く寵姬の淀君や、茶の湯、能樂の者共まで大阪京都から呼寄せ、悠々寛々振を示して小田原城內を威壓したといふ石垣山を振出しに、靜岡城、日本武尊が草薙の劍の威光を揮はせられた燒津、酒井左衞門尉が勇氣に充ちた大鼓を叩いたといふ濱松城、三形ヶ原の古戰場を始め、武田信玄が狙擊されて落命したといふ野田城、大久保彥左が自慢の初陣をした鳶巢山や、家康發祥の岡崎城などを歷覽すべく、寫眞技師の林氏と同じく出發した。

其時先づ小田原の古稀庵に山縣老公を訪ふた。例の風雅な衡門を入ると、玄關から右に折れて日本室の廣間で、公は箱根の峰から眞鶴崎一帶を包んだ相模灘を目にしつゝ石垣山を指さして、彼のコンモリ茂つたのが印度から移植した樹だとか、城址には黃金の井とて太閤の用水とされた古井戸も、今尙在ることなど語り、自分も過般登山した、老人だからとて、山駕籠を用意し往いたが、往返共にその厄介にはならんだとて、路筋のことなどまで巨細に說明し聽かされた。

其後、山本內閣倒壞以來、原內閣に對する運動でも、屢々公のお邪魔をした、その日本室の更に奧なる突當りには、西洋室があり。正面には明治大帝と昭憲皇太后の御寫眞が揭げられ、公は出入每に之に禮拜されるので、左なきだに眞面目な公との談は、幾んど窮屈を感ずる程だつた。

玄關から反對に左手へ曲ると、其奧に二階建ての洋室がある。玆でも兩三度面談したが、公が壯健で起居の自由な時は玆で會はれ、貞子夫人の手を借りて席に就かれる時は、右手の奧でせらるゝが例のやうであつた。

公は造庭術にも自然の妙を得て居ると稱せられるが、庭には唯隅の方へ若干の修竹と石とをあしらうた丈けだ。一面の芝生からは、雄大な山と海とが見晴らされる。是れ以上の好景はない、中庭には松下軍治氏から分與された水道を引いて湛え、椽の下に潺湲の流聲を立てさせてある。

最も感ずべきは、公が新智識の吸集を怠らぬことだ。參謀本部や陸軍省からの情報及刊行物に目を通されるは勿論で、郵便なども每回其ため隨分嵩張る程だ。

公は何處までも謹嚴だ。一言一句を苟くもされぬ。故に今や公亡しと雖も、政治上の談話などは玆に記すべきでなからう。唯余が東宮殿下（大正天皇）が古稀庵に成らせ給うた時の寫眞に、公が紋付に袴のみなのに不審すると、公は微笑しつゝ、貴人の御前では、臣下として羽織を着るは無禮だと敎

へられたことがある。

大正十年の末から十一年に掛けて、所謂重大事件なるものが發生した時、公は反對であられた。それも併し相當の理據があつたので、其ため宮內次官の石原健三氏が辭職してケリを付た。然も世間では古臭い薩長關係までも持出して公を非難するものもあつたので、公も流石に心外に堪へられなんだと見え、勳爵は勿論、一切の公關係を拜辭して、元のまゝの山縣狂介になると出願されたが、公が深思熟慮の上、斯うと決心された以上、何人が何と申さうとも、挺でも動かぬ。

當時は實に何となるかと氣遣はれたものたが、至尊から公を召させられ、御直々に、卿は先帝の遺臣である。爵位勳等總て先帝から賜つたのだ。それを朕の代に至つて一切返納するとせば、是れ先帝の御志を無にするに齊しい、卿は朕をして不孝の兒たらしめても、尙素志を貫く所存であるかと宣はせられたので、公も數歩をしさつて拜伏し、熱い涙を揮つて恐懼し、總ての出願を取下げられたと聞く。これこそ君臣の双美談で、公を飾ると共に、又大正天皇陛下の御特色を顯揚するものであらう。然も此間に於て英明無比であらせ給ふた皇后宮（今の皇太后陛下）が百方御執成あらせられたことは申すまでもなからう。公のことに就いて多く記したいこともあるが、大抵は機微として避くべきだから、此美談を以て結び置かう。

第二十八　山本內閣倒壞

シーメンス事件、警官の兇行

余の四十餘年の記者生活を回顧して、政治的に新聞紙の機能を發揮すると共に、實際運動中最も組織的であり、大規模であり、又熾烈であつて、而して著しく功績を奏したのは、山本內閣の倒壞であらう、當時政黨政治家の運動は素より極めて有力であつたが、併し吾等の努力と比較して、果して孰れが有效であつたであらう、敢て自畫自賛でなく、又夜郎自大でもないが、率直に申して多く他に讓らぬであらうと信ずる。

大正元年十二月二十一日に成立した第三次桂內閣は、所謂護憲運動のため强烈な攻擊を受け、桂公自ら立憲同志會を組織されたに拘はらず、翌二年二月十一日の紀元節に總辭職を爲した、その命脈僅かに五十有餘日、明治十八年內閣制制定以來、實に第一短命內閣であつた。

是より先き桂公と加藤高明伯（當時男爵で外務大臣）とは西園寺公（當時は侯）を訪はれ、その結果二月九日西園寺公に優諚が下り、優諚の趣旨が政友會總裁として時局を圓滑に解決するようといふ

思召であることが內大臣伏見元帥宮の御沙汰で明白となつたが、山本權兵衞伯が桂公の所謂騎兵大部隊の橫さまから突擊し來つたやう、突如桂公を訪ふて辭職を促がすと共に、一方政友會總會に臨める西園寺公を訪はれたので、公は政友會を抑へずに、却つてその行動を自由にすべく指圖された、當時公に聖旨不遵の議も出たが、桂公辭職後、公は引退を決心されたから、元老會議の結果、大命は山本伯に下り、伯は西園寺公、原敬、松田正久諸氏と熟議して之を拜受し、二十日新內閣組織が出來た、卽ち山本首相の下に海相齋藤(實)陸相木越(安綱)の兩男爵が留任し、牧野男が外相たる外、內相原、法相松田、農相山本達雄男、藏相高橋是清男、文相奧田義人、遞相元田肇諸氏の顏觸れで、首相、外相、陸海兩相の外は、悉く政友會若くば新入政友會員で固めて、世間では政友會を基礎とする薩閥政友の聯合內閣と稱呼した。

去れば國民黨の犬養毅氏や、政友會の尾崎行雄氏など、憲政の神といはれた人々を始め、岡崎邦輔氏等も流石に憤激し、政友會からは一時二十餘人の脫會者があつた。

此時桂公の同志會は九十二名(後に增して九十五人)に過ぎぬのに反し、政友會は百八十八人(後には二百五人)を有して、絕對過半數を占めて居た、然るに世間の非政友感情相應に高く、且桂公が直ちに政權を拋げ出したのみか、やがて病に罹り、十月十日竟に薨去されたので、同情は寧ろ公と公の遺產たる同志會に傾むくと同時に、內閣及び與黨に對する反感は漸く高まり來つた。

桂公薨去の後仲小路廉氏は眞先に同志會を脫し(十月二十二日)、次で後藤子も亦去られた(同月三十一日)併し同志會には多くの動搖なく、十二月二十七日其結黨式を擧行したが、一方の政友會にも翌三年三月松田正久男が薨じ、次で西園寺公は總裁職を原敬氏に讓られた(それは大隈內閣成立後の六月政友會大會に發表された)。

山本內閣の召集した議會では、流石に本職として多くの海軍費を要求し、囂々たる物論を生じたので、在野黨からは不信任案に引續いて上奏案まで提出し、島田三郎、犬養毅、花井卓藏の諸氏頻りに熱辯を揮はれたが効なく、二百餘の政友會が頑張るため、議會の形勢は奈何しがたい。

大正三年一月のやまと新聞に、測らずもロイテル電報として、獨逸裁判所が日本海軍の當路に贈賄したシーメンス商會員カアル・リヒテルに有罪の判決を下したことを報導した、見出しは四號活字で格別世間の注意を惹かず、之を捉へて問題とするものもなかつた處、烱眼な嶋田三郎氏は之を發見して、議會で質問さるゝや、始めて囂々たる大問題となつた、併し議會では絕對多數を有する政友會が控ゆる爲、何等執るべき手段もなく、單に輿論によりて內閣を攻擊する以外に途がなかつた。

斯くなれば吾等新聞記者の本舞臺だ、山本內閣攻擊のため、在野黨が內閣彈劾案を提出した大正三年二月十日日比谷公園で國民大會が開かれたそれの崩れが、政府機關たる中央新聞(京橋區山城町河岸)を襲擊せんとし、玆に端なくも警察官と衝突したが、その際東京日々新聞の記者橋本繁氏が警察

官に斬られて負傷するといふ意外な事件が勃發した、余等は勿論此機會を攫むには躊躇せなんだ。

當の東京日々新聞では警視廳にその不法を詰つた處、同廳では之を否認して取合はぬので、流石の東京日々も全社憤激に燃え、余等と協同して政府の非違を糺彈することゝなつた。

然るに間もなく原内相の芝公園の私邸前に於て、東京朝日新聞記者芳賀榮藏氏が首相を訪問しようとして、原邸の壯士に亂打され、負傷したとまで發生し、同社も亦躍起となつて、彌よ余等の火の手を高めることゝなつた。

攻撃の三段戰法、一段から二段へ

余等は最初桂公のため同志會成立を援助すべく設立した事務所を桂内閣引退後、縮少して新橋倶樂部（今の新橋驛の横手にあつた三階樓だが、驛設置のため取拂はれた）に移し置いたから、山本内閣攻撃の爲、更に此倶樂部の一室を借り受けて、玆を集會所とし、之れには黑岩周六氏も出席された、而して竟に其中心となられた。

中央新聞襲撃のことあるや、倶樂部の主人夫婦は頗ぶる恐怖し、政府筋に睨まれ、且政友會の壯士等に亂入されてはと、大に神經を惱まし、その女將などは本來のヒステリツクな上に、彌よ顏色を蒼くするといふ狀態で、聊か氣の毒にも思ふたが、百方慰さめ勵ました、それでも用心のためとあつて主人は階下の玉突場の外窓を嚴重にするなど相當施設する所があつた。

余等の運動には、東京朝日と日々とが兎角に澁り勝で、爲に協同上にも若干の不便を感じたが、日々の橋本氏の負傷點は背後に有て然かも明白な刀疵であるのに、警視廳は單に警察刀の鞘が觸れて少しく洋服を劈いたに過ぎぬなどゝ强辯するので、同社の憤激甚だしく、玆に大谷誠夫、須崎芳三郎の兩氏と余とは三段戰法として、先づ築地精養軒で記者大會を開き、内務大臣に引責を迫り、更に全國に渉つて記者大會を開くことゝし、二月十四日東京の記者大會を開催した、是には中央新聞、每夕新聞等の政府派新聞が加はらぬ丈けで、取敢へず左の決議を爲し、委員を擧げて内務大臣に交渉することゝした。

二月十日警察官吏兇行して無抵抗なる新聞記者を傷害したるは、吾人の天職を危くするもの也、其責任者たる内務大臣は、之に對して書面を以て謝罪の意を表明すべし。

それを委員に托して原内相に手交することゝした。

斯くて委員等は十六日衆議院に赴むき、原内相に面會を求めると、内相は委員會室で余等委員を引見されたが、其際秘書官の高橋光威氏が自身で不足の椅子など揃へられた。

委員長の格で、黑岩氏は先づ恐る〳〵といふ位極めて鄭重且溫和に、十日の事件を申立てられると原内相は警視廳の報告といふを楯に取つて、内務大臣として責任など負ふを得ぬと斷じ、頗ぶる强硬の

樣子に見えた、其時黑岩氏は始めて懷中から記者會決議の前記手書を提出されると、之を一讀された内相は流石にギョッとされたようだ、併し此會見は是れで終つたが、翌十七日警保局長の岡喜七郎氏が萬朝報社へ黑岩氏を訪ひ、事件に對して内務大臣も大に同情する旨を認めた書面を提示し、百方辯疏されたけれど、併し謝罪の意はないので、黑岩氏は委員の一人たる松山忠次郎氏を招き、警保局長の面前で協議の上、卽坐に右書面を返附された。

且朝日新聞記者芳賀氏も此間に原邸壯士のため、負傷したのに依然强辯して、その態度幾んど倨傲に類するので、十八日各社代表等再び精養軒に會し、左の決議をした

警官兇行に就て其責任者たる原内相が言を左右に托して謝罪せざるは、悖戾非を遂ぐるものなり。

又原内相私邸の門外に於て、警護の壯士が往訪の東京朝日新聞記者芳賀榮藏氏を傷害したる件に關し、原内相が曲辯以て事實を掩蔽せるは責任を無視するもの也。

故に吾人は彼を退任せしむるの至當なるを認め、有力なる手段を執て此目的を貫徹せんことを期す

卽ち第二段の作戰に移つたので、記者團の熱は益々昂騰する、所謂有力なる手段として、二十三日全國記者大會を同じく精養軒に開催し、堂々として左の決議を爲し、相踵いで、大阪記者大會、東北記者大會（福島）、九州記者大會（福岡）等を開き、幾んど言論機關を擧げて、内相攻擊に全力を注ぐと共に、彌よ内閣に對する反感をそゝり立てた。

一、警察官吏兇行して良民を斬り、新聞及通信記者を害したるに對し責任者たる内務大臣が事實を誣てその責を避くるは不法なり。

一、警察官は一擧に數百の良民を囚縛し其自由を剝奪したるは全く人權を蹂躙し憲政を賊するものなり内務大臣は當然其責任を道るゝ能はず。

一、内務大臣が無賴の壯士を願使し自邸訪問の記者等を毆打したるに對し、曲解其非を遂ぐるは自ら保安の職責を無視するものなり。

一、故に吾人は國論を振起し彼の罪狀を彈劾して必らず之を退任せしめんことを期す。

更に在野黨とも連繫して、内閣攻擊の鋒を進め、又全國に飛檄して、國民の輿論に訴ふるなど運動が竟に白熱火するに至つたことは、原内相も定めし肝膽を寒からしめられたであらう。

黑岩松下の握手、宮殿下へ進謁

此記者運動の中心となつた黑岩氏の外、更に松下軍治氏が參加されたに就て、余は聊か斡旋した、卽ち新橋倶樂部の事務所でも費用が豐かならぬため、運動も大に積極的ならぬ處へ、松下氏から差當り六百圓を提供したいとの申出があつたので、余は之を受理すべく黑岩氏へ相談した、松山忠次郎氏などは幾分難色はあけつたれど、去りとて芥帶の無い金でもあり、衆議で快く之を受けることゝなり

次で松下氏自身も事務處へ顔出して諸協議に參加し、且當時では極めて稀れな自動車まで自用し居られ、その利用までも承諾されたので、記者團の運動には少からぬ便宜が加はつた。

且それが機緣となつて、黑岩松下間には、アンダアスタンヂング以上の深い交誼が結ばれて、終生渝る所がなかつた、松下氏は名に負ふ投機界の豪傑である處へ、黑岩氏も亦天性の勝負好きだ、花合戰には大褞袍のまゝ咬へ煙管に大趺坐で夜をも徹する蠻骨があり、聯珠五目並べでは、當代無敵の上に撞球でも一方の覇たるに足り、碁も下手な横好き格だがまた心を入れ、唯相場に手出しせぬといふ性格の持主だから、此兩氏は生れながらにして親友たる資格がある、況んや遊興も亦嗜好の一ッで、此兩氏は大谷氏などをも加へて時に吉原の夜櫻見物、娼妓の道中姿一覽などに一夕の遊びを共にされるまでに至つた。

殊に松下氏は奇略縱横、何事をも試みる資性だから、記者團の活動方針は單に原内相攻擊のみに止まらぬ、素より原内相を引退させれば内閣の礎石を取崩すもので、勢ひ倒壞を來すや勿論ながら、彼のシーメンス事件を捉へて山本首相をも痛擊し、此事件あるがために、原氏道德上また默止する能はぬとして、更に運動に馬力を加へた、それが卽ち第三段の作戰なのだ。

此議論は各新聞紙に依ても熱烈に唱へられ、痛く國民を刺擊したのみか、貴族院にも大なる反響を與へたので記者團の勢ひ彌々鋭く、當時參加の重もな顔觸れは、實に左の如くであつた。

黑岩周六（萬朝報社長）△松下軍治（やまと新聞社長）△大谷誠夫（都新聞主筆）△須崎芳三郎（報知新聞主筆）△築田欽次郎（中外商業新報主筆）△山川瑞三（國民新聞主幹）△松山忠次郎（東京朝日新聞編輯局長）△羽田浪之丞（東京日々新聞副主幹）△佐藤忍（二六新報主筆）△倉辻明義（東京毎日新聞主筆）△明石德一郎（時事新報編輯次長）△中村雅二（讀賣新聞代表）△松井廣吉（やまと新聞主幹）

實に堂々たる人々のみで、その紙上及び實際に於ける勢力思ふべしだ。

去れど衆議院では政友會が絕對多數を占め居るがため、之を奈何ともしがたいから、記者團は更に別方面に運動の鋒先を差向けることにした、卽ち内閣を動かすには、國民道德の維持に重きを置く主旨から先づ宮内大臣の意向を確かめよといふので、當時の宮相渡邊千秋翁を高輪の私邸に叩いた、翁は當時病中ではあつたが、問題が問題なので、押して會見を承諾されたので、余等七八名は、自動車に滿載して乘込んだ。

渡邊邸は主人翁の持論で、その嗜好たる盆栽を畫幅や繪の代用に充つる流儀で、室毎に或は金屏風或は銀屏風を置き、玆へ盆栽をあしらふて屏上の繪畫ともするのだ、折節夜中で、輝く電燈の光で盆栽の色とり〴〵なのや其木影枝影が屏上に映ずるさま、如何にも趣がある、余が之をいふと主人翁頗ぶる得意の色であつた。

主人翁は宮中府中の別があるからとて、一切政治談を受付けぬは當然ながら、國民道德の問題としては十分注意しつゝ承はるが、去りとてこれを何とすべきか、十二分に熱慮し置かうといふに止まつて、余等の主張し希望する所と懸隔がある、松下氏の如き相當激語も放たれたが、偖て奈何ともしがたいから兎も角引取つた。

黑岩、松下、大谷の三氏は更に小田原の山縣公を叩かれた、而してその足で直ぐに岩淵の田中光顯伯（前宮相）を訪ふことゝなり、國府津の國府館に一泊し、翌曉東海道下りの一番列車に乘組むからと注意され置いたけれど、其時刻になつても、旅宿の主人始め男女雇人誰れ一人起き出でぬので、三氏は相當金子を室の卓上に置いたまゝ、庭木戸から拔け出て汽車に乘られたといふ珍談もある。

岩淵では主人伯に歡待されて玆に一宿されたが、名にし負ふ十幾萬坪の廣大な山や畑やそれに連る庭園を見て、黑岩氏が其規模景趣に感嘆されると、松下氏は、それ程氣に入つたなら追つて之を足下に贈呈しよう、ナニ此處で無くとも玆と相似た處を手に入れる位難事ではないなどゝ、例の豪放極まる大言に、一同哄笑されたといふ。

斯くて更に島田三郎氏の紹介で、內大臣伏見宮邸の三島事務官を往訪して、余等の意見を申述べ、追つては宮殿下に拜謁したいことを附言し置いた、多分その結果であろう、三島氏から電話で出頭するよう申越されたので、一統勇み立つて自動車を紀尾井町の宮御邸へ驅つた。

その間新聞記者の立場として、餘り實際運動に參し度くないとて、故らに遠ざかり居た某氏へも宮家からの御沙汰を電話すると、其人は卽坐に駈付けて一行に加はられた。

宮邸では應接室から御會見所とも申す處へ通され、謹んで控へ居ると、伏見宮殿下が三島事務官を隨へて臨御あらせられ、お前達は國家のために就て種々憂慮し吳れられる由、忝く思ふ、依て大體其趣意をも承はり置かうとの仰せがあり、黑岩氏から恭々しく大體を申上げ、尙松下氏その他からも若干補足して申上げた、始終聞取らせ玉へる殿下には、更に、尙巨細のことは事務官まで申述べるよう、又自分に面會の必要もあらば幾度にても申出づるようにとの仰せで、一同最敬禮の間に引取らせられ、皆に茶菓を賜はつた。

最後の請願書、嚴肅なシーン

記者團の運動は、眞ッ先に原內相を攻擊してその責任を問ひ、更に山本內閣そのものが海軍疑獄まで生じたことを中心としてその倒壞を企て、第一に宮內大臣を動かぬ人とし、第二に內大臣宮殿下に直接進言したれば、更に最後の手段として、國民の持つ請願權を行使することゝした、理由は申すまでもなく山本首相と原內相との攻擊を主とし、來るべき御卽位の大典に於て、斯る首相や內相を參列させることは、國民道德上將た御大典警衞上、寒心に堪へぬといふにある。

記者團の決議その他の文書は旨を承けて大抵余が執筆したが、天覽にまで供へ奉る請願書は、余殊に齋戒して之を認めた、その全文草稿は不思議にも余の筐底に保存し有たから之を左に掲載する。

大正三年三月四日臣黑岩周六等誠恐誠惶謹みて　叡聖文武天皇陛下に請願し奉る伏して惟みるに

陛下　先帝の遺圖を紹述し鴻謨を恢宏せむとして夙夜勵精大に治を求め玉ふ臣等感激の至に堪へず唯々輔弼の重臣其職を誤り將に不測の禍を釀さんとす是れ臣等憂懼禁せず敢て天閤に訴ふる所以也

本年一月伯林裁判所が獨逸皇帝の名に於てカアルリヒテルに下したる宣告文に由り日本海軍收賄の一端暴露せらるゝや國民は爲めに　陛下の海軍をして威信を中外に失はしめ延いて帝國の名譽を損すること大なるを憂ひ、二十有餘年來海軍の權柄を握れる內閣總理大臣伯爵山本權兵衞の引退を求め其責任を明かにせんことを期待したり且國民の間往々にして權兵衞を目して收賄の張本となし疑を其家產にすら挾むものあり然るに權兵衞等閣臣の爲す所は國民意圖の外に出で海軍廓淸の誠意なく却て動もすれば事實を掩蔽する形迹あり、衆議院は亦權兵衞を援けて其非を遂げしめむとす而して國論大に沸騰し民心痛く激昂するに及び內務大臣原敬は深く其事由を省みず强ひて警察權を用いて民意を壓倒せむと欲し或は警察官の劍を拔きて臣民を斬るあり或は視察の任にありし臣等新聞通信記者を傷害したるあり或は平服以て群衆の間に混じ故意に激語を放ちて良民を煽動し　陛下の赤子を驅りて暴民たらしめむとしたるあり或は輕々しく　陛下の軍隊を出動せしめ或は咄嗟の間市中の行人四百三十餘人を捕縛し一二日を經て其四百十餘人を釋放せるあり或は敬が私邸に暴客を潛め往訪の新聞記者を傷害するに一任したるあり是れ皆　陛下の赤子を見ること土芥の如く　先帝の定め玉へる憲法の精神を滅却せむとするものにして臣等の憂懼に堪へざる所なり臣等は臣等職分の安全なるべき保障を求むると共に又人權を擁護し立憲の大旨を支持せむが爲め更に其責任者たる敬の引退を求めたりと雖も敬は毫も良民の苦痛を恤まず又陛下輦轂の下を騷擾せしめたるに恐懼せず强辯以て其責任を回避せむとす臣等謹みて惟ふに未だ曾て輔弼の重臣にして瀆職の疑を受くること權兵衞の如く甚だしく人權を蹂躪すること彼の如く極まれる者あるを聞かず臣等恐る正義人道は之が爲めに依據を失ひ大正新正の精神は之が爲めに阻礙せられ　陛下の聖德を累はし　先帝の遺業を傷け奉るに至らむことを更に悲しく惟みるに今年十一月　御卽位の大典を擧げさせ給ふに方り依然權兵衞をして閣臣の首班たらしめ敬をして保安の重職に居り大禮使長官を兼ねしむるは臣等の最も恐懼惶悚に堪えざる所なり

仰ぎ願くば　聖鑑を垂れ給はむことを臣等尊嚴を冒瀆し奉りて恐懼に堪へず謹みて罪を待つ臣黑岩周六等誠恐誠惶頓首百拜

此請願書は奉書に認めて相當の裝飾を施し、連署者皆謹みて氏名を自記したこと勿論だが、之を奉呈する時も幾んど嚴肅なシーンを現した。

當日一統は通常禮服としてシルクハットにフロックコートで、自動車を阪下門から入れ、請願書は古代紫の帛紗に包み羽田浪之丞氏が恭々しく捧持し、玄關口から宮内省の吏員に導かれて、先づ内大臣の御室に入つたが、玆には正面ストーヴ臺の上に伏見宮殿下と文事秘書官長股野琢氏の名札が朱書の方を出して並べられてある丈けだ、此室を通り拔けてから幾つかの長い〳〵廊下を進んだが、廊下は幾つかの段階を經る毎に高くなり、又その左右には處々に幾室かがあり、或る一室の奥正面には、赭色塗りの大きな觀音扉や、同じ色の藥簞笥と思はれるのがギッシリ積み重ねてあるのも見えた、或は侍醫寮の一部でもあろう、斯くて廊下を登り盡して左折した處に、宮内大臣秘書官が控へ居て、恭々しく請願書を受領し、總て正式に大臣へ達し、大臣から至尊の御手許へ奉呈する旨を告げ、斯くて一應余等も小憩の上、肅々として引取つた。

廊下の窓外は、大内山の翠色濃く、折節冬の末、春も未だ淺いけれど、森嚴の氣人を拍つを覺えた洵に別天地である、余等の運動は之を最頂點とする、竟に至尊をも煩はし奉つるに至つたことは、洵に恐懼に堪へぬけれども、また是れ昊天に號泣する赤子の至情に外ならぬ。

豫算不成立で總辭職、原敬氏の潔い態度

記者團が最後の手段として、恐懼しつゝ請願書を奉呈して、それが世間に知らるゝ上、人心殊に反内閣氣分は更に數層白熱化し、衆議院の多數黨も幾んど顔色を失ふたのみか、貴族院に於ける非内閣氣勢は益々高潮し往くのも當然であろう。

山本内閣は陸軍の輿論たる二個師團問題を差措き、海軍費のみを多く請求した、衆議院は之に對して約三千萬圓の節減を加へて貴族院に回附し、貴族院の或る一派はシーメンス事件の責任を問ふに鋭意し、豫算討議の際若内閣が此事件で當然の態度を執らば衆議院の決議を承認すべき意向であることを條件として密かに内閣へ交渉したけれども、山本首相頑として承諾せぬので、貴族院の有志も、最早施すべき術なしと見切りを付けた。

その結果、豫算討議の當日（三月十四日）彼の勅選議員の一人たる村田保翁が老軀を提げて登壇し痛烈にシーメンス事件を攻擊して餘力を殘さず、自分は之を最期の御奉公として貴族院議員たることを辭するとまで述べ、聲涙並び下るの慨を以て、滔々として海軍々事費七千餘萬圓全部削除を主張した。滿場恰かも水を打つた如く、翁の主張は大多數を以て通過した、即ち山本内閣の運命は全く決定したと申して宜い。

貴族院の決定に由り、玆に衆議院との兩院協議會が開かれたが、貴族院の硬化は寸分だも搖がぬので、海軍費から延いて豫算は不成立となつた、衆議院に於て政友會が絶對多數を占めて、總ての反對内閣不信任決議案、上奏案を始め、總て一蹴し得たけれども、貴族院の一擊で、總ての力も奈何なる

能はぬ。

斯くして三月二十三日から三日間卽ち開期終了まで議會を停會し、二十六日を以て閉院式を行はれたが、同時に內閣總辭職となつた。

山本首相は流石に强い執着を以て、何等かの方策を試みようと企てたけれど、原內相が堂々として立憲の常道から、辭職の外に出づべき途なきを主張したので、首相も流石に我を折り、全閣僚一致して辭表を認めたといふ、原氏の態度は戰ふ丈け戰ひ、敗るれば潔く去る、正に立憲的態度として稱すべきであらう。記者團の目的は玆に至つて略々貫徹し、一應は凱歌を奏したものゝ去りとて山本內閣倒壞のまゝ直ちに團結を解くべきでもないと做し、寧ろ立憲の正道を明かにして、相當の內閣の成立するまで見守ることゝし、有志丈けは依然團結を繼續し、且此前後から事務所として元の帝國黨跡の內幸町一丁目の建物を借受けた。此堂々たる西洋館階上の會議室が余等の集會所事務所として、新たに記者倶樂部の看板を揭げたが、建物が後に升巴陸龍氏の有に歸し、氏がその事務所兼雜誌黑潮の發行所としても總て階下の各室で辨じ、二階の大廣間丈けは、依然倶樂部に充てられた。

次で建物が秋田淸氏（二六新報社長、後に內務省政務次官）の有に歸しても、依然倶樂部を存置した、その四壁に黃庭堅の行書の幽蘭賦三十幾枚かの大幅を掛並べなどして、余等は閑暇あれば碁將棋にも耽り、秋田氏も屢々參列して、無鐵砲だが可なり鋭い將棋など鬪はし居られた。

併し此間に脫退したものもあり、松下氏、羽田氏の如く病死されたのもある、或は八人組といはれ、六人組などともいはれたが、最後まで踏留つたのは、恐らくは大谷、須崎、倉辻三氏と余とで、これは時々政治運動なども試み、黑岩氏が新聞記者の重もなる團體たる春秋會の會頭となられても、又其歐洲大戰の講和會議に出掛けられるまでも、絕えず此倶樂部を根據とされてあつた。

次の內閣成立は、殊に努力する所もあつたから更に之を述べ置かう、これ亦今日まで未だ文獻に顯はれぬ事實で、或は政界の一側面史たる多少の價値もあろうからだ。

第二十九　大隈内閣成立

鰻香内閣命名の元祖、大に井上侯に說く

大正三年三月山本内閣總辭職を爲すや、直ちに元老會議は開かれ、山縣公、松方侯、大山公協議の上、政友會總裁西園寺侯を推薦されようとされたが、流石に侯は應ぜられなんだ、山本内閣は薩閥と政友會とを基礎としたる以上、憲政の常道としては、在野黨たる同志會を主として後繼内閣を組織させるが當然であるのに、當時の元老は政黨内閣は勿論、憲政の常道などを理解せず、絶對多數黨を有するものならでは不可なりとて、茲に西園寺公を目指したのだ、去れど公は諸元老よりも卓識で憲政の常道を解せらるゝ故か、將た公自身引退の念ある故か（必ずしも曩の御諚を遵行し得ざりし爲のみでなく）即時元老の推擧を刎付けられた。

斯くて元老會議は、徳川家達公（貴族院議長）を推薦した爲、公は三月二十九日御召を蒙むつて參内し、新内閣組織の大命を拜されたけれど、素より其心なく、一應引下つて徳川一門の會議を開いた上、明白にこれを拜辭された。

茲に於て元老等は更に清浦奎吾子を推薦したので、子は大森の自邸を出でゝ東京府知事の官舍（芝公園）に入り、茲で新内閣組織の準備に取掛られた、蓋し當時の府知事宗像政氏は熊本縣出身で清浦子と最も昵近ゆゑ、子も幾んど宗像氏を參謀とされた形であり、同じ熊本縣人たる内田康哉伯（當時は男爵）林田龜太郎氏は申すまでもなく、生え抜きの自由黨員として政友會員たる井上敬次郎氏等までも懸命に奔走された。

余等は格別同志會を最員にするのでもないけれど、憲政の常道としては、在野黨たる同志會、國民黨（犬養氏）中正派（尾崎氏）等を基礎とすべきであるとの見地から、極力清浦内閣の成立に反對する方針を執り（國民新聞の山川瑞三氏の如きは、同じ熊本縣人たるの故で大に躊躇された、併しその口から清浦子の消息は能く知るを得た）。

竟に黑岩、須崎、大谷の諸氏と余等は、子爵に會見を申込んだ上、華族會館に於て子爵に面晤した處、子爵は閣員詮衡中、今や海軍大臣候補者なきに困難しつゝありと語り、諸君御心付きの適任者なきやとまで申されたが、余等は此場合、子爵の内閣には憲政の本旨に照して贊成し能はぬと述べ、寧ろ潔く辭退さるゝを望むとまで直言した、子爵はその實政權を得るや否や不定で、謂はゞ鰻屋の店前を通過してその匂ひを嗅いだに止まるかも知れぬなどと洒落れられ、余等は兎に角善意の忠言として、斷念さるゝが賢明であることを申述べて引取つた、後に子爵が大命を拜辭さるゝや、黑岩氏は諧して

鰻香内閣といはれたが、是れが實に後までも此流産内閣を鰻香内閣と綽名した發端である。

聞く所によれば、當時陸海軍大臣を得るが難問題で、陸軍の方は山縣公の口入といふより寧ろ命令的交渉で、岡市之助氏と内定したけれど、山本伯、齋藤實男（前海相）等の推薦された加藤友三郎大將は臨時議會を開きて海軍補充計畫費三年度年割額を追加豫算として請求するか、然らずんば責任支出とすることを條件として提出された、清浦子及幕僚等はその不可能旦不法なるを以て之を拒絶した爲、海軍部内からは到底、大臣候補者を得能はぬこととなり、茲に一切の計畫に頓挫を來したのだといふ。

清浦子が内閣組織に努力中にも拘はらず、余等は此場合寧ろ大隈伯を起たしめ、同志、國民、中正の三派を統率させるが最便といふより、最正の策だと信じ、それで諸方面に運動した中にも、黑岩、松下、大谷の三氏は内田山邸の井上侯を訪ひ、熱心に隈伯推薦を主張し、民間輿論の所在をも陳辯大に努められたので、兼てから大隈嫌ひで名高かつた主人侯も、一代の快傑だけに心機一轉、頗ぶる三氏の說に感ぜられたが、當日侯邸に在つた望月小太郎氏は、潛かに三氏の椅子の影に在つて主客の談話を聽取ると共に、主として主人侯の意向に注意されたといふ。

斯くて清浦子竟に辭し、再び元老會議を催ふされた處、折節沼津御用邸に御避寒中の皇太后宮陛下（照憲皇太后）が御不例で、御氣先極めて不良との電報が傳へられたので、元老等彌よ新内閣の成立を急ぎ、竟に井上侯の進言を容れて、大隈伯を推擧することに折れ合ふたといふ。

斯くて望月小太郎氏が井上侯の使者として早稻田邸に遣はされた結果、伯は取敢へず同志會總裁加藤高明氏（當時は男）と内談の上、内田山の井上侯邸を訪問し、更に十二日各元老とも會見され、十三日參内、新内閣組織の大命を拜受された。

記者團の發言權、在野黨へ挑戰

内閣を倒したものが次の政權を得るといふのが憲政の常道といはれぬまでも、政黨内閣の特質の一ツである以上、山本内閣倒壞に邁進して、聊かでも功績を擧げ得た新聞記者團は、假令次の政權の分配に與からざるまでも、若干容喙の權利あることだけは、何人も之を首肯せざるを得まい。

況んや大隈内閣を成立さすべく更に努力を拂ふたに於てをや、敢て驕慢ではないが、余等も茲に考慮して屢々大隈侯（當時は伯）を早稻田邸に叩いて進言する所があつた。

禮に嫻はぬ野人の本色丸出しでストーヴの前で袴をたくし上げつゝ松下氏の如きは、内閣は人氣物でもあるから、大々的に陽氣な人物が大臣とならねばダメだ、閣下（主人侯）こそ陽氣で明るいけれど他の加藤さんにしろ、大浦さんにしろ、苦蟲を嚙み潰したような人體ばかりでは甚だしく陰氣である、宜しく大風呂敷屋で且陽氣な後藤新平さんを一枚是非御加へになるようになどと、隨分無遠慮に

申し立てられたものだ。

主人侯も是には流石大笑されたが、併し閣員の詮衡は總て加藤に一任してあるから、其邊の話は直接加藤に逢ふてするが宜い、依て自分から加藤へ紹介しよう、が一ッ注意することは、松下のように、袴裾を捲いて毛脛を叩くなど、自分の處でこそ差支ないが、加藤へ往つたら遠慮するが宜いとのことに、流石の松下氏も頭を掻いて、イヤ御尤もですとばかり、黑岩氏なども吹出さざるを得なんだ。

斯くて一同自動車で番町の加藤邸へ乘込むと、主人の加藤伯は、今日までに内定した閣臣役割の大凡その處を打明け、實は大浦子を如何なる場所に据ゆるかも未定であるが、子自身は何等欲する所ないのみか、都合に依ては全く椅子を得ぬでも宜い、唯國家や黨のため自由に裁量されたいと心から申出られたが、その心事の高潔なのには幾んど感涙を催ふした位だなどとも語られた。

斯くて退出の後誰れかゞ、加藤にも涙があるなど意外だと評された程だ、餘談に亙るが、後に大浦子が二個師團問題で議員買收が法律に問はるゝや、早稲田邸の閣議席で辭職の意を表明し、一統に袂別して悄然退出されたその背後を視詰めて加藤伯は、覺えず熱涙の迸しるを禁ぜなんだと語られたが、大浦子が一切の公職を捨てゝ、鎌倉へ退隱されてからも、加藤伯は潛かに屢々往訪されたようで、余も現に伯が大浦邸（別邸）の裏門を出でゝ狹い路次から歸り去らるゝ處をも目擊した。

大隈侯も加藤伯も、在野黨聯合の基礎の上に組閣するを當然とされ、犬養、尾崎の兩氏にも交渉された處、犬養氏は内務大臣ならば就任しようが、他は一切御免を蒙むるとて中々首を縱に振られぬ、是は古島一雄氏その他の非大隈派が居て、犬養氏を牽制し、大隈内閣假令議會を解散しても、到底政友會を凌ぐ能はず、隨つてその閣運も永からずと見込まれた爲だと推測される。

尾崎氏も亦内務に野心があり、爲に大浦子を擬されたことも實現し兼ね、竟に大隈首相が當分之を兼任して大浦子を農商務省に、尾崎氏を司法省にと内定して彌よ四月十六日親任式が行はるゝに至つたが、その役割は左の如くだ、

總理大臣兼内務大臣	伯爵大隈重信
外務大臣	男爵加藤高明
大藏大臣	若槻禮次郎
陸軍大臣	陸軍中將岡市之丞
海軍大臣	海軍大將八代六郎
司法大臣	尾崎行雄
文部大臣	法學博士一木喜德郎
農商務大臣	子爵大浦兼武
遞信大臣	武富時敏

不幸にして皇太后陛下は四月十二日崩御あらせ玉ふたので、新内閣はその大喪費協賛のため、五月六日臨時議會（第三十二回）を召集したが、無論全院一致で可決し、而して御大喪は其月二十四日擧行された。

六月二十日には海軍々事費を追加豫算として協賛を求むる爲、又も臨時議會が開かれた、それは清浦子が不可能と認めたことを、今度大隈内閣で決行したのだ。

六月二十八日墺國皇太子がサラエヴォに於てセルヴィア人に暗殺されたのが動機となつて世界大戰が勃發し、七月二十八日墺地利がセルヴィアに宣戰したのを冒頭として、八月一日には獨逸が露國に宣戰し、四日には佛國が獨逸に、次で獨軍が白耳義の中立を破つたので、英國も宣戰した、我國も英國と同盟の情誼上、八月二十三日獨逸に宣戰して、獨逸統治の青島を攻略し、次で地中海方面へ海軍を出動させた、之がため九月三日には更に又々臨時議會が召集された。

大隈内閣が歐洲大戰に參加したことは、可なりの英斷であつた、當時大藏大臣であつた若槻禮次郎氏の如きは、その決定までの間、僅少の間ではあつたが、實に言ふことを得ぬ程の苦心を費されたといふ。

新内閣が追つ掛け〳〵臨時議會を成立匆々半ケ年にも滿たぬ間に三回まで召集したことは、一は立憲的で苟くも議會に由らずに豫算以外の支出をせぬといふ趣旨ではあるが、一面また在野黨と何時でも決戰するの勇氣あることを示したもので、爲に大隈首相の人氣は大に揚つたことは否定し得ぬ。

政友會と同志會と入替る、二十一ケ條々約の打明け

斯くて大正三年十二月五日通常議會（第三十五回）は召集せられ、内閣は二個師團增設案を提出した、進歩黨以來同志會も大隈侯も無論之に反對するが必然の結論であらうのに、却つて之を提出したのは、西園寺内閣崩壞の日く付きで、陸軍側年來の主張である上、今や山東の獨逸軍を驅逐するため大陸に兵を動かしたのみか、歐洲大戰に鑑みても、軍備完成を必要とするといふ見地からであつた、即ち戰時氣分が一般國民間に漲溢したので此潮合に乘じて政友會と一戰する策謀も含まれてあつた。

政友會は二個師團問題で西園寺内閣の倒滅を來したけれど、日韓合併の結果之を是認し、唯財政の必要上之を延期するといふに止まつて、本來は增師賛成主義であるが、今更賛成することも出來ず、黨内の賛成派を百方抑制して十二月二十一日の臨時大會に至つて始めて公然反對の決議を爲し、反對者即ち增師賛成者十八人を除名した。

形勢茲に至つては朝野の正面衝突は到底避くべきでないが、恰かも世界大戰中でもあり、且御即位大禮は昭憲皇太后崩御のため一ケ年延期とはなつたけれど、四年の秋には擧行せらるゝからとて、政戰を憂慮するものも頗ぶる多く、澁澤榮一氏（當時は男）の調停まで出たが、政友會は之を肯んずべ

くもなく、十二月廿五日の議場に於て政友會國民黨と一致して、百十八對二百十三の多數を以て增師案を否決したから、內閣は卽日解散を斷行し、總選擧の準備として大浦子爵を內務大臣とし、河野廣中氏を農商務大臣とした、實に大正四年一月七日である。

大隈首相は諸處に旅行して廣長舌を揮ひ、汽車中でさへ演說されたが、余等記者倶樂部も亦政友會の態度を難じて政府側を支持したこと申すまでもない、人氣は實に野黨側を去つたやうだ、大浦子は余等を內相官邸に招じて晩餐を供されたが、子爵が餘り眞面目なので何か突拍子もない漫談でも持出してはなどと野謀を企てた茶目連中もあつた、當夕宴は西洋卓の上へ日本式のお膳を並べ、酌人は近い（日比谷公園側）平野亭の女中らしいが、口一ッ開かぬ謹嚴さであつたので、余が漫談野謀のことを言出すと、流石の子爵も微笑し居られた。食後の打明け談に、總選擧で政友會を破ることは破り得るが、彼黨の數は百五十を下らぬであらうとのことであつた。

然るに三月二十五日の總選擧の結果は、政友會は僅々百四名といふ意外な慘敗振りで、同志會は一躍百五十名となり、外に中正會の三十五人（一人減）と大隈伯後援會の五十餘人（無所屬六十五人中の）を併せて絕對多數を獲得し、反對黨は國民黨の二十七名（五名減）を併せて百三十一名となつた是れで總てはトン〳〵拍子に參る筈だ、卽ち五月二十日に開かれた臨時議會に於て、增師案は二百三十二對百三十二で通過し、前年度豫算に對する追加豫算も總て成立し、原氏自身陣頭に立たれた外交彈劾案も、大浦內相彈劾案も、總て一蹴されて了つた。

此間に加藤外相は所謂對支二十一ヶ條々約を締結された、外相は余等數人を一夕番町の自邸へ招じて晩餐會を催ふし、其席上他人を斥けて、國家のため祕密を守られたいといふを前提として、對支交涉の大體方針を打明け、その援助をも求められた、新內閣成立匆々、外務省令で言論拘束の形迹あるや余等は强硬にその抑止を首相にも迫つた結果、余の起草した覺書を外務大臣に提出し、余之を持參して外務省に出頭し、內閣書記官長江木翼氏が首相の旨を承け幾分加筆して余等の主張を容れ、唯若干外務の面目を立てることとして、之を幣原次官に手交したことがあり、外相には心中多少隔意あつた余等も玆に釋然としてその誠意を諒とした。

加藤伯（當時は男）は如何にも無愛嬌のようだが、中々粹人で、下野の後も往々宴席を共にし、且數度余等を兩國の大又などに招飲されたこともあり、侍姬の選定からして凝つたもので、伯自身淸元などウナられる美聲は、實に感に堪へぬ、同席の濱口雄幸、安達謙三の諸氏がヌーボーや不氣轉なのに對照すると實に天地の差があつた。

對支二十一ヶ條々約は大正四年一月十八日北京に於て我公使日置益氏から、支那大總統袁世凱に草案を提示して以來幾回か交涉を重ね、五月四日元老會議同六日の元老大臣及び參謀總長、軍令部長等の御前會議となり、最後通牒を支那に與へて八日其承諾を得、二十五日條約調印を終つたので當時の

支那に對する壓迫といふは謂ふものゝ、隨分キビ〳〵した遣口なので、國民は多く以て痛快とした（併し井上侯等は大反對で政友會の彈劾をも招來するに至つた。）

第三十　大隈内閣成績

内閣改造、大浦子引退、森久保派を驅逐

大正四年六月の臨時議會に、政友會が僅々百四名の少數にまで叩き落されたのは、一に選擧干涉のためだと怨恨し、種々毒言を放つと、大隈首相は之を一蹴し、若し事實であらば法律の制裁に訴へよまで傲語されたので、政友會は益々躍起となり、竟に村野常右衞門氏が黨總務をも辭して大浦内相を告訴した。此告訴事實は内相が白川友一氏から收賄したといふのは無實で物にならなんだが、裁判官殊に平沼驥一郎、鈴木喜三郎、小山溫の諸氏の息が掛つた檢事訊問の結果、二個師團增設案で子爵が政友會の若干名を買收したことが問題となり、子爵は終に一切の公職を拋つて鎌倉の別邸に退引された。

此ため大隈首相以下全閣僚は七月三十日辭表を捧呈したけれど御聽許なく、竟に留任したが、唯加藤外相、若槻藏相、八代海相は留任を肯んぜず。仙石鐵道院總裁、濱口大藏參政官、安達外務參政官亦退いた。依て八月に入り其補充として武富時敏氏を藏相に、石井菊次郎子を外相に、一木喜德郎氏

を内相に、加藤友三郎大將を海相に、高田早苗氏を文相に、箕浦勝人氏を遞相とした。(翌年三月には大島健一中將が陸相となられた)是で石井、加藤、高田、箕浦四氏の新入閣があつたのだ。

大浦子は素から清廉潔白を以て聞へた、それが瀆職のため一切の公職を捨てられたのだから、貴族院始め世間の同情は實に翕然として之に集まり、全國から種々の寄贈品などがあり、當時の鎌倉驛員を驚かしたといふ。子爵は爵位を拜辭すべく、出願せられた處、聖旨許し玉はず、江木内閣書記官長が子爵を訪ふて、大浦は先帝の遺臣である。その爵は先帝の賜はつたので、朕の時之を辭さしむるのは是れ朕不孝の子たるに齊しいと宣はせられた次第を傳へられると、子爵は涕涙滂沱として嗚咽し、聖恩優渥茲に到る。微臣死しても餘榮ありといはれ、江木氏も坐ろに貰ひ泣きされたといふ。

議員買收は初期議會に山縣内閣が之を試みて以來、幾んど罪惡でないが如く視られ、現に星亨氏の如きは公々然取引するといふ豪放振りを示された。原敬氏の内相時代、郡制廢止案の時もそれがあり、大浦子の如きは爲に切齒して潛航運動を續けられた。又第三次桂内閣で護憲運動の起つた時も、松室法相から北海道その他の利權問題で、元田肇氏以下若干人を拘引しようと主張されたけれど、桂首相は政敵に充つるに法律を以てするは卑怯だとて斷然刎付けられたと聞く、又伊澤多喜男氏などは原敬氏の議員買收に就て、歴々たる多くの證據を蒐集し得て、大浦子のため弔ひ合戰をしようとされたが、生憎法律上の時効で出來なんだといふ。大浦子は此買收を增師卽ち國家のためだとせられたので、現に其間何等の私がなかつた。天下の同情の集中されたのも當然であらう。

子爵は曾て余に、南米に成功した山縣某(中村清次郎氏の實兄)が成金となつた時、金子なら何程でも御用立てるから、政治のため遠慮なく御使ひ下さいとて、二三萬圓の札束をクル〳〵新聞紙に卷いて持つて來たなどと話されたこともあつた。

されば各方面でも愛惜措かず、子爵他年再起さるれば、好個の宮内大臣だとまで評せられたが、惜むべし電擊性腦溢血で、大正七年十月一日六十九歳で薨去された。余は下岡忠治、上山滿之進諸氏の依囑で、香川悅次氏(魁菴)と共にその傳記を編修し、香川氏が專ら材料を蒐集し、余主として筆を執つた。

此間に東京市會議員の改選があり、余等はタマニーホールと稱せられた政友會森久保作藏氏の一派を市會から驅逐し、以て市政を廓清すべしと主唱し、記者倶樂部中の有志を以て市政廓清會といふを組織し、主として森久保氏の地盤たる深川本所の兩區に突擊し、その二級選擧で、同志派の太田清次郎氏を援けて森久保氏を落さうと、黑岩、大谷兩氏と余は兩區の二級有權者を戸別訪問した。

大谷氏は國士たるものが戸別訪問など潔からぬとて、一日で中止されたけれど、黑岩氏と余とは徹底的に遣り通した。自動車の往返せぬ所はテクリ、殊に深川の木場などは、全く迷路に入たようで、太田派事務員の老人が案内し吳れて、辛ふじて訪問し廻つた程だ。

訪問中には、米問屋の主人公など、傲然として木で鼻を括つたやうに挨拶するもあり、古金買ひの親方で、晝寢のまゝフンゾり返つて挨拶するもあり。又或る白髮の老翁は、自分は森久保派の凝り固まりだから、ダメだ〳〵と手を揮るもあり、或は錢湯屋の裏口から訪問して、流し口を測らず見るなどの珍談もあり、中には又折角大記者の御訪問だからなどと、難有がらぬばかり優待し吳れるのもあり、兎も角相當の効果あつたと感じた。

或る時森久保派の三多摩壯士が入込んで、一行を襲擊するとの警報もあり、歷訪を差控へてはとの注意もあつたが、余は壯士など人の命を取る勇氣はない。高が手足を挫く位のものだ。斯くすれば却つて敵が人氣を失墜するのみだから、大勝疑ひないといふたので、黑岩氏も全く然りだとて戶別訪問を續行された。

選擧法が矢釜しくて、太田事務所では、辨當が三十五錢限り、麥酒は湯茶代りで一本だけと制限されて居た。而して途次太田氏の邸に立寄ると、夫婦で優待されたが、唯一皿の鮨を折柄のお八ツとして出されたのみ、御禮などして選擧法違犯となつては相濟まぬから、總てを差控ゆるが、他年諸君が御家屋建築の場合には、職業柄良材を差上げませうなど言つて居られた。太田氏は其本家と共に木場の大きな材木問屋であるからだ。

此選擧には美事に森久保氏を落し得たのみか、政友派を思ふさま驅逐し、而して兼てから聯絡を取つた豐川良平、中野武營氏等も當選され、市政一新の兆が著しかつた。

去れど余等の廓政會から種々の提議をしたので。竟に豐川氏等とも若干の衝突を爲し、市民其他からも、記者連中山本內閣倒壞以來、勢ひを恃み過ぐるといふ批評もあつた。泰否の戒、實に注意して守るべきだと余は時々考へざるを得なんだ。

その特種政策、憲政會の成立

大正四年十月十日には京都に於て御卽位式が行はせられた、先帝の定めさせ玉ふた規定に由る始めての大典で、實に莊嚴を極めたものだ。大隈首相は當日紫宸殿の階下に進みて萬歲を三唱されたが、何分にも隻脚で、進退徒步不如意であるから、隨分辛苦されたであらうけれど、一代の御大禮なればとて、參列の名譽としても强いて大役を奉仕されたことを承認せざるを得まい。余等も山本內閣彈劾に於て、山本伯の如き原氏の如きを排した關係からも、玆に聊か怡悅を禁じ得ぬ。

所謂對支二十一ヶ條々約は、支那人が國耻として排斥する丈けそれ丈け、日本に取ては、有利と視ねばならぬ。勿論歐洲大戰中、强ひて支那を屈服させたといふので、英國邊にも內心熾烈な反感があり、それが大使の井上勝之助氏から父の侯爵に報ぜられ、爲に侯爵が立腹され、延ひて諸元老の加藤外相攻擊となつたことはあるが、併し關東州統治や、南滿洲鐵道の繼續期を九十九ヶ年と外交上の最

大長期と爲し、更に蒙古方面までの利權を確立したことは、決して閑却すべきでない。それは加藤外相不朽の功績であると共に、又大隈内閣の一特績と稱すべきであらう。

袁世凱が支那改革を利用して、無造作に清帝を退位させて民主國とし、更に巧みに革命派をも操縱して、その鋭鋒を抑ゆると共に、自身大總統となり、更に皇帝たるの野心を起すや、大隈内閣は之を抑止する方針を執つた。前の田中首相なども滿洲から歐洲へ向ふ途次、茲に或る種の策謀を施されたこともある。袁の野心は大隈内閣の反對で挫折し、憤怨疾を護て死去したが、當時それが支那に取て果して禍福如何、今に問題と做すものもあるが、孫文の革命が成就する機運に向つたのを視れば、國民派も今日尚ほ大隈内閣に感謝を禁ぜぬであらう。

二個師團の增設を實行して、年來政局の癌だりし問題を片着けたのも、大隈内閣の功績として、總ての政黨の感謝すべき所であること言を俟たぬ。勿論歐洲大戰の結果として、武器に大發明多く、我れも陸軍緊縮を實行する結果となり、引續き華盛頓會議で海軍縮少となつて、大隈内閣の施設は恰かも時代錯誤の如く見ゆるけれど、兎に角當時は輿論であつた二個師團增設と、海軍補充を實行し、軍部が政局を累はす主因を除き、且海陸の期望を完うしたのは、寧ろ一の功として認めるが至當であらう。

武富藏相が豫算論の著者丈けに豫算の原理に精通し、一家見を以て責任支出を違憲と認め、その在職中頑としてその支出を行はなんだことも、亦特筆すべきである。

日獨開戰に由り、我國が歐洲大戰に參加したことも、亦大隈内閣の殊勳と稱せざるを得ぬこと勿論だ。

去れど人心は倦み易い、大隈内閣成立以來已に滿二年に及んでは、諸事弛緩の傾向があり、殊に元老等の非大隈感情は幾んど嫉妬に變ぜんとするあり。大隈首相その人も亦御大典以降、氣餒へ體疲れた傾向が著るしい、況んや豫算編成にも少からぬ難關あるをや。

去れば大隈首相は五年九月下旬辭意を山縣公に傳へ、次で公然辭表を捧呈された。唯同時に後任者として加藤高明伯を推薦し、上奏文を捧げられたが、それに添へられた別册には、從來の政績を錄して大册子とし、且大正元年以來政局の紛糾したることを擧げ、將來の憲政常道として、平穩の間に政權の運轉を圓滑ならしむるの必要を切言し、上至尊の御信任に依て政治を遂行するには、貴衆兩院の信用を得んがため、國民輿論の支持を必要とすることを明らかにされたものだ。後來西園寺公の如きも、内閣更迭毎に大隈侯と同一趣旨であられたことは掩ふべくもない。即ち侯の加藤推薦は實行を見なんだけれど、此上奏の將來に於ける効果絶無でないこと丈けは認むべきだ。

大隈内閣辭職の後、元老會議（山縣、松方、大山、西園寺の諸公會合）では、朝鮮總督寺内伯を推薦するに決し、十月九日寺内内閣が成立した。大隈内閣は實に、二年五ヶ月の壽命で、決して短かい

方でない。

尙附記すべきは大隈內閣存生中の五年夏中から同志會、中正會、公友倶樂部（五十二名で主として大隈伯後援會）三派の合同談が進行し、十月八日憲政會と稱して宣言綱領を發表したことだ、全黨員實に百九十七名で、絕對過半數を占有した（寺內々閣が解散した爲、政友會が百六十五名もあつたに反し、憲政會は百二十一名に減じた）。

第三十一　大隈侯

附たり加藤伯、珍らしい國民葬

何といつても氣持の宜い、而して政界の人氣役者の隨一は大隈侯だ。

侯が明治の初年に建築されたといふ京橋弓町の家は、後に萬朝報社となり。其珍奇な構造は旣に記した通り、侯は更に九段坂下の俎橋に家を構へられたが、次に早稻田に廣い土地を圍ひ込み、玆に新居を卜せられた。卽ち茗荷畑で、初め余の訪問した頃などは、狹い天神町などを迂曲し、畑や田の間を縫ふて大隈邸の門前に至つたものだ。それが專門學校を建て、高田、天野、坪內三博士を主として大に子弟を薰陶されてからは、其敎育界に及ぼす偉功と共に、土地も亦發展に發展を重ねて今の如く繁昌な場處となつた。

大隈邸內には、立派な溫室は勿論、種々の蔬菜畑もあり、養鷄場もある。主人侯は百二十五歲主義者丈けに、保健に注意深く、就中飮食には細心であつたやうだ。大浦子薨去の際は自身に之を見舞ひ、大浦君は中々攝生に注意されたが、動脈硬化の豫防には心付かれなんだようだ。動脈硬化を防ぐには、

余に祕傳があつて實行して居る。即ち雞肉を煮出してスープとし、これで菠薐草など有効な蔬菜を煮て用ひ、且成るべく林檎を食することだなどと滔々として、例の演說句調で陳べ立てられたこともあつた。

侯は時刻だから、辨當を認めようとて、食堂へ誘はれたことも多いが、飯は無砂搗と見えて薄い鼈甲色をした上米であり、副食物は左ほど贅澤なものではない。併し毎日五六十人の客があるといふ丈けお臺所の繁昌が想はれる。官舍や、招待の場合は極つたように洋食で、殊に辨當といはれる場合は簡單だが、招待には相當贅澤だつた。併し西園寺公ほどでなかつたと覺ゆ。

侯は中〳〵氣前が宜い、曾て何かの記念とあつて、舊藩主鍋島侯や、德川慶喜公を主に朝野の名流約百人程を早稻田邸に招待されたことがあつた。恰かも晴天を期して、廣い庭上を座蓆と豫定されてあつた處が、俄かに雨天となるらしいので、侯は咄嗟に命じて、庭上の粗末な折疊みの椅子を全部大廣間へ持上げさせ、客をして總て之に凭らしめられた。大廣間は疊替をされたばかり、蒼々として如何にも綺麗であつたのに、玆へ土附きの椅子を上げられた氣前は流石だとて、余は圓城寺天山氏と、之を評したことがあつた。此席で慶喜公が一小圓卓に對せられ、澁澤子爵が其前に控へ、主人公と顏と共に身も長い鍋島侯が、着席されたのも一奇觀であつた。

松下軍治氏が曾て、福地櫻痴居士の追薦芝居を歌舞伎座に演ぜられた時、大隈侯も其招待に應じて見物されたが、其御執持役として、吉原桐半の女將、老妓お定や、若松家の老女將お利惠等を充てた。總て侯の昔の馴染と見え、侯も大機嫌で、オー〳〵まだマメで居たかとて、種々と昔話など試み、歸り掛けに、ポンと百圓札幾枚かを彼女等に與へられたので、流石の松下氏も、大隈の爺さんは矢張エライなアと感嘆し居られた。

曾て早稻田邸が自火で燒失した時、見舞客に對して、侯は日本家屋は十六年も經れば、襖や障子などの建付けがゆがむと稱せられる、此家とても やがて建直す時期が來たのだから別段惜くもないヨと言つて居られた。

加藤高明伯は、侯の大藏大臣時代に祕書官となり、外相時代でも亦然りで、兎に角侯に拔擢されたが、後には政治的に侯の相續者と成られたのも奇緣と謂ふべきだろう、侯は加藤伯を評して、彼れは大公使その他を勤め續けて、浪人した時期が少い上、女房（春路夫人）は里（岩崎家）からお化粧料として年々何萬圓かを貰つて居たから、相當小金がある筈だ。政黨の運動費などなら、彼れは相當吐き出させても宜いと屢々言ひ居られた。

此加藤伯はそれでも、金錢に吝ではなく、出すべき處にはドン〳〵出されたけれど、例の几帳面から、使途を明白にされる流儀であつた。そのため窮屈だとて、彼の木下謙次郎氏（後の關東長官）なども、同志會の幹事として相當斬れ味を示しながら竟に飛出された。

けれど加藤夫人は思ひ遣りが深く、加藤伯が遊説中宿泊などされた縁故を辿つて伺侯する地方の女將などをば、格別好遇して、其辭去せんとする毎に、美しい手提げに、旅費に餘る程の財を與へられるが常なので、伯のその方面に於ける評判は頗ぶる宜かつたと聞く。

大隈侯が薨去されて、國葬には成られなんだが、會葬者の多いこと、全國から集まつた贈物などの夥しいことは、確かに國民葬だと評せられたのも、亦一代の人氣役者であつた的確の證據でないか。

第三十二　滿洲の詩人

余の大連時代、殖民地の詩客

余は大正九年春立川卓堂翁の聘と、小泉策太郎氏等の勸めで大連に往き、翁や小澤太兵衞氏等の發刊せんとする大連新聞に參加し、而して翌年の春に辭して二月歸京し、更にその十二月岡崎國臣氏の招きに依つて、松江に來り、松陽新報に從事して今に至つて居るが、滿洲行は實に第四回目で、聊か詩酒に傾むき、殊に松江では風光の美と、總ての平穩さとを賞でて、下手の横好きながら詩に耽りつつある。

大連では何と申しても田岡淮海翁を詩壇の雄と推さざるを得ぬ。翁は始め東亞同文書院（在上海）に教鞭を採られ、後に滿鐵の文書課に入り、奉天の南滿醫學堂文學教授などを兼て居られた。土佐出身で始めからの詩客であつた、彼の嶺雲氏などと同族だと聞く、淮海詩鈔の著もあり、足跡二百餘州に及びて才藻實に拔群である。今や大連は支那本土から避難し來つた詩人墨客も多いけれど、翁は尙其間に立て燦然として光を揚げ、毎月遼東詩壇と題する詩專門の雜誌を刊行される今淮海詩鈔から左

に三四を拔萃する。

秦淮酒間題壁

劫後秦淮鳴咽潮、秋風白下欲消魂、美人名士皆黃土、祇有青山似六朝

漢湯

鸚鵡洲前繫客舟、禹王廟畔夕陽愁、當年何處樓船下、落日西風漢水秋

鄭州

贈芍婆娑士女游、令名子產獨千秋、行人懷古頻回首、斜日淒風過鄭州

途上所見

黃河濁浪去滔々、指點嚴關古虎牢、路近洛陽多險隘、危崖百尺壓頭高

洛陽懷古七首（錄一）

地扼雄關並鎬京、東都形勝自崢嶸、千年郟鄏壯王氣、萬古澗瀍圍故城、南國歌風思敎化、元公相宅費經營、如何寶器裔孫棄、洛水于今恨未平

渡黃河

黃河西來何雄渾、濁浪拍天勢騰奔、搖乾撼坤聲光溢、千年澎湃赴海門、北是晉燕南汴洛、形勝縈回復廓落、英雄逐鹿爭中原、河上幾經勞拏攫、蒼茫誰擬壯帝基、回首歷々歲星移、嬴顚劉蹶空一夢、

猶疑叱咤萬馬馳、今我汗漫彈孤劍、當時南北分天塹、古壘遙指萬仞山、欲敵朔風借酒甕

大連には好詩家が多い、相生鐵太郎（鐵牛）、原田光次郎（恕堂）、福田顯四郎（象外）などの實業家を始め、立川雲平（卓堂）、荒木伊平（天空）、上中治（剡溪）、片岡政保（孤笻）の諸氏もある。立川翁は淡路の人だが信州上田で辯護士をし、其處から初期議會に撰出され、選擧干涉彈劾の演說で雄辯を知られ、當時はクモヒラの綽名をも得られたが、老來意氣軒昂、詩酒益々健だ。

途上口占五首（錄三）

與瓢俱醉倒、花下獨安眠、日暮人皆散、擧頭星滿天、

納涼何處是、一醉曲肱眠、枕上公孫樹、亭々欲達天

紅葉帶風舞、白雲擁石眠、山中棋客在、憑檻夕陽天

上中翁は大阪の藤澤南岳師に學ばれたのだが匿奮體も巧みで、詩格頗ぶる瀟洒だ。その出雲に關する詩を揭げる。

安來竹枝

十神山畔阿嬌家、昆賣埼邊別恨加、誰識郎心堅似鐵、多情明日散如沙、（伯耆出雲國境產沙鐵輸于上國多從此港）

社日櫻開露未晞、已看秋葉帶風飛、茫々春夢覺無跡、伯太川流長不歸、（社日櫻在安來其花殊美伯太

川注于安來港）

片岡孤節は余と同鄕同門で、大正十五年一月大連に客死されたが、晩年頗ぶる詩を善くし、佳作が多い。

長嶺子途上

飈輪一轉下崔嵬、不見喘牛王佐才、磽确眞知稼穡苦、稜々石上豆花開

弔旅順戰跡

夜向水師營上過、月明感慨喚如何、盤龍松樹何邊處、新戰場荒白骨多

北陵

依然形勝帝王州、石馬不嘶殘日愁、剝落丹靑千古恨、白雲黃葉北陵秋

千山雜誌

千峰抽筍鳥難攀、綠樹奇巖猿護關、曲々淸溪四十八、乾坤此處闢仙寰

病中對酒

擁枕呼杯亦快哉、紅潮瘦頰氣崔嵬、奚童侍酒笑相語、半死枯腸春忽回

偶成

陋巷一瓢三十年、功名過眼似雲煙、買山築屋非吾願、甘旨唯求奉母錢

何ぞ聲調の雅なるや、之を余と鄕塾で鬪詩の時の詰屈なりしに比すれば、實に相距る千萬里のみならぬ。而して舊態依然として碌々たる余自ら赧顏を禁じ得ぬ。彼れの死後、卓堂剡溪の諸老相計つて孤節遺稿を刊行された。

第三十三　山陰の詩人

剪淞吟社その他、開拓者は耐雪翁

大正十年の夏、やまと新聞の雜賀梅治氏來訪して、岡崎國臣氏から松江市の松陽新報に往かぬかとの交渉を托されたことを申出られたが、當時余は東京を離れ得ぬ事由があつて之を謝絶した、冬になつて、大谷誠夫氏から松陽に尙ほ缺員あらばとて、余も知て居る某氏紹介のことを談ぜられたゆゑ、余は直ちに岡崎氏を訪ふた處、氏は寧ろ余に往かぬかと百方慫慂されるので、余も心動いて大谷氏との諒解を得、且大連往返の關係から小泉氏とも協議の上、彌よ松江行と決し、密かに山縣公や大岡先生邊にも告別して、十二月押詰つてから單身出發、鳥取市に在る實弟堀猪三郎の家に一泊し、雪を冒して松江へ往き、入社の挨拶やら歡迎宴やらを終つて、歲末の休暇に又々鳥取に往き、翌一月四日松江に歸り、引續き皆美館に投宿し居たが、十五日妻が次男乙郎に送られて來、始めて松江へ家を持つた鳥取の弟は大正十二年春上京し、余は妻と女中とで一小屋に僑居し、爾來細かな英文など一切廢止して、業餘漢詩を樂しむのみとした。

島根には實に詩人の多いに驚ろいた、或る春末夏初に池田索軒翁が來訪されて、松陽新報に詩欄を設けぬかと勸められたが、折角之を設けて、選定者もなく投稿家も多からではと躊躇して居ると、其夏に入てから横山耐雪翁が來られて、自分で撰者とも成り又成るべく投稿を各方面に促がすといはれたので、始めて詩欄を設置して今日に至つた、全國新聞中專門の漢詩欄あるのは稀有だといふが、それ丈け山陰地方には詩人が多いのだ。

横山翁は數年前物故されたけれど、正さしく山陰道に於ける詩壇の開拓者で、醫を業とされる傍、心を詩作に潛め、森槐南、田邊碧堂、矢土錦山、岩溪裳川、土居香國、大久保湘南、永阪石埭、國分青崖の諸名家とも盛んに唱酬し、殊に石埭、槐南の兩氏を迎へて松江に到り、大に風雅を擧げ、又村上琴屋、藤脇松軒、三島睡雨、中島秋圃、田代活處の諸翁と剪淞吟社（命名は石埭氏）をも創立された。

松江出身の若槻禮次郎氏（克堂）が詩人宰相と聞えた丈け、共に風を揚げ韻を汲む人が多く、殊に松平伯爵家の家令で、縣では郡長島司などを勤められた詩人の村上琴屋翁があつて、詩道彌よ擴まり今や剪淞社員の人も二百人近くを數へ、別に靑垣吟社があり、又石見には二聖吟社などがあり、鳥取には結社こそないが、詩人も相當多く、就中園野藏六、橋本栗谿の諸翁が聞えて居られる。

耐雪翁は不昧公以來出雲官民間の詩を選んで出雲詩綜をも公刊されたが、剪淞吟社は後に詩文の雜誌をも發刊して繼續しつゝある、耐雲翁歿後には信田淞北翁が之を主裁され、此翁歿後の現在は、琴

屋翁の外、高橋菊徑翁、谷口廻瀾氏などが專ら編輯その他を幹せられ、青垣吟社と呼應して、月々例會を開きつゝある。

國分青厓翁も大倉聽松男、勝島仙波博士等と島根を訪ひ、詩道の隆んなのに驚ろいて、風光と人情の穩かなのと併せて、極めて氣にいつたといつて居られた。

耐雪翁の詩は恐らくば千を以て數ふるであらう、今余の知る中から左に若干首を抄出し置く。

曼陀亭分韻二首

東風剪々柳絲々、正是松江雪後時、記得七年前此夜、春燈畫壁賭新詩
薄夜簾櫳酒醒時、多情月亦悄然窺、江城一白梅耶白、試使春人玉笛吹

大東酒泉樓送碧堂玉村兩詞宗

抗手相迎揮手分、西風馬背夕陽曛、知君西度簸川水、一路神山窈窕雲

送井川收軒遷東京

怕將鱸膾話前遊、此別渺兮予亦愁、明月松江相送去、芦花淺水一帆秋

送琴屋島司赴任隱岐

絕海煙波盪古愁、官情浩蕩泛于鷗、春風吹入御陵道、細雨空濛是隱州

題井蛙芍藥圖

楊州品第莫俱論、幽賞長懷覆盎門、空剩玉堂春後夢、怕添御府畫中魂、午煙一榻微籠閣、暮雨半簾輕鎖園、寫到破禪花氣好、薰人脂粉淺深痕

松崎水亭邀石埭先生分韻

千里邀高士、山陰落楓秋、昂首遙望駕、海驛暝煙浮、先生寔博雅、詞賦追劉曹、精神姑射雪、標格商巖儔、詩龕與星舫、瀟洒樹竹稠、春髯傳衣鉢、風流拔其尤、夙聞山陰勝、年來思一遊、今茲理行李、鴻飛跡悠々、三丹路絕險、鑿開想金牛、直抵松江上、碧水涵高樓、往訪故侯跡、閑喫茶一甌、撫古低徊久、徧惜夕陽收、翠渡錦海水、仙山落双眸、回棹尋山寺、幽徑聞鹿呦、去拜日隅宮、紫雲籠巖幽、又臨剪淞會、詩酒互唱酬、先生含笑道、煙霞疾未瘳、夢寢探勝志、幸免歸水漚、槐子會遊跡、遺事尚可搜、片石鐫好句、留之新婦洲、嗟我長蒙致、菲才空自羞、吟涙訓何厚、門雪情殊優、何況今秋遊、追陪忘贅瘤、余心一何渺、湖水流不留、莫話明日別、無奈今夜愁、寒風吹驟雨、回潮蕩歸舟

聞含翠將軍談其鄉高遠戰史洧感依賦長句送之

將軍桓々虎豹姿、聰明精鋭由天資、麗醮半夜司七星、三軍士卒歸一麾、憶昔入侍天子側
恩威能御淮衞師、百戰荆舒膺懲日、馬革萬里期裹屍、一朝又鎭山陰地、且養尙武風俗遺
初逢梅花春月夜、再會楓葉夕陽時、奈何嵗栖志忽動、秋風吹夢多所思、前路蒼茫白雲隔